

# 第8回大会

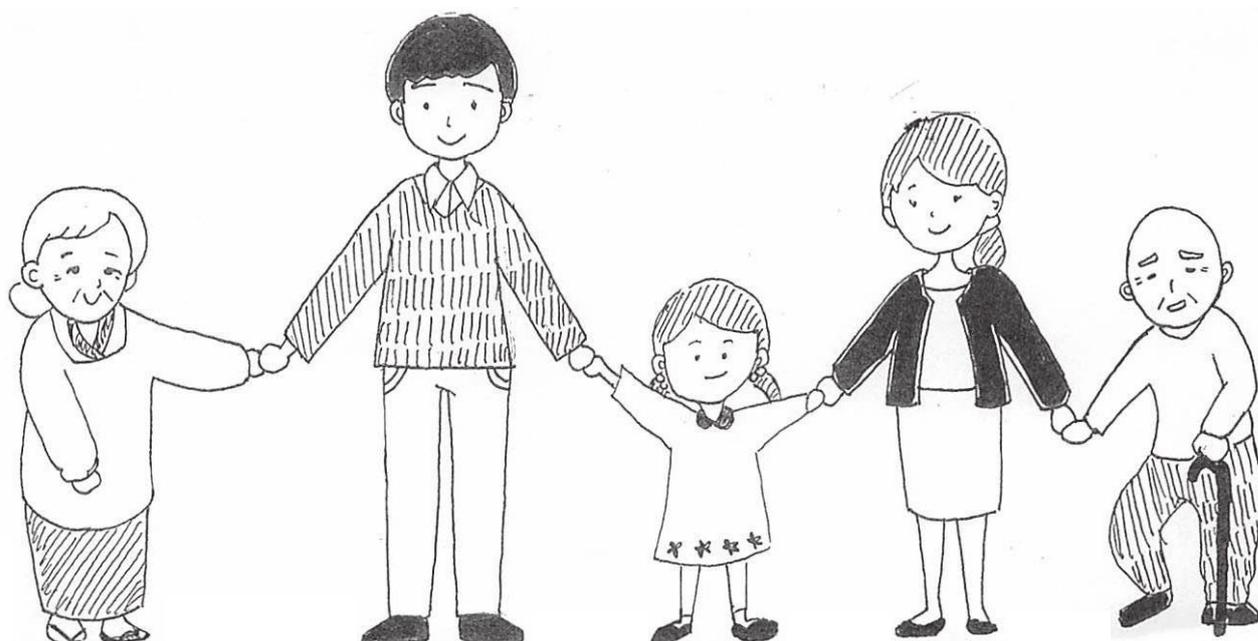
## せたがや福社区民学会

「つなごう、そして育もう」  
～世代を超えてつながろう-せたがや福祉の実践～

### 報告集

日時：平成28年11月26日（土）  
12:00～17:30（開場11:30）  
会場：東京都市大学世田谷キャンパス  
1号館2号館

主催：せたがや福社区民学会  
せたがや福社区民学会第8回大会実行委員会  
共催：東京都市大学人間科学部  
社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団  
後援：世田谷区  
社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会





## 目 次

せたがや福社區民学会第8回大会プログラム.....	4
会場見取り図.....	5
<b>全体会 I</b>	
せたがや福社區民学会会長挨拶.....	10
せたがや福社區民学会第8回大会開催校挨拶.....	11
世田谷区長挨拶.....	12
基調講演「お風呂で健康づくり～医学的に正しい入浴法とは～」 早坂 信哉（東京都市大学人間科学部児童学科教授）.....	14
<b>実践研究発表</b>	
パネル型発表一覧.....	24
教室型発表一覧.....	25
<b>〈パネル型発表〉</b>	
<b>第1会場</b>	
(1) 大学生が地域で活動するために必要なこと.....	30
(2) インターナショナルプリスクールに通う幼児の食育活動方法について.....	32
(3) 医療福祉を身近に取り入れるための店舗経営.....	34
(4) 郷土料理を用いた食育活動：区内インターナショナル幼稚園での 大学生の食育活動.....	36
(5) 社会福祉法人福音寮の地域化の歩み.....	38
<b>第2会場</b>	
(1) 在宅介護者の看取り後のフォロー.....	42
(2) 玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供.....	44
(3) 歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」28年度の取り組み.....	46
(4) 遊ぼう会における障害者支援.....	48
<b>〈教室型発表〉</b>	
<b>第1分科会 子どもとともに育ちあう／子ども、若者のかがやく社会／その他</b>	
(1) 主体性を育む保育、その取り組み.....	52
(2) 児童養護施設における学習ボランティアのあり方	

～学生と子ども・施設・地域の育ち～ .....	54
(3) 高校中退防止のための学びと出会いの場「寺子屋みらい in 善宗寺」 活動報告 .....	56
(4) 地域と学校をつなぐ中間支援機関としてのボランティアセンター .....	58
(5) 児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としての シェアハウス運営 .....	60
(6) 昔遊びやわらべ歌の良さ .....	62
(7) 知的障害のある方を支えるために .....	64

## 第2分科会 働く社会に参加する／協働・連携（チームケア等）

(1) なかまち NPO センターでのわかものの活躍 ～市民活動支援と若者支援のコラボレーション～ .....	68
(2) 将来を見据えた暮らしへの支援 .....	70
(3) 発達障がい特性をもつ方の地域参加サポート .....	72
(4) 手作りお神輿 一緒に夢を担ごう .....	74
(5) A さんとのエピソードを通して利用者支援の醍醐味を考える .....	76
(6) 特別養護老人ホームで働く生活相談員の仕事 ～生活相談員の業務改善とその効果～ .....	78
(7) 地区のケアマネ支援 .....	80

## 第3分科会 最期までその人らしく生きる／認知症とともに豊かに生きる

(1) 前立腺がん患者、再発・転移2年間の感想 .....	84
(2) 転倒事故を乗り越えて～家族、本人が望む生活を支える～ .....	86
(3) 世田谷の福祉資源を活用して、老障介護家庭を支える～現状と課題～ .....	88
(4) 職員視点から利用者視点へ .....	90
(5) Well Being（健幸）の取り組み .....	92
(6) 世田谷区認知症カフェ開設支援事業の取り組み .....	94
(7) 変わった！～見る、話す、触れる、ケアを通して～ .....	96

## 第4分科会 多世代による文化交流／一人ひとりに向き合った実践

(1) A さんから気持ちを支える大事さを学ぶ .....	100
(2) 高齢者所有の空き部屋活用、異世代間同居「ホームシェア」 .....	102
(3) 「老老ケアと異世代交流」への展望—ひこばえ広場「たまごの家」の 実践から .....	104
(4) 『主体性』の発揮を意図して .....	106
(5) A さんの行動から心情洞察できたこと .....	108
(6) ショートステイ中のトラブルへの対処が安定利用に繋がった事例 .....	110

## 第5分科会 生きがい・まちづくり／一人ひとりに向き合った実践

(1) せたがや・ふるさと区民まつりと「世老研」 .....	114
--------------------------------	-----

(2) 新しい出会いから支援のあり方を考える .....	116
(3) 摂食が難しい A 君へのアプローチについて .....	118
(4) グループホームへの移行とその後の経過について GH 利用を自己決定 するまでの歩み .....	120
(5) おでかけサポーターズの活動の紹介 .....	122
(6) 家族との連携を通して本人の生活の安定を図る .....	124
(7) エピソードに人づきあいの変容を見る .....	126

## 第6分科会 地域をつなぐネットワーク

(1) 世田谷セレ部 活動報告 .....	130
(2) いつか来るその時のためにー都立芦花高校での授業の取組みー .....	132
(3) ネットワークを拓げる～砧地域ご近所フォーラムの「特別企画」～ .....	134
(4) 地域における福祉用具連絡会の役割と活動 .....	136
(5) 住民主体の互助を活性化する 10 のポイント .....	138
(6) 地域のだれでも参加！「いっしょに食べよ」～“食”の ワークショップで見えてきたこと～ .....	140
(7) 地域とつながって子育てする～おでかけひろばぶりっじ@roka の実践～	142

## 第7分科会 一人ひとりに向き合った実践

(1) 「立つ、座る、歩く」が快適にできる生活リハビリの取組み ～年を重ねての、寝る、座る、立つを安全に楽ちんに～ .....	146
(2) おむつ改革 .....	148
(3) 適切な評価に基づいた口腔機能維持向上への個別の取組み .....	150
(4) 「私をわかって」～ICF を用いて本人の気持ちを理解する～ .....	152
(5) 特別養護老人ホームにおける回想法の実践 .....	154
(6) ファミリーハッピーライフ リターンズ！ .....	156

## 全体会Ⅱ

大会総括 .....	160
次回開催校挨拶 .....	166
第8回大会実行委員長挨拶 .....	167

## 資料編

せたがや福祉区民学会役員名簿 .....	172
第8回大会実行委員名簿 .....	173
第8回大会実績 .....	174
団体会員名簿 .....	175
設立趣旨 .....	178

# せたがや福社区民学会 第8回大会プログラム

## 1 全体会Ⅰ (12:00～13:00) 2号館1階21C教室

- 会長挨拶
- 開催校挨拶
- 世田谷区長挨拶
- 基調講演 「お風呂で健康づくり～医学的に正しい入浴法とは～」  
早坂 信哉 (東京都市大学人間科学部児童学科教授)

## 2 実践研究発表 (13:00～16:30)

- パネル型発表 (13:00～16:00) 1号館1階(11D、11F)

### 【一斉発表時間】

① 13:55～14:15

② 14:50～15:10

※13:00～16:00はパネル掲示を、ご自由にご覧ください。

- 教室型発表 (13:30～16:25) 1号館1階・2階各教室

第1分科会	11A教室	第5分科会	12B教室
第2分科会	11B教室	第6分科会	12C教室
第3分科会	11C教室	第7分科会	12D教室
第4分科会	12A教室		

## 3 全体会Ⅱ (16:45～17:30) 2号館1階21C教室

- 大会総括
- 次回開催校挨拶
- 閉会

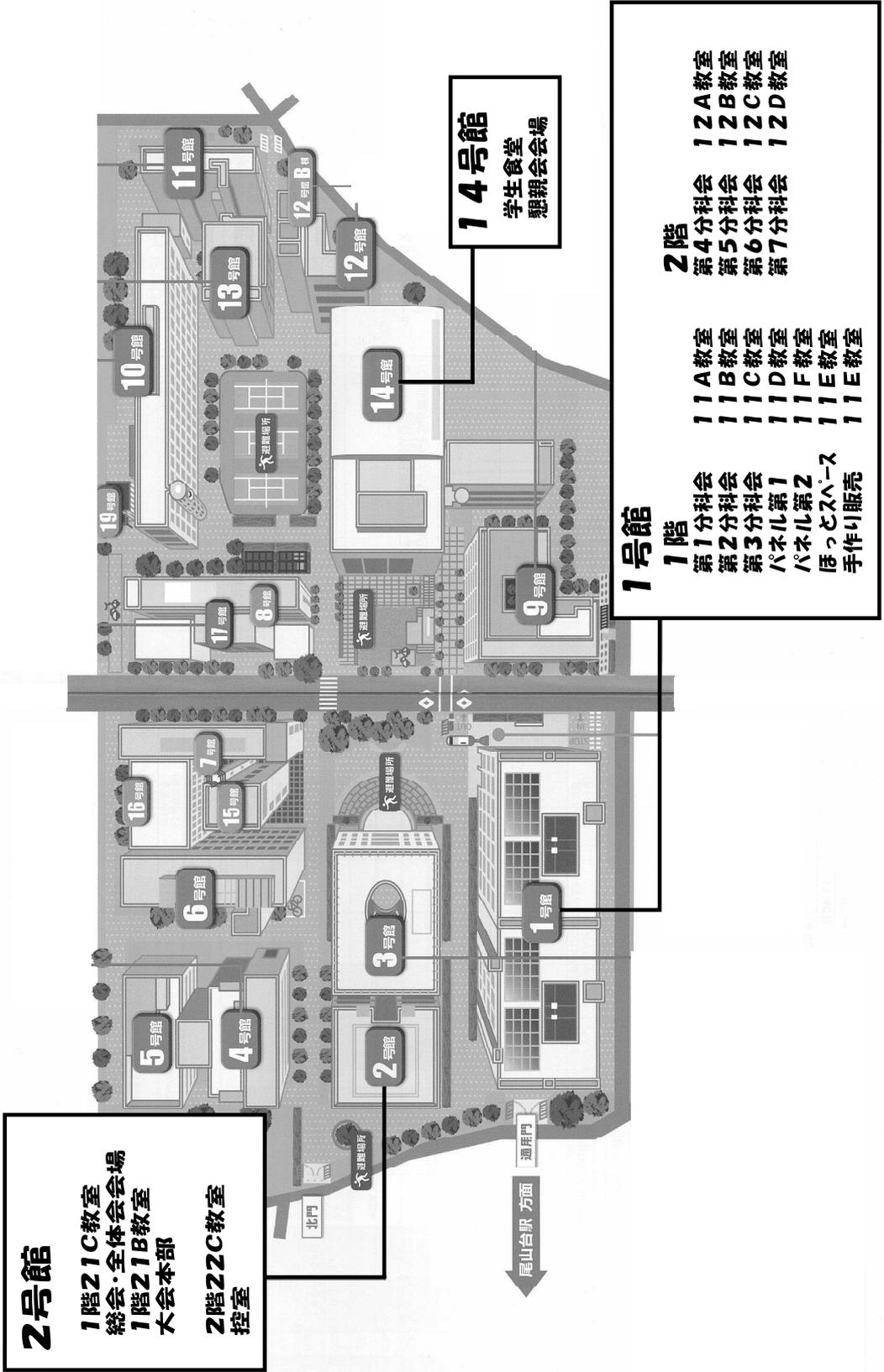
- ※全体会では、ハブネットせたがや(当会会員)によりパソコン文字通訳を行います。
- ※全体会及びご希望の分科会には、手話通訳が付きます。ご希望の方は大会総合受付にお申し出ください。
- ※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学からの学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

## \*懇親会 (17:45～19:00) 14号館1階学生食堂

当日の参加申し込みができます。詳しくは、大会総合受付にお問い合わせください。

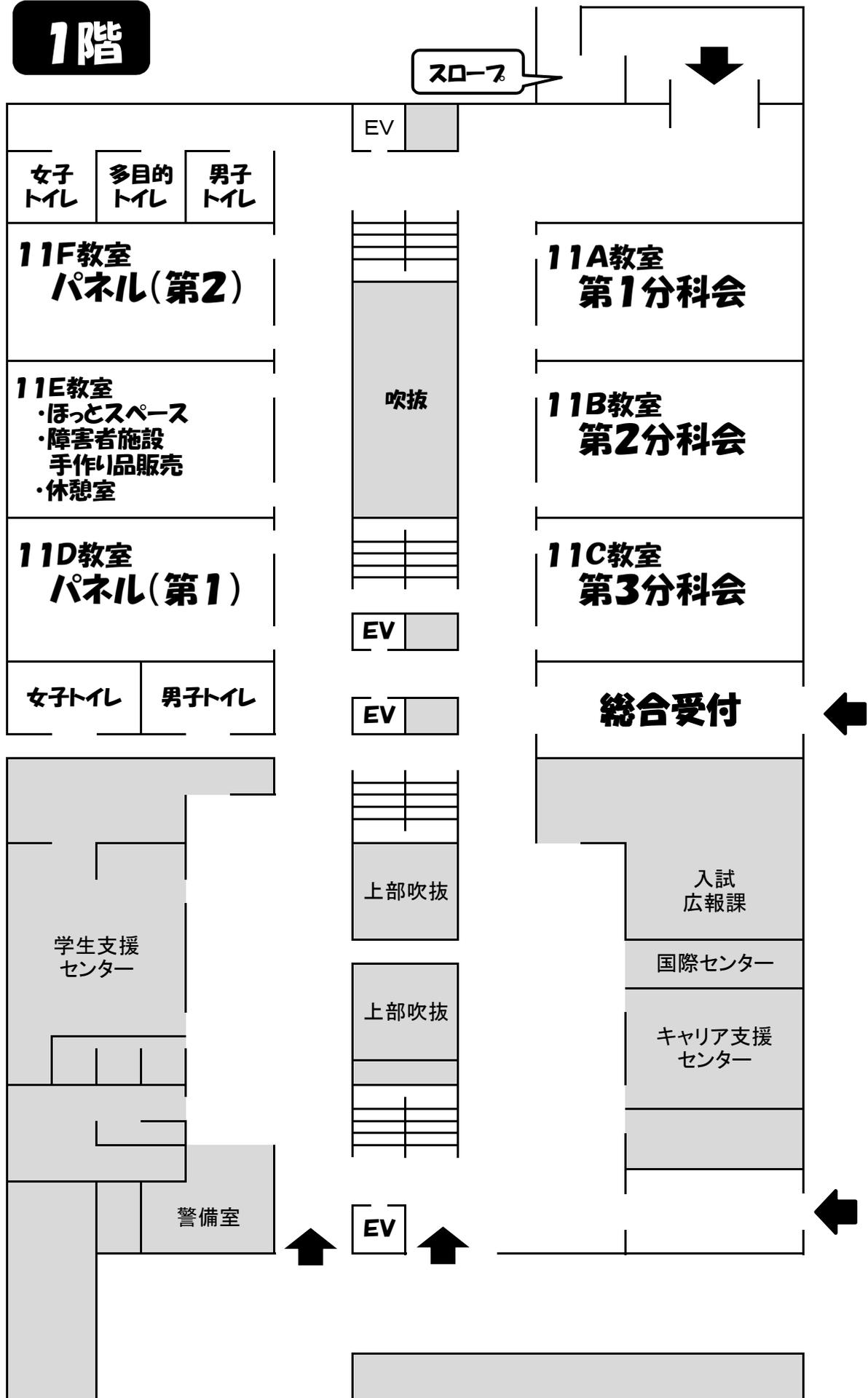
# CAMPUS MAP

世田谷キャンパスマップ



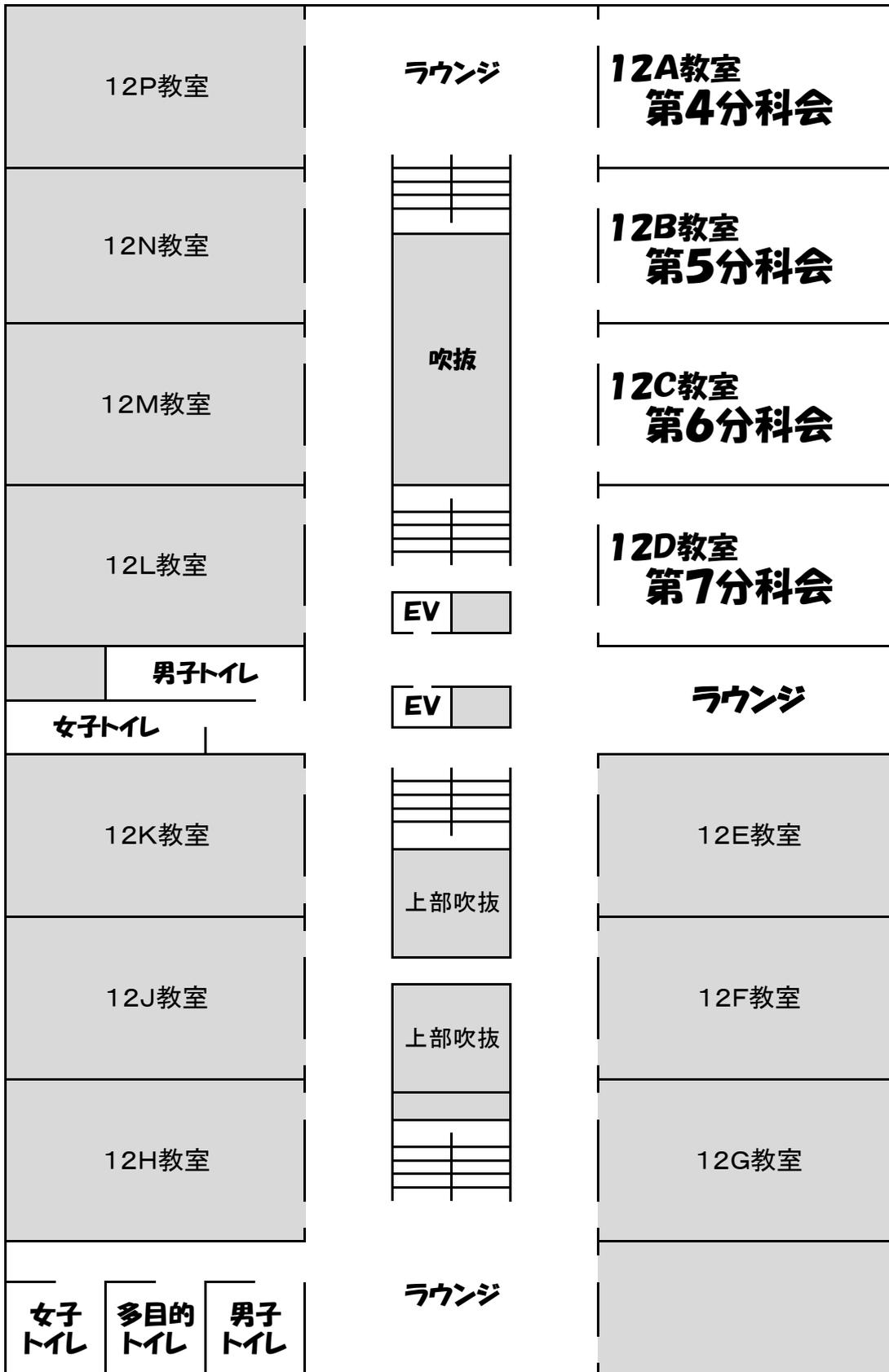
# 分科会会場 1号館

**1階**



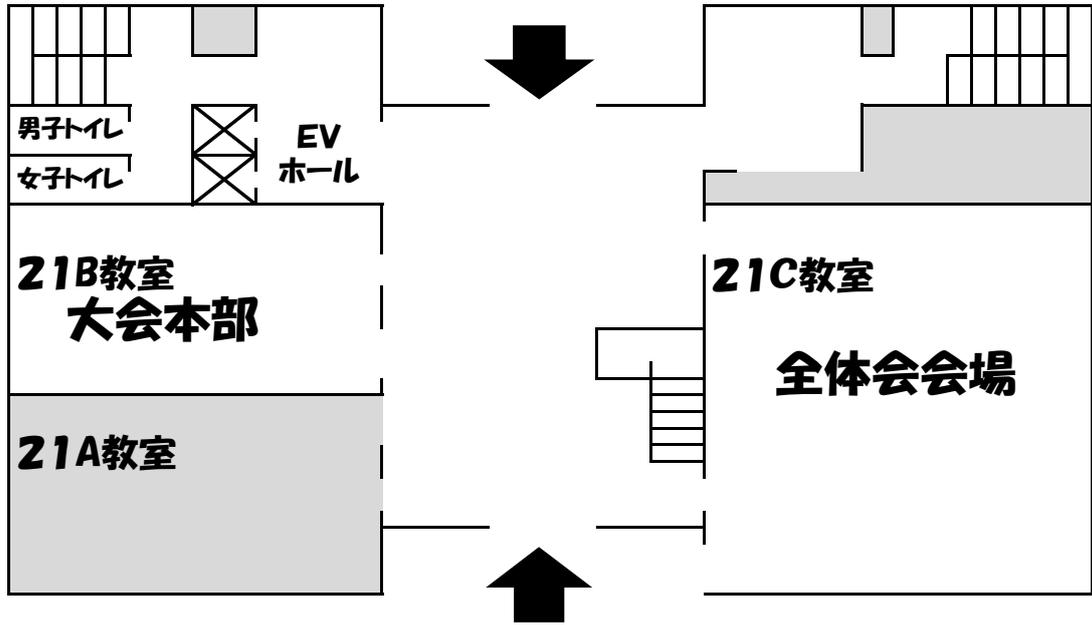
# 分科会会場 1号館

**2階**

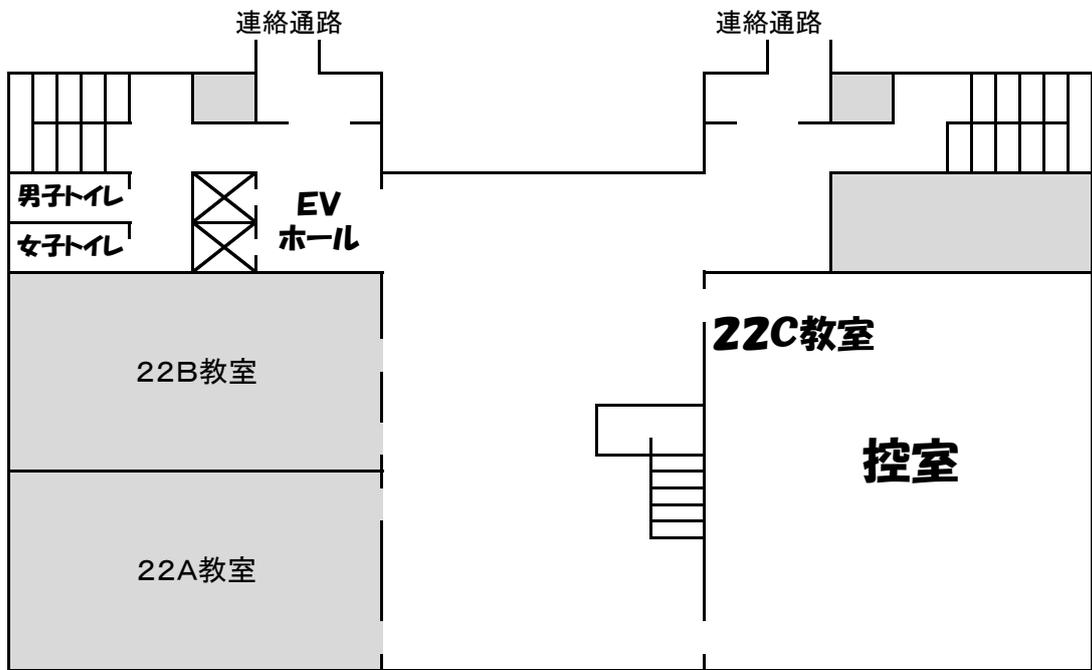


# 全体会会場 2号館

## 1階



## 2階



# 全体会 I



## せたがや福社区民学会会長挨拶

せたがや福社区民学会会長 永山 誠

ご紹介いただきました会長の永山と申します。

先日まで紅葉がとてもきれいでしたが、一転して山に雪が降り真っ白になりました。今日は気温が下がり心配していましたが多くの方々のご参加をいただき、ありがとうございます。

せたがや福社区民学会第8回大会は、東京都市大学の三木学長先生のもと、同人間科学部児童学科園田先生を委員長とする実行委員会によって開催されます。基調講演は早坂信哉先生。そして保坂世田谷区長のご挨拶も予定されております。大会を支えていただいたボランティアを含めた関係者の皆様に、心から感謝を申し上げます。

第8回大会のメインテーマは、「つなごう、そして育もう」で、子育てに重点が置かれています。今後の区民福祉の発展に寄与できる実践や研究につながるよう期待をしております。

ここで1つ、話題を提供したいと思います。私は障害者を厄介者扱いする風潮が気になっています。日本の歴史を見ますと、縄文時代、1万3000年前からですが、住居跡から家族ぐるみの遺骨が発掘され、その中に成人した障害者のものが含まれていました。おそらく生まれてから成人まで、囲炉裏を囲んで家族と一緒に暮らしていたのだと思います。上野の科学博物館に展示されていたのを私は見ました。

次に、712年、太安万侶編纂『古事記』には障害をもつ方が描かれています。何人も出てきますが、簡単に言うと神様扱いです。厄介者扱いにはされてはいません。

次に戦後、1968年、ベストセラーになった『福祉の思想』という本があります。これを書いたのは糸賀一雄さんです。知的障害者を「この子らを世の光に」と紹介しました。障害者を厄介者ではなくて逆に「光」だということです。「世の光」という表現には古代からの障害観と共通するものがあると思います。要するに、障害者を余計者、厄介者とする見方は、日本古来の考え方ではない。

重要なことは、厄介者とする考え方が近年なぜ再度頭をもたげてきたのか、原因はどこにあるのかです。皆さんは、どう考えられるでしょうか。

最後になりましたが、第8回大会の成功を祈念して私の挨拶といたします。

ありがとうございました。



## せたがや福社区民学会第8回大会 開催校挨拶

東京都市大学 学長 三木 千壽

皆さん、こんにちは。ようこそ、東京都市大学にお越しいただきました。心から歓迎します。このキャンパスはちょっと狭いですが、地域との交流、開放を意識して運営しています。食堂等も、地域のたくさんの方に利用していただくなど、キャンパスをできるだけオープンな方向にしています。

最初に、永山会長、役員の皆様、大会の実行委員の皆様、会員の皆様、こういう活動が続けられることに敬意を表します。大変大事なことだと思っています。

今日、発表要旨集を頂いて、目を通しました。専門が違うため、なかなか理解ができないのですが、大変幅広い分野でのご発表がございます。実は私自身、最近、両親をこの近く、桜新町のホームに入れまして、こういう分野の大切さを、身にしみて感じています。

この大会は、都市大学の人間科学部が中心で動いています。実行委員長の園田をはじめ、井戸学部長、多くの教員がこの大会をサポートしています。ただ、東京都市大学としては、福祉の問題を人間科学部だけの問題とはとらえていません。大学全体の方針として、未来都市の都市大と宣言しています。理系の人間が未来都市というと、サイバー何とか、スマート何とかと言うような話や、ロボットの話をするのではないかと思われがちですが、我々はそうじゃない。1つの言葉、スマートエイジングという言葉を使っています。もちろん、今の流れ、IoTを使って快適さを求めていくのも確かですが、それ以外にインフラ、制度、人間関係すべて、住居もそうです。大変な状態になっています。このような中、我々は未来の都市をどう考えるかを、都市大学のテーマにしています。

最近、出された都市の世界ランキングでは東京はニューヨーク、ロンドンに次いで第3位になったそうです。私としては住みやすさ、快適さからすると、本当にそうかな、という気がしています。もう少し住みやすいまちを目指して、未来の東京を考えていきたいと思えます。

11月11日に隣の渋谷区でイベントがありました。ユニバーサル未来社会推進協議会という団体です。その中で、超福祉ワーキンググループを作りました。これは、今までの福祉をさらに上回る形で、その中にはIoTもロボットも入ってきます。都市大学もその一員です。当大学の取り組みや製品の展示などを行い、多くの方に楽しんでいただきました。

将来的に大変大切な分野です。都市大学としても、いろんな形で活動していきたいと思えます。ぜひ、ここの会がますます発展することを祈念しています。

どうもありがとうございました。



## 世田谷区長挨拶

世田谷区長 保坂 展人

皆様、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。第8回せたがや福社区民学会が盛大にスタートすることを、本当にうれしく思います。また、会場をご提供いただいている東京都市大学、関係者の皆さん、大変ありがとうございます。

三木学長先生が今お話しになりましたが、世田谷区で大学連携をこれまで以上に強くやっていこうということで区内12の大学がありますが、学長の先生方にお集まりいただいて、区と一緒に何ができるのか検討するなどの取り組みもしています。例えば、日本経済新聞が行った旅の専門家による「おすすめの穴場観光地」で等々力溪谷が東京の1位だったんですが、訪れてみると、水がちょっと濁っていたんですね。そこで、土木工学の専門家集団の東京都市大学の三木学長先生になんとかありませんかと話したら、なんとかしましょうとお引き受けいただきました。学生さんたちが生態調査など様々な実験を重ねながら、だんだんと水が清らかになるのかなど、楽しみにしています。

福社区民学会には、昭和女子大学、日本大学、駒澤大学、日本体育大学、東京医療保健大学、それぞれの大学からのご参加もいただいています。福祉の分野のネットワークということで、大変ありがたいと思っています。福社区民学会については、福祉の現場や大学、あるいは区民の立場から発表していくということで、それぞれ日頃の立場の違いを超えて、本日も7つの分科会で60近い研究事例の発表があると聞いています。すばらしい交流がされ、その中から具体的な、区へのご提案や、こういう改善をするとさらによくなるんじゃないかというものがいただけたらと思います。

89万3000人、今、世田谷区民の人数です。この1年間で1万人の増加。昨年、新しく生まれた子どもが8164人。10年前は約6000人。10年で2000人多く生まれるようになったということで、子どもの数が以前よりは多くなってきました。もう1つ、65歳以上の方が17万8000人。人口のジャスト2割、20%です。こういった中、子どもたちが生まれてくるのが、毎年増えていることは未来を感じさせる、待機児童対策は大変ですが、そういう数字です。一方で、世田谷区内で認知症の方が毎年1000人ずつ増えています。こちらは大変深刻な数字です。介護認定で認知症が疑われるとの

判定をされた方が2万1500人。人口のパイが大きいだけに大勢の方が悩み、周囲の方も含めて直面している厳しい現実です。

区では、昨年7月から27ヶ所全てのまちづくりセンターに、福祉の相談窓口をかかげました。27ヶ所、それぞれ濃淡があり、取り組みの違いもありますが、まちづくりセンター、あんしんすこやかセンター、社会福祉協議会の三者が力を



合わせて相談に対応しています。施設が離れている地区もありますが、これから施設を建て替えていくことになっており、順次一体化を進めていきます。連携しながらですが、ここに来れば最初の相談ができるといったことをスタートさせています。地域の皆さん、関係団体の皆さん、NPOの皆さんの知恵も含めて支え合っていく世田谷をつくっていったらと思います。

本日は、この大会の開催、まことにおめでとうございます。

以上をもってご挨拶といたします。

「お風呂で健康づくり～医学的に正しい入浴法とは～」

東京都市大学人間科学部児童学科教授  
早坂 信哉

こんにちは。こういう機会をありがとうございます。非常に光栄に存じます。お役に立てる話ができればと思います。

まず自己紹介です。元々、宮城のへき地で地域医療、内科医をやっていました。その関係でいろんなことをしていました。今日は福祉学会ですから、ご専門の方も多いと思います。訪問入浴というものです。

宮城で在宅医療をやっていますが、こういった折りたたみの浴槽を持って行って、寝たきりの患者さんの隣で、お風呂に入れるという、お馴染みの光景かもしれません。このお風呂に入れる行為ですが、寝たきりでも入りたい人が多いです。一方で、今、介護保険で提供していますが、ご存じのとおり、1人が看護師さん、残り2人ヘルパーという構成です。

お風呂に入れる前、通例、血圧を測定します。そうしますと、いろんなことが発生します。中には、血圧170なんてことが、恐らく皆さんの現場でもあると思います。そうすると、お年寄りには訪問入浴の機会がなかなかない、1週間に1度くらいですから、待ちに待った訪問入浴で、たかが血圧が高いくらいで入れないのでは、また1週間待たされることになるので、ぜひ入りたいと思う。一方、入れる側の看護師は、トラブルがあったらまずい、体調が悪くしたらまずいので、やめようとなります。そうすると、ここで葛藤が起きる。家族は入れたい、本人も入りたいが、入れる側は躊躇する。

主治医の私のところに電話がきて、例えば、血圧が170ですが、入れていいですかと。これは、私の研究のきっかけになった話です。私が医者になり数年目ですが、そんなことは、医学書のどこにも書いてない。医学部ではお風呂のことは意外と研究がないのです。大学院に戻ったときに、何の研究をするのかとそのときの教授に聞かれ、



お風呂について、現場で困っているという話をしたら、先生も面白いからやりなさいと、研究が始まったのが今から約20年前。お風呂の研究者は少ないので、珍しがられました。

いいこともありまして、2年前の「世界一受けたい授業」に出演しました。十数年間以上も風呂の研究をしていると、いいことがあるんだなど。これは、「今でしょ講座」去年です。林修さんに講義を

するものです。こちらは、今は放送が終了した「はなまるマーケット」。温泉の解説を求められました。お風呂のことって意外と需要があるんだなと思いました。これは「ニッポンの出番」で、日本の良さを海外に伝える番組。お風呂の良さを伝えました。

こちらは、去年、徳光さんの番組。蒲田の銭湯で撮影しました。これは、「ホンマでっか!?!」。

このときは入浴評論家として出演させてもらいました。お風呂の研究もやっててよかった瞬間でした。これは、「ソレダメ!」。お風呂のネタは結構あるので、等々力のキャンパスにも取材に来ますね。これは、最近、11月12日。2回目の「世界一受けたい授業」です。このときは、美肌になる入浴についてでした。

本題に戻ります。

皆さんは、湯船に何回入ってますか。毎日の方が多いですね。さすが福祉学会ということで、ほとんどの方が、毎日ですね。

では、元気で長生きのためには、週に何回入ればいいのか。福祉の施設でなかなか毎日というわけにはいかないでしょうが、正解は、週に7回です。何でそんなことが言えるのか。

ほかの先生の研究ですが、毎日お風呂に入る方とそうでない方を比べた研究があります。5年間比較をしました。5年後に寝たきりの要介護状態になる方は、毎日入る方のほうが少ないという研究があります。毎日入る方は、お風呂に入らないと比較して、寝た切り要介護状態にならない。毎日お風呂に入ると、要介護状態になりにくいということです。一方、入浴はシャワーだけじゃだめなのかということですね。お忙しいとシャワーだけの方もいると思います。湯船の入浴が危ないのだったら、シャワーだけにすればと、他の先生に言われる。お風呂の研究者にとっては残念なことです。

悔しいので、調査しました。毎日の入浴が健康に効果があるのか、という調査です。浜松医大で、静岡県と共同で調査をしました。毎日、湯船に入ると、いろいろ良いことがあります。また、健診とデータを結合させても、毎日お風呂に入るといいことがあることがわかってきました。主観的健康観、幸福感とか、どうやらいいようだとかわかってきました。

その結果を示します。2012年、静岡県で6000人対象。半分の方から回答を得たものです。主観的幸福感とは何か。これは、現在自分自身で感じる健康度、元気度、という言い方でもいいかもしれません。例えば、今日の元気度や健康感といたら、今日の時点だけかと思うかもしれません。単純な調査項目と思うかもしれませんが、他の研究をみると、主観的健康感がいいと、将来にわたっても病気になりにくいのがわかっています。このことを、調査しました。

毎日お風呂に入る方と、そうでない方、シャワーの方を比較しました。主観的健康感、毎日お風呂に入る、湯船につかることで、主観的健康感が高い方が多いことがわかってきました。さらに睡眠も良い方が多い。毎日、お風呂に入る方は、非常にいいことが多い。たくさんの人を調査すると、主観的健康感や睡眠の状態、こうしたこともお風呂に入ることがいいことだと少しずつわかってきました。追加で、さらに調査をしました。

幸福度も測定しました。これは、よく聞きますよね。ある国、ブータンでしたか、

収入は少ないけれど幸福度が高いと言われたり、一方、日本は収入は高いけれど、幸福度が低いなどと言われることがあります。個人がどのような思いで暮らしているかを数値化するものが幸福度。国際的にどこでも、先進国でも途上国でも測定されています。所得とリンクしているわけではありません。所得が高いからといって、必ずしも幸福度が高いわけではありません。こういう特徴があるわけです。

それ以外に、我が国では内閣府が何年かに1度、幸福度を測定しています。その測定の仕方は簡単です。幸せかどうかを10点満点でつけてもらう。国際的にやられている数値になります。これを、同じように内閣府が行うのと同じようなやり方で静岡県内でも行い、お風呂の入り具合をリンクさせて関連を見ました。毎日、お風呂に入ると、なぜか幸福度が高い方が多いです。なんとなくこれは、風呂に入ると気持ちがいいと直感的には感じますが、数字で表しても、こういうものが出てくるのだと、我々の調査でわかってきました。数字を出していますが、眠りがいい、健康感がいい、幸福度の高い方は、毎日お風呂に入る方が多い。一方、シャワーだけの人も調べています。ちょうどその逆です。例えば眠りが悪い、睡眠状態が悪い方が多いです。健康度も低い方が多い。ちょうど正反対。幸福度も悪い。シャワーを否定しているわけではないのですが、シャワーだけの方は、あまりいいことがないわけです。

どうして、お風呂じゃないとダメなのか、湯船に浸かることじゃないとダメなのか、少し話していきます。1つは温熱作用です。湯船につかったとき、人間の体が受ける作用の一番大きなものの1つです。お風呂に入ると、体がお湯によって温められます。それによって、何が起こるか。最初は皮膚の表面だけ温まります。血管が広がります。血管が拡張して血液の流れがとてもよくなってきます。そのよくなった流れの血液は、皮膚の表面にとどまらず、約1分間で体を血液が1周すると言われます。どんどん温かい血液が全身を回ります。体の内部も含めて体温が上がります。血液の流れがよくなるのが、お風呂の最大のメリットになります。一方、シャワーは、ご想像どおり、体温が上がリません。各種の研究でわかっているように、体温も上がらず血流もよくなりません。湯船につかると血流がよくなると、基礎的な調査からわかっています。血液の流れがよくなると、何がいいか。人間の体には約37兆個の細胞がある。細胞の1つ1つに酸素や栄養分を運ぶのは血液です。その血液の流れがよくなるということは、酸素や栄養分を血液がどんどん運んでくれる。逆に、細胞が活動していらなくなった二酸化炭素や老廃物を排出するのは、血液が回収することで排出されます。血液の流れがよくなると、人間の活動はすべてうまくいかないわけです。ですので、温熱作用で血液の流れがよくなるのは、全身に栄養分を運び、老廃物を回収するといった人間の代謝や活動を活発にします。これが疲労回復や疲れをとることにつながります。

それ以外の温熱効果のいい点として、体が温まると関節が柔らかくなります。関節を包んでいます靭帯や筋といったものはタンパク質でできているので、柔軟性が増して痛みがとれることもあります。あとは、神経痛などで神経が過敏な方は、温めることによって神経痛がとれることが、基礎的な実験でわかっています。温熱効果は、疲れをとったり、細胞を新しくしたり、痛みをとったりと、様々な効果が出てくることになります。この効果が一番の温熱効果、お風呂の効果の最大のメリットです。これを図にしました。血液の流れがよくなると、酸素や栄養分を運び、いらぬものを回

収するのが、血液の流れです。

2つ目のお風呂の作用としては浮力が言われています。お水につかると、風呂のような小さいところでも、浮力を受けます。肩や首までつかると体重が10分の1になると言われています。すると、体重60kgの人が、風呂に入っている間は6kg。そうすると何が起こるかといいますと、陸上にいる限りは、地球から引力を受けて引っ張られています。それに対して、皆さん、座って話を聞いていただいています、筋肉を緊張させて、体勢を保っている。

無意識に行っていることですが、例えば60kgの体重を支える人は60kgを支えるだけの筋肉が緊張しています。お風呂に入っている間は浮力があるので、60kgの体重は6kgになるので、その分だけ支えればいい。その分、筋肉がリラックスできる、緊張しなくて済みます。地球上で唯一、重力から解放される場所とも言われています。浮力があることで、リラックスできる。これが、シャワーだと浮力がないので、やはり風呂につかるほうがいい。

あとは、体をきれいにする作用。全身をすっぽりお湯で包みますので汚れもよく落ちるといことで、シャワーのように部分的に湯につかるのではなく、しっかりお湯につかることによって優しく皮膚の表面の汚れが落ちます。こちらも見過ごしやすいのですが、水圧がかかります。小さな浴槽でも水圧はしっかりかかります。特に深い部分に沈んでいる部分にしっかり水圧がかかります。特に足先のように深いところでは、より強い水圧がかかります。ある意味、締め付ける効果があります。特に、女性は足がむくむことがあります、血液の流れが悪くなってきて足がむくむわけですが、それに対して、水圧によって締め付けられることで血液の流れがよくなって、足先にたまった血液が心臓に戻るといことになります。一方、水圧に関しては、心臓が悪い方や肺、呼吸機能に障害がある方は、息苦しくなったりすることが実際にあります。そういう方には、半身浴をお勧めすることになります。

非常に良いことが多い風呂ですが、一方で、この時期になると、こんな報道もあります。

「冬場に多発する高齢者の入浴事故にご注意ください」と今年1月、冬の寒い時期に消費者庁がニュースリリースを出しました。我々も少し関わっていますが、厚生労働省の研究班が出した数値が使われました。1万9000人の方がお風呂で亡くなっているのではないかとされています。あらためて、これが消費者庁から、気をつけてくださいとニュースリリースが出されました。こういったものが出ると、すぐに私のところにも連絡がきて、何かコメントをくださいと。昨年冬、1年前にもありました。今、ご存じのとおり高齢化が進んでいます。元々お風呂の事故は高齢者が多いのですが、最近お風呂で亡くなる方が増えています。2000人後半だったのが、この10年で4000人近くになり、年々増えています。浴槽内で溺死と、はっきり死亡診断書に書かれているものですが、先ほどの1万9000人は救急車で運ばれた推定の数字です。高齢者が圧倒的に、60歳以上になると、お風呂で亡くなる方が増える。タイミングは、この時期、12月になろうとしている寒いシーズンから増えるのが、このグラフでもわかります。これを踏まえて、安全に入浴する話を、今日したいと思います。

まず、簡単な手順です。安全な入浴方法の基本です。基本の一番大事なところは、少しずつお湯に身体を慣らすことです。手順を見ていきますと、まず、水分補給。お

風呂上がりに何か飲む方は多いと思います。喉が渇くので。風呂に入る前に飲むよう気をつけている人は少ないと思いますが、できれば入る前にもお水をコップ1杯か2杯飲んでください。

なぜかという、1回の入浴で800ミリリットル脱水するという調査・研究があります。ペットボトル1本半ぐらい。脱水になるとは、簡単に言うと、血液がどろどろになる、粘り気が増える。最悪、血の塊ができて脳梗塞や心筋梗塞になる可能性もあります。入る前にきちんと水分をとることがポイントです。それから、かかり湯、かけ湯。まず、いきなり入るのではなく、体を湯に慣らしてから入ることが大事です。いきなり肩までつからないで、最初半身浴で一呼吸して、全身浴。出たあと、またたっぷり水分補給を。そして、最終的には休息をしていただきたい。これが基本中の基本ですが、細かいところを見ていきます。

お風呂の回数を、よく聞かれます。通常は1日1回で十分だと思います。どれぐらい入ったらいいか、何分間ぐらいかとよく聞かれます。そのときの温度、室温にもよりますが、一つの目安は、汗をかいたら出てくださいと言っています。例えば額や顔に汗をかいたら、いったん、出てくださいと言っています。なぜかという、汗をかくということは、身体がオーバーヒート気味、体温を下げたいというサインなので、汗をかいたら、深部体温が0.5度近く上がっているのです。温熱効果はもう得られているので、あまり欲張らず、これぐらいで出てください。また、動悸がする方は、どきどきしたら出てください。運動したあと、すぐ入りたい人もいますが、できれば間を空けていただきたい。そのまま入ると、筋肉の疲労を回復させるために筋肉に血液を送り込んでる最中にお風呂に入ると、逆に筋肉の血液が減って、皮膚の表面に流れてしまう。そうすると、筋肉の疲労がとれにくく、疲労が残ってしまう。十分に筋肉に血液がいきわたってから、お風呂にはいるのがよい。食事の前後は30分から1時間ぐらひは避けてほしい。これも同じ理屈で、お風呂にはいると血液が皮膚の表面にとられ、内臓に行く血液が減る。なので、30分～1時間ぐらひは避けたほうがよい。そうしないと、消化不良を起こしたり、胃腸にいくべき血液が行かなくなることがある。お酒の後も、転んだりもあるので、気をつけてください。

起床時は、よく温泉地で、誰もいない湯船に入りに行くということはあると思いますが、朝は人間の身体は非常な脱水状態になっています。1晩で300ミリリットルの脱水と言われている。血液の粘り気が高くなっています。そこで800ミリリットルの脱水になると1リットルも水分が抜けることになるので、朝の入浴はきちんと水を飲んでからにしていきたいです。

それから、高齢者は、1人での入浴を避けていただきたい。1人だと何かあっても助けてもらえません。特に、これからは急な温度の変化に注意。ヒートショックという言葉を知っていると思います。この時期は特に気をつける必要があります。血圧の上下の変動のグラフです。お風呂に入る前に、脱衣室にいますよね。脱衣室に暖房がきいているお宅もあるかもしれませんが、なかなかそういう家庭は少なく、脱衣室は寒いことが多い。そこで服をばっと脱ぐと、血圧が急に、人によっては40～50ぐらい上がる。これがヒートショックの第1段階で、血圧が上がってしまう。それで、タイミング悪く血圧が上がりすぎると、場合によっては血管が破れて脳内出血などを起

こす。また、お湯の温度が 42 度を超えると、交感神経が刺激され、血圧が上がってきます。ここでもまた、血圧が上がって、運が悪いと脳卒中を起こしてしまう。2～3分で血圧が落ち着きますが、今度は急に出る場面です。これまで水圧がかかっているのですが、立つときに血圧が急に下がる。すると立ちくらみを起こすわけです。目の前が暗くなって、転んでしまってケガをする場合もあるし、お湯の中なら、そのまま溺れることもあります。冬のお風呂は温度差が重要で、寒い脱衣所と熱いお湯は危険なところになります。42 度以上の高温になると、血圧が急に高くなることは各種実験でわかっていますので、対策としては、冬でも 40 度までにしてもらいたい。そうすれば、急に血圧が上がらないと、研究でわかっています。ちょっとぬるいなと思うかもしれませんが、それぐらいで十分だと思います。今日は詳しくはお話しませんが、実は、ぬるいお風呂のほうが、人間の体は高い体温の状態を維持できると言われていいます。熱い湯だとどんと体温が上がりますが、すぐに下がります。熱いお風呂に短時間入るのではなく、ぬるいお風呂にゆっくり入ったほうが温まりますので、40 度で十分となります。それから、水をしっかり飲んでいただきたい。

800 ミリリットルの脱水になってしまうので、お風呂に入る前もしっかり飲んでいただきたいと思います。風呂上がりにビールを楽しみにされる方も多いですね。私も楽しみで飲むことも多いので、ダメと言にくいのですが、ただ、ビールだけだと、ちょっとダメです。ビールを飲んで脱水予防になるかという点、利尿作用があって、尿が出てしまう。飲んだ以上に、尿が出てしまうので、脱水の回復にはなりません。ですので必ずお水も飲んでいただきたいと思います。かけ湯も、人のやっている様子を見ると、ちょっぴりやっただけで、お風呂に入る方もいますね。そうではなく、かけ湯は血圧の急上昇を防ぐ、大事な意味があります。手足の末端から、しつこいぐらい、手桶では 10 杯ぐらい、シャワーでも結構です。そうすると血圧の急上昇が防げます。ですので、きちんとかけ湯をしていただきたいと思います。ポイントは血圧を上げないことです。あとは、入浴を欲張らないということがあります。温泉に行くと、お風呂を欲張る方がいらっしゃいますね。汗をかいても、そのまま頑張っただけで、ダイエット目的なのか、もったいないと思ってたくさん入ったりします。まず、汗が出てきたら、いったん出ていただきたい。これ以上入り過ぎると熱中症になります。いわゆるのぼせる状態になるので、出ていただきたい。

では、何度ぐらいの湯にどのぐらいつかるのがよいか。温度と時間は難しいのですが、1つの目安としては、40 度で 10 分ぐらいで、これぐらいの状態になります。0.5 度ぐらい体温が上がります。温熱効果も十分ありますので、ぜひ欲張らないでいただきたいと思います。今日はサウナの話はしませんが、同じです。我慢比べのように汗をかいている方もいらっしゃいますが、汗をかくだけかいても、あまりいいことにはなりません。ダイエットには何もつながりません。

ですので汗が出たら一度出ていただくということで。お風呂そのものは、ダイエットにつながらないと言うと女性のがっかりされますが、あまりカロリーは消費しませんので、汗をかいたからといってやせるわけではありません。水をしっかり飲んで、あまり欲張らないでいただきたい。また、お風呂から出るときに血圧がどんと下がります。そのときに、立ちくらみを起こして目の前が暗くなって大きなケガをすることもあるので、ゆっくり立ち上がっていただきたいと思います。あとは、脱衣所に出た

ときに、目の前が暗くなることがありましたら、少ししゃがんで頭の位置を低くしていただきたいと思います。それによって、血液が頭のほうに十分に回って、回復します。あとはお酒のことです。温泉地などに行くと、お酒を飲んでから温泉に入ることが多いです。よく温泉地の方からも話を聞きます。お酒がらみの事故も多いです。実際に調査でも、亡くなった方からアルコールが検出される例が多いです。飲酒の後は血圧が下がり過ぎたり転んだり、いろんなことが起きます。あまり酔っ払った状態では、お風呂に入らない方がいいです。十分に酔いがさめてから、お風呂に入ってください。こちらはちょうど1ヶ月前でしょうか、リンナイ、ガスの給湯器メーカーと一緒にこういうものを作りました。

「ヒートショック危険度簡易チェックシート」です。ホームページからそのまま抜粋したものです。今、話したような内容が入っています。たとえば、脱衣室に暖房器具がないと危ないですよとか、同じ方でも年齢が高くなってきてメタボの方とか、肥満、糖尿病、高血圧、いわゆる動脈硬化が進んだ方は、よりヒートショックを起こしやすい。

もし、ご興味がある方は、リンナイのホームページを見ていただければと思います。こちらも続きで、全部で10項目。今、話したような内容が書いてあります。この時期、温度が下がってきますので、温度差をなるべくなくすように心がけていただきたい。浴室や脱衣室に暖房をつけることに関しては、人間科学部というより、工学系の話になるのかなと思います。



ヒートショック予備軍は、どこにでもあります。全国調査をしましたが、全国どこでも北でも南でも予備軍はいるということです。

さて、こちらは、今年2月、私どもでニュースリリースしたものです。研究テーマだった、血圧がいくつまでならお風呂に入れるのかというものです。やっと結果が出てきたので、ご説明します。約2000名の方を調査しました。事故が596名、元気な方1511名の調査。何が悪かったかを比較したものです。血圧が高いと事故を起こしやすいと、たくさんの方からわかってきました。グラフを見ると、きれいに数字が出ています。もともとのお風呂に入る前の血圧が160を超えると、事故が起こりやすい。事故の中身は様々です。意識がなくなる、呼吸困難を起こす、吐いたりといった、いろんな事故症例が集まりました。

今の結果をまとめると、どうも上の血圧が160を超えているとき、それから下の血圧が100を超えているときは、事故のリスクが上がるとわかりました。今日は、結果をお伝えするのに、いい機会だと思っていますが、なるべく現場の方にお知らせしたいと、機会あるごとに話しています。

今日も入浴に直接関わっている人もいると思いますが、たぶん勘でやっていたと思います。これまで数値が出ていなかったのも、血圧がどのくらいまでお風呂に入れていいかわからなかったと思いますが、たくさんの事故症例を集めて、こういうことが

わかってきました。体温についても、37度5分以上を超えていると様々なトラブルが多く起こるとわかってきましたので、老人ホームなどでも、入浴の判断の基準の参考にしていただきたい。

訪問入浴でも、1つの参考にしていただきたいと思います。場合によっては自宅でも、ちょっと血圧が高いというときには、今日は控えておこうかなという参考の数値にしていただければと思います。これ、実際に具合が悪くなった方に、どんなことが多かったか。呼吸が悪くなったり意識がなくなったり、吐いたりケガをしたりという方がいました。

お風呂はいかにいいかという話を最初にしました。後段では、この時期、寒い時期にどんな点に気をつけてお風呂に入ったらいいかについてお話しました。寒い時期、脱衣室の温度に気をつけていただきたい。具体的な数値を申し上げなかったのですが、リビングと浴室の差は5度未満にさせていただきたいと思います。5度以上差があると、血圧が急上昇することがわかっています。できればリビングが25度なら、脱衣室は20度以上に保っていただけるといい。お湯の温度は40度まで。これ以上上げると、血圧が上がる原因となる。あと、きちんと水を飲んで、血液がサラサラの状態に入ると、脳卒中などの予防になる。あまり欲張ると、体温が上がりすぎて熱中症になりますので、ほどほどで出ていただきたいということです。湯船から出ても気を抜かずに、ゆっくり上がって、立ちくらみの予防をしていただきたいと思います。

最後に調査結果を示しました。血圧が上は160、下が100を超えるとリスクが上がることが調査からわかっていますので、無理をしないことが1つのポイントだと思います。

このタイミングで、冬はこれから寒くなる時期なので、今日の話を決かの参考にしていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。



# 実践研究発表



# 分科会(パネル型)発表一覧

## 第1会場(1階 11D教室)

助言者 今井 康明(株式会社すずらん代表取締役)  
望月 明子(砧地域ご近所フォーラム2017実行委員会)

### 【一斉発表時間 13:55~14:15】

	発表者	所属	発表概要
1	橋本 茉依 牧田 季憲 安藤 伸也 富沢 優	せたがや福社区民学会学生交流会 「せたがやLink!」 東京医療保健大学 駒澤大学 日本大学文理学部 日本大学文理学部	大学生が地域で活動するために必要なこと
2	峰村 貴央 深川 瞳 大和屋 尚子 防村 枝美 楠 彩代 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	インターナショナルプリスクールに通う幼児の 食育活動方法について
3	舘野 友仁 貞元 美里	NPO法人 Ubdobe	医療福祉を身近に取り入れるための店舗経営

### 【一斉発表時間 14:50~15:10】

	発表者	所属	発表概要
4	村松 佳奈 藤井 佑記登 森田 菜奈 盛永 理央 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	郷土料理を用いた食育活動: 区内インターナショナル幼稚園での大学生の食育活動
5	飯田 政人	社会福祉法人福音寮	社会福祉法人福音寮の地域化の歩み

## 第2会場(1階 11F教室)

助言者 早坂 信哉(東京都市大学人間科学部児童学科教授)  
中原 ひとみ(特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長)

### 【一斉発表時間 13:55~14:15】

	発表者	所属	発表概要
1	高山 都規子	在宅介護家族会「かたよせ会」	在宅介護者の看取り後のフォロー
2	山岸 萌 牧野 あかり 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供

### 【一斉発表時間 14:50~15:10】

	発表者	所属	発表概要
3	梅原 朋美	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」28年度の取り組み
4	矢藤 真代	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	遊ぼう会における障害者支援

## 分科会(教室型)発表一覧

### 第1分科会 子どもとともに育ちあう/子ども、若者のかがやく社会/その他 (1階 11A教室)

進行役・助言者 伊藤 陽一(東京都市大学人間科学部児童学科講師)  
森田 規子(世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	坂田 朗 久保 恒平	社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園	主体性を育む保育、その取り組み	13:30
2	八並百合夏 下村泉 前沢佳穂 溝口寛乃 宮本愛衣 武笠螢 山上由琴	東京都市大学人間科学部児童学科 伊藤陽一研究室	児童養護施設における学習ボランティアのあり方 ～学生と子ども・施設・地域の育ち～	13:55
3	古澤 昇 竹村 睦子	聖ヶ丘教育福祉専門学校 一般社団法人 子ども・若者応援団 たけむら社会福祉士事務所 一般社団法人 子ども・若者応援団	高校中退防止のための学びと出会いの場 「寺子屋みらいin善宗寺」活動報告	14:20
4	宮崎 紘子	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部	地域と学校をつなぐ中間支援機関としての ボランティアセンター	14:50
5	内田 朝代	特定非営利活動法人若者の自立支援 すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と 自立を支える場としてのシェアハウス運営	15:15
6	河野 真帆 新井 山信 原田 彩加	東京都市大学人間科学部児童学科	昔遊びやわらべ歌の良さ	15:40
7	伊能 亮	社会福祉法人せたがや榎の木会 大原福祉作業所	知的障害のある方を支えるために	16:05

### 第2分科会 働く社会に参加する/協働・連携(チームケア等) (1階 11B教室)

進行役・助言者 辻本 きく夫(世田谷区介護サービスネットワーク代表)  
牧野 まゆみ(日本放送協会学園高等学校教諭)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	根本 真理子 朴 明生 山下 麻紀	特定非営利法人 まひろ 特定非営利法人 まひろ 東京都若者社会参加応援事業Area-1	なかまちNPOセンターでのわかものの活躍 ～市民活動支援と若者支援のコラボレーション～	13:30
2	山本 剛志	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	将来を見据えた暮らしへの支援	13:55
3	深山 ゆみ 三橋 綾香	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部 玉川ボランティアビューロー 代田ボランティアビューロー	発達障がい特性をもつ方の地域参加サポート	14:20
4	野口 淳史 鈴木 裕貴	特別養護老人ホーム フレンズホーム	手作りお神輿 一緒に夢を担ごう	14:50
5	長見 亮太	社会福祉法人せたがや榎の木会 上町工房	Aさんとのエピソードを通して利用者支援の 醍醐味を考える	15:15
6	三浦 覚	特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ	特別養護老人ホームで働く生活相談員の仕事 ～生活相談員の業務改善とその効果～	15:40
7	赤理 文子 堀内 良子 宮下 享子	下馬あんしんすこやかセンター (社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団)	地区のケアマネ支援	16:05

### 第3分科会 最期までその人らしく生きる／認知症とともに豊かに生きる (1階 11C教室)

進行役・助言者 加藤 美枝(世田谷区老人問題研究会)  
高橋 学(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	河島 修	世田谷区民	前立腺がん患者、再発・転移2年間の感想	13:30
2	梶原 大 箱山 玄	特別養護老人ホーム 久我山園	転倒事故を乗り越えて ～家族、本人が望む生活を支える～	13:55
3	萩野 直人 和田 徹太郎	世田谷区立駒沢生活実習所	世田谷の福祉資源を活用して、老障介護家庭を支える～現状と課題～	14:20
4	岩永 真祐 新田 正伸	特別養護老人ホーム博水の郷 ショートステイ 特別養護老人ホーム博水の郷	職員視点から利用者視点へ	14:50
5	安田 博子	世田谷区立きたざわ苑	Well Being (健幸)の取り組み	15:15
6	北村 絵里 高橋 裕子	世田谷区高齢福祉部 介護予防・地域支援課	世田谷区認知症カフェ開設支援事業の取り組み	15:40
7	清水 城次 加藤 貞行 河原 絵梨花	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	変わった！ ～見る、話す、触れる、ケアを通して～	16:05

### 第4分科会 多世代による文化交流／一人ひとりに向き合った実践 (2階 12A教室)

進行役・助言者 橋本 睦子(社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局)  
上之園 佳子(日本大学文理学部社会福祉学科教授)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	新川 優奈	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	Aさんから気持ちを支える大事さを学ぶ	13:30
2	園原 一代 小山田 建太	NPO法人ハートウォーミング・ハウス	高齢者所有の空き部屋活用、異世代間同居 「ホームシェア」	13:55
3	阿部 成子 佐藤 明子	世田谷区老人問題研究会 ひこばえ広場 たまごの家	「老老ケアと異世代交流」への展望 ーひこばえ広場「たまごの家」の実践から	14:20
4	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや榎の木会 上町工房	『主体性』の発揮を意図して	14:50
5	岩澤 辰洋	社会福祉法人せたがや榎の木会 わくわく祖師谷	Aさんの行動から心情洞察できたこと	15:15
6	新保 美里 井上 靖章	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ	ショートステイ中のトラブルへの対処が 安定利用に繋がった事例	15:40

### 第5分科会 生きがい・まちづくり/一人ひとりに向き合った実践 (2階 12B教室)

進行役・助言者 植田 祐二(世田谷高次脳機能障害連絡協議会)  
田邊 仁重(世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	矢吹 千恵子 河合 信吾 亀井 文男 鈴木 一夫	世田谷区老人問題研究会	せたがや・ふるさと区民まつりと「世老研」	13:30
2	田島 和美	社会福祉法人せたがや榎の木会 わくわく祖師谷	新しい出会いから支援のあり方を考える	13:55
3	新玉 枝理	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	摂食が難しいA君へのアプローチについて	14:20
4	和多田 陽	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	グループホームへの移行とその後の経過について GH利用を自己決定するまでの歩み	14:50
5	伊藤 潤一 佐々木 松治 黒羽 希次 中島 智也 鬼塚 正徳	おでかけサポーターズ 世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課 NPO法人せたがや移動ケア	おでかけサポーターズの活動の紹介	15:15
6	谷田 さつき	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	家族との連携を通して本人の生活の安定を図る	15:40
7	甲斐 実	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	エピソードに人づきあいの変容を見る	16:05

### 第6分科会 地域をつなぐネットワーク (2階 12C教室)

進行役・助言者 北本 佳子(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授)  
瓜生 律子(世田谷区高齢福祉部長)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	進藤 義夫 大野 圭介 経塚 章寛	特定非営利活動法人障害者支援情報センター 社会福祉法人 藍 社会福祉法人 藍	世田谷セレ部 活動報告	13:30
2	今関 将弥	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部	いつか来るその時のために -都立芦花高校での授業の取組み-	13:55
3	丸山節子 橋元裕明 百瀬智彦 安藤秀彦 鈴木健太 山本恵理	砧地域ご近所フォーラム 2017実行委員会	ネットワークを拡げる ～砧地域ご近所フォーラムの「特別企画」～	14:20
4	須澤 和也 佐貫 梢 榊原 克史 桑谷 和司 片野 智幸	世田谷区介護サービスネットワーク パナソニックエイジフリー介護チェーン世田谷 ヤマシタコーポレーション世田谷営業所 (株)共英 (株)トーカー セントケアリフォーム等々カ	地域における福祉用具連絡会の役割と活動	14:50
5	吉田 俊之	成城大学大学院経済学研究科 経済学専攻博士課程後期	住民主体の互助を活性化する10のポイント	15:15
6	高橋 祐孝	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 福祉事業部	地域のだれでも参加!「いっしょに食べよ」 ～”食”のワークショップで見えてきたこと～	15:40
7	松田 妙子 松本 居恵	NPO法人せたがや子育てネット	地域とつながって子育てする ～おでかけひろばぶりっじ@rokaの実践～	16:05

**第7分科会 一人ひとりに向き合った実践 (2階 12D教室)**

進行役・助言者 吉田 輝美(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)  
市川 裕太(グループホーム かたらい ホーム長)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	山岡 まゆみ	特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ	「立つ、座る、歩く」が快適にできる生活リハビリの 取り組み～年を重ねての、寝る、座る、立つを安全 に楽ちに～	13:30
2	鈴木 奈穂美 小見 奈那江	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家	おむつ改革	13:55
3	榎原 大空 西村 将太 渡辺 三恵子	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	適切な評価に基づいた口腔機能維持向上への 個別の取り組み	14:20
4	澤田 美咲 石井 琢也	世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケアマネジャー部会 優つくりグループホーム鎌田 グループホーム成城さくらそう	「私をわかって」 ～ICFを用いて本人の気持ちを理解する～	14:50
5	小川 優香里	昭和女子大学	特別養護老人ホームにおける回想法の実践	15:15
6	有馬 秀明 安藤 俊一	社会福祉法人 敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑	ファミリーハッピーライフ リターンズ！	15:40

# パネル型発表 第1会場

助言者

今井 康明（株式会社すずらん代表取締役）

望月 明子（砧地域ご近所フォーラム2017実行委員会）

	発表者	所属	テーマ
1	橋本 茉依 牧田 李憲 安藤 伸也 富沢 優	せたがや福祉区民学会学生交流会 「せたがやLink!」 東京医療保健大学 駒澤大学 日本大学文理学部 日本大学文理学部	大学生が地域で活動するために必要なこと
2	峰村 貴央 深川 瞳 大和屋 尚子 防村 枝美 楠 彩代 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	インターナショナルプリスクールに通う 幼児の食育活動方法について
3	館野 友仁 貞元 美里	NPO 法人 Ubdobe	医療福祉を身近に取り入れるための 店舗経営
4	村松 佳奈 藤井 佑記登 森田 菜奈 盛永 理央 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	郷土料理を用いた食育活動： 区内インターナショナル幼稚園での 大学生の食育活動
5	飯田 政人	社会福祉法人福音寮	社会福祉法人福音寮の地域化の歩み

## 大学生が地域で活動するために必要なこと

せたがや福社區民学会 学生交流会「せたがやLink!」 東京医療保健大学 橋本茉依  
駒澤大学 牧田季憲  
日本大学 安藤伸也  
富沢 優

### 1. 「せたがやLink!」について

せたがや福社區民学会 学生交流会「せたがやLink!」は、平成25年10月に設立した。せたがや福社區民学会会員大学である、日本大学文理学部・駒澤大学・東京医療保健大学・東京都市大学・日本体育大学・昭和女子大学の福祉に興味のある学生で構成されている。

日ごろは、福祉に関する勉強会や交流会、意見交換をするなど活動している。

### 2. これまで行ってきた活動について

これまでに、大学生のみでの交流会や勉強会を中心に行ってきた。

昨年度より、世田谷区の「せたがや介護の日」に参加するなど、地域の行事へも参加をするようになってきた。

今年度は、せたがやLink!主催で、地域の住民の方にガイドを依頼し、大山道を散策したり、地域の方と一緒に、認知症サポーター養成講座を受講したりした。

### 3. 大学生が地域で活動するために必要なことについて

大学生が地域で活動をしていくうえで、必要であると思うことはいくつかある。

1つ目に、安定して、活動をしていくメンバーを確保していく必要がある。現在、活動に参加する人数は昨年と比較し、大幅に増加しているが、参加するメンバーが安定していない。安定して、活動メンバーを確保していく必要がある。メンバーの参加率の向上を図ることで活動に継続性が生まれてくると考える。

2つ目に、学校や地域からの協力を得ることである。せたがやLink!は、せたがや福社區民学会会員大学の学生で構成するため、大学による広報への協力は最も重要であるが、現在のところ、しっかりと連携がとれておらず今後の課題である。

また、地域・大学における、認知度も今一つ、上昇しておらず、今後の円滑な活動のために、会員大学の学生、地域の方に対する広報・連絡体制の拡充にも力を入れていきたい。

3つ目に、広報、連絡体制である。現在、会員学生に対してメールの配信、会員大学による呼びかけ、SNSへ投稿するなど、いくつかの方法で、活動への参加の呼びかけを行っている。

しかしながら、全学生にしっかりと情報がいきわたっていないところもあり、今後の広報・連絡体制をどうするか、検討したい。

<質疑応答>

Q：新規加入者（参加者）はどのように確保しているのですか。

A：窓口となる先生に授業やゼミなどで話してもらっています。また、私たち自身が大学内で声をかけたり、ポスターを貼らせていただいたりしております。

Q：地域からの協力を得るためにはどのようなことが必要でしょうか。

A：団体自体の認知度を上げるため、存在を知ってもらえる機会が欲しいです。“顔が見える”関係を築き上げたいです。

Q：「せたがやLink!」と繋がるためにはどうしたらよいのでしょうか。

A：窓口となる、世田谷区福祉人材育成・研修センターまで連絡していただきたいです。

感想：SNS 投稿では、学生の活動が見えてこない。積極的に活動してはどうでしょうか。

A：今後は活動頻度を高めるとともに、その都度 facebook ページを更新し、活動を可視化させていきたいと思います。

<助言者コメント>

- ・これからも活動がんばってください。



## インターナショナルプリスクールに通う幼児の食育活動方法について

東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科

峰村 貴央、深川 瞳、大和屋 尚子

防村 枝美、楠 彩代、鈴木 礼子

### 【背景】

食育は、「食」に関わる様々な分野や関係者が連携・協力を図りながら推進され、日本各地で盛んに計画し実施されている。その実施方法は様々であり、地域性や使用媒体など、それぞれの特性を活かしながら取り組むことで、効果的な食育活動が期待できる。昨年度のせたがや福社区民学会では、幼児期は好奇心旺盛な時期であるので、教えて聞かせるのではなく、手を動かして体験することが重要であると報告した。そこで今年度は、実施後に職員の方と話し合い、どのような体験が必要かを検討したので、その内容を報告する。

### 【目的及び実施内容】

実施日は平成28年6月24日とし、都内のインターナショナルプリスクールに通う幼児（18ヶ月～6歳）5名を対象に、幼児でも安全で簡単に作ることができる「白玉団子作り体験」を実施した。以下の内容で実施し、その後にプリスクールの職員の方と実施方法の課題を検討した。活動手順：①アイスブレイク（自己紹介）、②白玉団子の原材料の紹介、③生地を捏ねる、④沸騰したお湯で茹でる、⑤冷水で冷やす（※④からは学生が行った）。本活動は、インターナショナルプリスクールの承諾を得て実施をした。

### 【実施報告】

幼児は積極的に参加をしている姿が見受けられ、和気あいあいとした会となった。昼食後の実施にも関わらず、調理した白玉団子はすべて完食し、充実した食育活動になった。また、厚生労働省が掲げる「楽しく食べる子供」に成長するための5つの目標の1つである、「食事作りや準備に関わる子供」を取り入れることができた活動であった。

### 【課題】

特に加熱を伴う調理の間は幼児の動作が止まるため、場をつなぐ活動の必要性が課題として挙げられた。今回実施したプリスクールに通う幼児は、年齢が18ヶ月～6歳と幅があり、調理技術に個人差がある。そのため、食材の説明や調理の成り立ちといった話ではなく、英語にしたレシピを音読や、その英語のレシピをなぞり書かせるといった身近な学習などを含める案が挙げられた。今後も効果的な活動を模索していきたい。

<質疑応答>

Q：インターナショナルプリスクールの子どもと普通の幼稚園の子との違いはありますか。

A：あまり変わりませんが、会話は英語なので伝え方に工夫がいることや伝わり方に違いを感じました。

Q：白玉をゆでる時間が長く感じましたが。

A：白玉というものを知らない子が多かったので、数多くつくる子や様々な形にする子が多く、ゆでるのに少し時間がかかりました。

<助言者コメント>

- ・一人での発表でしたが、お疲れ様でした。世田谷区にインターナショナルプリスクールがあることをはじめて知ることができ、視野が広がりました。



## 医療福祉を身近に取り入れるための店舗経営

発表者：NPO 法人 Ubdobe 舘野 友仁、貞元 美里

共同研究者：NPO 法人 Ubdobe 横川 裕加里

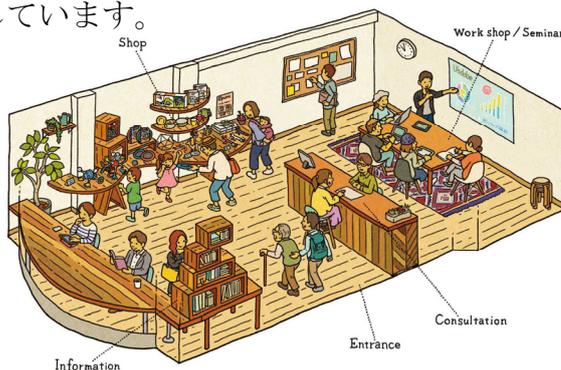
医療福祉、音楽、アートを融合させたプロジェクトを通じてあらゆる人々の積極的  
社会参加の推進を目指す NPO 法人 Ubdobe（ウブドベ）が、2016年7月7日、世田谷  
区三軒茶屋の商店街に医療福祉系セレクトショップ「HALU ～Unique & Universal～」  
をオープンしました。（[www.halu-shop.com](http://www.halu-shop.com)）

HALU は、あらゆる人々が使用でき、楽しむことのできる物と情報のセレクトショッ  
プをテーマに掲げ、子どもから高齢者、障がいをお持ちの方等、どなたでも使いやす  
い食器・文房具などのユニバーサルデザイン商品や全国の福祉作業所で作られている  
食品、アクセサリ、雑貨等を販売しています。物の販売だけでなく、医療福祉情報  
コーナーを設置し、地域の福祉情報や全国のバリアフリー旅行情報、仕事に役立つ本、  
アクティビストや当事者の著書や自伝などをご用意しています。さらに、予約制の相  
談窓口も設け、ちょっとしたお悩みを相談できる場にもなり、従事者やファミリー向  
けのワークショップやセミナーも開催しています。

オープンから3ヶ月が経ち、医療福祉従事者、障がいをお持ちの方、お子様連れ、  
医療福祉に全く関わりのない方など、様々な方にご来店いただいています。コンセプ  
トを前面に出すことよりも、おしゃれでデザイン性のあるお店を意識しており、商品  
を買われる方は「可愛い」「使いやすい」という入り口から手に取り、そこから商品  
の背景を知っていただくことも多いです。

10月には音楽フェスにも出演されているミュージシャン&アーティストでありな  
がら、高次脳機能障害を抱える方の絵画展を開催しました。その際は、作家さんや作  
品目当てでのご来店から商品のご購入につながっただけでなく、実はご家族のことで  
悩みを抱えていたということで相談窓口の予約にもつながりました。

医療福祉は身近なことでありながら、きっかけがないと関わる機会も少なく、縁遠  
い物だと思われがちです。商店街の中にセレクトショップとしてオープンすることで、  
日常での困りごとや悩みがあっても、買い物に来るような感覚で気軽に立ち寄り、相  
談できる場所になることを目指しています。



<質疑応答>

Q：2010年NPO法人を開設したとのことですが、はじめた動機は何ですか。

A：動機は代表者がもともと、クラブや音楽に興味があり、福祉と音楽を融合させたプロジェクトとして発足させました。

Q：三軒茶屋ではじめた理由は何ですか。

A：三軒茶屋は年齢層の幅が広いからです。

Q：法人にいる人達の年齢層は。

A：平均年齢は、29.3歳です。

<助言者コメント>

・いろいろな年齢の人が集まる場所であり、三軒茶屋でこれからも根づいてほしい。



## 郷土料理を用いた食育活動：区内インターナショナル幼稚園での大学生の食育活動

東京医療保健大学・医療保健学部・医療栄養学科

村松佳奈、藤井佑記登、森田菜奈

盛永理央、峰村貴央、鈴木礼子

### 【背景・目的】

幼児期におけるおやつの役割は、成長において、重要な役割を果たす。また、手の発達時期にあたる園児にとって、手を動かし、ものをつくる体験は大切である。

本年度から第3次食育推進基本計画が開始され、食文化に関する関心と理解を深める食育活動を通して、「日本の食文化の保護と次世代への継承の推進」「若い世代に対する食育推進」などが国の施策としても展開されている。

### 【実践内容】

平成28年6月23日に、世田谷区内インターナショナル幼稚園の園児たちと園の教員を対象として、大学生4名・教員2名が北海道の郷土料理である「いももち」を紹介し一緒に作る食育活動を実施した。材料は前日に買い出しを行い、当日は使用する野菜の下処理から調理まで行い、いももちを50個(1人前5個)用意しました。今回は、その自分達の活動を発表報告いたします。

### 【結果】

園児は、食育活動を開始時は積極的な参加をためらっていたが、「いももち」ができあがる時間には調理した物を笑顔で大学生とともに食し、楽しい充実した食育活動となった。世代の異なる園児とのふれあいを通して、栄養学を学ぶ大学生として、コミュニケーションの難しさ、大切さを学ぶ、よい経験となった。

### 【考察】

今回の食育活動において、園児への食育活動では、実施する前に、一緒に触れ合うアイスブレイクの時間が必要であると感じた。例えば、郷土料理の紹介であれば、その地域の「地図」のお絵かきや、用いる食材の計量を一緒に実施するなど、食育活動の前準備として導入の時間(アイスブレイク)を取り入れると、より効果的で、かつ円滑な食育実践活動へつながると感じた。

### 【課題】

第3次食育推進基本計画における重点課題に対応する具体的施策として小項目において、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」の機会を活用し、日本食や日本の食文化について海外に展開していくことが明記されている。今後の課題として、海外の方達へ情報発信しうる食育活動に必要な語学能力を身に着けることが必要と思われる。今後、食育・栄養教育の分野の実践的な英会話を含めた学修を心がけ、コミュニケーション能力を高め、よりよい食育の実践をおこなっていききたい。

<質疑応答>

Q：レシピの読み聞かせをしたときはどのような反応だったのでしょうか。

A：子どもたちは聞いていましたが、内容がよくわからなかったのか良い反応ではなかったように感じました。

Q：郷土料理で何故「いももち」を選んだのですか。

A：子どもたちの発達段階に適しているためです。発達の段階に応じて手を使う作業は子どもたちの成長にとって大切です。担当学生の父が北海道出身でなじみがあったからです。(担当学生自身も子どもの頃父親と一緒に、「いももち」を作りました。「いももち」は、苦手な野菜も食べられるようになります。)

Q：「いももち」の中の材料が野菜だったが子どもたちの反応は。

A：野菜に対する苦手意識はあまり見られませんでした。

Q：焼く作業はどうしたか。

A：子どもたちと一緒にホットプレートを使用して焼きました。

<助言者コメント>

- ・「いももち」のレシピが野菜嫌いを克服できる内容でよかったですね。上手く子どもたちに伝えることはできなかったが、これからも経験をとおして頑張ってください。



## 社会福祉法人福音寮の地域化の歩み

社会福祉法人福音寮 飯田 政人

### 1. 児童養護施設の地域化

社会福祉法人福音寮は、昭和20（1945）年10月、世田谷区上北沢に児童養護施設を開設しました。戦争が終わり、街中に戦災浮浪児がさまよい始めたころで、故堀内キン理事長が浅草から一人の女兒を保護したところから始まります。以来70余年、福音寮は、何らかの事情により家庭で生活できない子ども達を児童相談所を通してお預かりしています。

福音寮の特徴は地域小規模化です。子ども達の生活は地域の中で家庭的な暮らしが良いと考え、現在では定員の半数以上が地の中で一軒家を借りて生活しています。子ども達が地域へ出ていくことで、子ども自身の社会性が養成されること、また、児童養護施設に対する地域の理解が進むことを期待しています。

### 2. 地域の福祉事業

平成27（2015）年度に全国の児童相談所で対応した虐待相談件数は103,260件で、10年前の3倍近くにもなります。平成12（2000）年に児童虐待防止法が制定されて15年経ちますがその数は止まるところを知りません。

福音寮の地域化の歩みは、こうした悲しい状況を少しでも食い止めたいとの思いで、児童養護施設だけではなく、より地域に密着した福祉事業を展開していく流れでもあります。平成12（2000）年に施設の全面改築を行って以降、子どものショートステイ事業、おでかけひろば事業、保育園、学童クラブ等の運営を行っています。

子どもたちは様々な社会状況を背景に、中には厳しい環境に置かれている場合も少なくありませんが、福音寮の事業は児童相談所や子ども家庭支援センターと連携しながら一人でも多くの子ども達に光が当たり、健康的に豊かに暮らしてもらうことを目指しています。

### 3. 福音寮の支援

福音寮はどの事業も子ども一人ひとりのニーズを踏まえた個別的支援が大事だと考えています。福音寮の理念は「ほっとしたつながりで育ちあいましょう」、職員行動指針は「誠実・信頼・成長」です。こうした理念のもとに次の事業が展開されています。

○児童養護施設福音寮：本園に3ホーム、地域に6か所のグループホームがあります。○保育園：平成25（2013）年より保育園を開設しています。地域の働く保護者の支援と子ども達にとって心休まる環境の提供が目標です。○学童クラブ：平成18（2006）年より杉並区で学童クラブの委託運営を開始しています。現在8か所のクラブを運営しており、直接的な家庭支援を展開しています。○子どものショートステイ：児童養護施設内に居室を設けて支援の必要なお子さんを短期間お預かりしています。○おでかけひろば：概ね3歳までのお子さんの遊び場提供と保護者の皆様の子育て交流を積極的に行っています。

福音寮の地域化の事業を見ていただき、その課題と展望を共に考えていきたいと思っています。

<質疑応答>

Q：施設の分園化は他の施設も実施しているのでしょうか。

A：グループホームは全国で40ヶ所程度です。福音寮のように地域小規模化を目指しているグループホームは少ない状況です。

Q：子どもが少なそうな地域だが、何人くらい施設に子どもが通所しているのでしょうか。

A：57名ほどです。

Q：地域化していることで、地域の人から注意を受けることがあるとのことですが、地域との交流はありますか。

A：地域行事には必ず参加しています。

<助言者コメント>

- ・地域で生きていることを学びました。





## パネル型発表 第2会場

助言者

早坂 信哉（東京都市大学人間科学部児童学科教授）

中原 ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

	発表者	所属	テーマ
1	高山 都規子	在宅介護家族会「かたよせ会」	在宅介護者の看取り後のフォロー
2	山岸 萌 牧野 あかり 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	玉川ボランティアビューローでの バザーにおける軽食提供
3	梅原 朋美	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」 28年度の取り組み
4	矢藤 真代	東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科	遊ぼう会における障害者支援

## 在宅介護者の看取り後のフォロー

在宅介護家族会「かたよせ会」 高山 都規子

### ○目 的

平成9年11月12名で在宅介護家族会として発足、今年4月20周年行事をした。発足当時介護まっ最中の方ばかりお互い励まし合って成長してきた。現役の方が少なくなったが、介護をするであろう方々に経験者として相談相手に役立っている。長い間一生懸命介護をしてきた方々のご自分の人生を見直す会として役立つ事を目的とする。

### ○活 動

毎月第3木曜日12時30分～16時「上北沢ふれあいの家」で開催している。年会費1500円 参加費200円 非会員300円 会員数40名  
特徴としてイベントが多く、落語、コンサート、ファッションショー、おとこの台所の 出前シェフ、会食会 新年会、クリスマス会ETC、  
時間がある時は手工芸をしている。  
保健センターから運動指導の先生がみえ健康体操や認知予防の体操をしている。

### ○結 果

6月には毎年参加している「ありがとう介護の会」に行き、認知症専門医M病院のN先生の認知症についての講演は大変参考になり18名が参加した。

### ○課 題

介護現役の方は自由時間がなく参加するのが難しい、一時でも介護から離れ、息抜きが大切だから、その時間がとれるよう介護サービスが充実すると良いと思う。

<質疑応答>

Q:かたよせ会は、会員同士が繋がるためにどのような活動をしているのでしょうか。

A:毎月1回「上北沢ふれあいの家」を会場に、様々なイベントを開くなどサロン活動を行っています。

<助言者コメント>

- ・20年間やっているのは、世田谷区の家族会でも一番長いと思います。
- ・他の人が参加できるといいですね。



## 玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供

発表者：東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科  
山岸 萌、牧野 あかり、峰村 貴央、鈴木 礼子  
協力機関：玉川ボランティアビューロー

### 【背景・目的】

平成28年2月26日(土)・27日(日)に世田谷区内の二子玉川にある「玉川ボランティアビューロー」でのバザーにおいて、東京医療保健大学の医療栄養学科学生5名と教員2名で、軽食提供のボランティアを行いました。

### 【実践内容】

対象は、バザー当日のボランティア。軽食内容は、豚汁・おにぎり・漬物を提供しました。材料は前日に買い出しを行い、当日は豚汁に使用する野菜の下処理から調理まで行い、おにぎりは1日35名分を予定し、梅干しや昆布、鮭、明太子の味を用意して70個以上(1人前2個)作成しました。

### 【結果】

バザーボランティアの方々からは、「温かい豚汁を食べて心が休まる」「おにぎりの具の量や種類が多くて嬉しい」という声を聴くことができました。

### 【考察】

玉川ボランティアビューローのバザーにおける軽食提供活動は、私にとって初めての、また、本学にとって2回目の経験でした。今回の参加を通して、二子玉川は自然の豊かさと、開発された町並みが調和された風景をもつ、子供から高齢者まで様々なライフステージの方が住む町であり、今後、ソーシャルキャピタル・地域住民同士のつながりを大切にしながら、発展していく地域づくりが重要であると感じました。今後、多くの人たちが集うボランティア活動に、参加したり、実践したりする「きっかけ」の場としても、今回のような玉川ボランティアビューローにおけるバザーの運営は大切であると感じました。さらに、この経験を活かして、大学の友人や後輩にもボランティア活動の大切さや人とのつながりの魅力を伝えていきたいと思います。

### 【課題】

今回の地域活動を通して、栄養士の視点から、地域活動における給食提供の支援として、実践的な学びとなりました。特に、このような実践活動は、災害時を想定した場合の訓練や準備につながると感じました。地域センターに近接した場所に、災害時を想定した備蓄米の保管や連絡網の整備(地域の中での給食に関わる人的資源の確保)など施設とボランティアとの連携がより円滑に進むように準備しておくことで、災害時の備えとしての役割が担える可能性があると感じました。

<質疑応答>

Q：軽食の提供に要する費用はどうしたのでしょうか。

A：ボランティアビューローで負担しています。

<助言者コメント>

- ・災害時の食事の確保・栄養は大切なので、この経験を生かして欲しいと思います。
- ・今後も継続して地域の人にも参加していただきたいですね。



## 歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」28年度の取り組み

発表者：等々力の家デイホーム 梅原 朋美  
共同研究者：等々力の家デイホーム 荻谷 里美

### 《1. 研究前の状況と課題》

平成21年3月に歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて8年目。登録数約80名、一日数メートル歩くことを目指す方も、2キロを目標に歩いている方もいれば、距離ではなく歩き方がテーマの方もいらっしゃいます。登録者一人一人にとって、歩行訓練が在宅生活にどのように役立っているのか・・・チームを作って取組み、「在宅生活サポートデイ」における歩行プログラムの可能性を考えました。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

28年度の試みとして下記のテーマに添った訓練により在宅生活が継続できることを成果と仮定しました。

- ①生活基盤サービス
- ②生活リハビリ
- ③多彩なプログラム
- ④ご家族支援
- ⑤地域支援

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

★対象者：歩行訓練目的別テーマより研究対象者として選定。

★取り組みの手順：  
・目的の設定  
・訓練実施と記録  
・ご家族ヒアリング、アンケートによる生活状況把握

★取り組み時間や期間：一回約20～30分、週1回～週4回

★取り組んだ職員数や構成

訓練は全職員（介護職15人 看護師1人 理学療法士2人）にて実施

効果検証はチームにて実施（チーム員：生活相談員2、介護職2、理学療法士2）

★活動の成果を出すポイントになった点

- ・歩行訓練継続の意欲向上施策  
遊歩カード 定期的な表彰式実施 ホームページ活用

### 《4. 取り組みの結果と考察》

- ・事例1：地域の町会への積極的参加。  
⇒町会への参加、旅行へも参加が出来た。
- ・事例2：1人での通院が出来るようになった。  
⇒歩行状態の安定。
- ・事例3：生活動作の中での歩行訓練の実施、PTとの関わり。  
⇒1人で出来なかったお買い物が継続してできるようになった。

### 《5. まとめ、結論》

この取り組みにて活用した歩行訓練のテーマは、研究対象者においては概ね達成したと考えます。

今後この考え方を全遊歩倶楽部登録ご利用者に展開し、事業所として在宅生活サポートデイという大きな目標に向かって取組んでまいります。

<質疑応答>

Q：歩行アセスメントはどのようにしているのでしょうか。

A：看護師と一緒に評価しています。

Q：要支援の方は参加ができるのでしょうか。

A：できます。

Q：理学療法士の来る頻度はどのくらいでしょうか。

A：理学療法士は2名いて、週に2回水曜日・金曜日に来ています。

Q：どこかと提携しているのでしょうか。

A：東都リハビリテーション学院の教員を兼任していますが提携はしていません。

<助言者コメント>

- ・次のステップが形として見え、通っている人の成長が見てとれます。
- ・要支援の方については相談した方がいいですね。



## 遊ぼう会における障害者支援

発表者：東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科 矢藤 真代  
協力機関：玉川ボランティアビューロー

【背景と目的】世田谷区・二子玉川の玉川ボランティアビューローでは、月1度、遊ぼう会が行われています。遊ぼう会の趣旨は、こどもも大人も、障害のある人もない人も含め情報交換したり、安心してコミュニケーションをとる場の提供です。主な参加者は知的障害を持つ方とそのご家族です。学生として、様々な方と地域の方と関わり、視野を広げることを目的として、遊ぼう会へ参加させていただきました。

【実践内容】月1回実施される遊ぼう会の平成27年度の活動のうち、5月、6月、10月、1月の4回にボランティアとして参加させていただきました。

5月は、みんなで1枚の大きな紙に自由に絵を描いたり、おり紙を貼ったりして、図画工作を通して、コミュニケーションをはかりました。はさみを扱う際に、けがのないように注意したり、ガムテープやのりをうまく使えない方には補助をするなど、個々人のレベルに対応した支援を心がける必要があることを学びました。

6月は「ミニ運動会」として、障害物レースや妖怪体操、ぬりえを行いました。

チーム戦にすることで団結力が生まれ、盛況な会となりました。また、体を動かすことが好きな参加者が多いため、音楽に合わせた妖怪体操も取り入れ、好評でした。

10月はハロウィンをテーマとし、仮装行列やパンケーキ作りを行いました。それぞれが自由に仮装し、二子玉川駅周辺を歩きました。障害者向けのハロウィンイベントは少ないため、仮装をしてハロウィンを過ごすのは初めてという方が多く、保護者の方にも喜んでいただけました。パンケーキは自由にデコレーションをして、みんなで一緒に楽しく作り、一緒に食べました。

1月はお雑煮作りと昔遊びを行いました。お雑煮の調理はボランティアが担当し、参加者は、出汁の昆布を切ったり、お餅を焼いたりしました。昔遊びは、「こま」や「かるた」、「羽根つき」などを自由に取り組み、最後に全員で、童謡を歌いました。

【結果】会の参加を通して、参加者の興味や嗜好をとりいれ、全員が楽しみながら参加できる催しを企画すること、また一人一人の能力に合わせ配慮しながらの実施が、より効果的な実践活動につながるということを学びました。

また、「食」を通して地域貢献できることが様々あることに改めて、気づきました。

【考察】最初は不慣れで、接し方がわからない場面が多かったが、継続して参加することを通して、心を開いて相手に関わり、一緒に触れ合う場を作り、コミュニケーションをとることで、壁がなくなると学んだ。遊びを通して、自然に楽しくコミュニケーションをとる場を提供する「遊ぼう会」の活動は、障害のある方もない方も、ともに地域に住みやすくなる環境を整える上で大切なものであり、今後も継続的に支援に参加をしていきたい。

【課題】個人活動としての参加でしたが、今後、人的資源の確保や、継続的な活動支援のために、ボランティアセンターと地域大学等の連携強化などが、望まれます。





# 教室型発表 第1分科会

子どもとともに育ちあう/子ども、若者のかがやく社会/その他

進行役・助言者

伊藤 陽一（東京都市大学人間科学部児童学科講師）

森田 規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

	発表者	所属	テーマ
1	坂田 朗 久保 恒平	社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園	主体性を育む保育、その取り組み
2	八並 百合夏 下村 泉 前沢 佳穂 溝口 寛乃 宮本 愛衣 武笠 螢 山上 由琴	東京都市大学人間科学部児童学科 伊藤陽一研究室	児童養護施設における学習ボランティアのあり方～学生と子ども・施設・地域の育ち～
3	古澤 昇 竹村 睦子	聖ヶ丘教育福祉専門学校 一般社団法人 子ども・若者応援団 たけむら社会福祉士事務所 一般社団法人 子ども・若者応援団	高校中退防止のための学びと出会いの場 「寺子屋みらい in 善宗寺」活動報告
4	宮崎 紘子	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部	地域と学校をつなぐ中間支援機関としてのボランティアセンター
5	内田 朝代	特定非営利活動法人若者の自立支援 すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェアハウス運営
6	河野 真帆 新井 山信 原田 彩加	東京都市大学人間科学部児童学科	昔遊びやわらべ歌の良さ
7	伊能 亮	社会福祉法人せたがや櫨の木会 大原福祉作業所	知的障害のある方を支えるために

## 主体性を育む保育、その取り組み

社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園 坂田 朗  
久保恒平

### 1. 目的

私たちは、思いやりを持ち、たくましく自分の力を働かせ、困難に直面した時にも自分の力で乗り越えられる子どもを育てるべく、子どもたちの主体性を育むことを目標に保育を展開している。しかし、保育所において、大人（以下保育者）が結果をコントロールしすぎてしまい、子どもの主体性の芽生えを阻害する結果を招いてしまうことがある。今回は、幼児における行事の企画・運営の話し合いを取り上げ、どのように保育者間の共通認識を作り出し、チームとして主体性を育む保育実践をしているのかを報告し、その取り組みについて会場とともに考えていく。

### 2. 実践内容

内容：卒園式での発表を何にするか、子ども達と話し合い決めていく

#### (1) 子どもが主体となる関わりを実践してみる

子どもと一緒に話し合う・出された意見を具現化するよう努力する等

#### (2) 保育者と振り返り、考える機会を設ける その時の保育者の言動を振り返る 保育者の考えが誰を主体としているのかを考える等

#### (3) 子どもが主体となる関わりを再度実践してみる 子ども本来の力を実感する 子どもに任せる部分を増やしてみる等

### 3. 結果

子どもたちとの話し合いは、個々が自己主張する場となり、保育者の中には意味がないと感じ意見する者もいた。さらに、子どもたちの意見通り発表の練習を行ってみると、子どもたちからも「つまらない」等と感想が寄せられた。保育者間でその場面を振り返るなか、誰が主体となっているのかを考えていくと、子どものためと言いつつも、保育者の価値観を子どもたちに押し付けようとしていたことや、見栄えよく・まとまった形を求めていたのは、保育者の方だったと気付いていった。

また、再度子どもたちと話し合いの場を設けると、子どもたちなりに反省し、建設的な話し合いを始めたことを目の当たりにし、保育者が子どもの可能性を阻害していたことにも気付いた様子だった。

### 4. 考察と課題

この一連の流れを経験することで、保育者は『子どもたちのため』と言いつつ、如何に保育者自身の価値観を子どもたちに押し付け、子どもたちの主体性を阻害していたのかを気付かされていったといえる。この保育者に新たな視点や気づきを与える取り組みが、保育者間の主体性に関する共通認識を作る機会となり、チームでの主体性を育む保育実践に繋がっているのではないかと言える。

<質疑応答>

Q：普段の保育でもなりきり遊びがあるのでしょうか、劇をやる上でできたのでしょうか。

A：子どもたちは、テレビで観たり、実際に行った場所から「忍者になりたい」と普段から言っていました。それを劇に取り入れました。その子は忍者に普段から興味があったため、桃太郎に入れたかったのではないのでしょうか。

Q：年長以外の0、1、2歳児の主体性を育む保育はどのようにしているのでしょうか。

A：0、1、2歳児は、ごっこ遊びをとおして生活習慣を学ぶ中で主体性を育むようにしています。3歳児からは話し合いをしています。ルールを決めるのではなく、どうしたら良いか子どもたちと話し合いをして決めています。このように普段の生活を送る中で主体性を育むような保育をしています。

Q：周りの先生との共通理解はどのようにしているのでしょうか。

A：先生同士が「どうしてそう思ったのか」を聞きあう関係になるのが大変です。子どもからの先生へのアプローチはそれぞれ違うから、先生同士で情報を共有するようにしています。

<助言者コメント>

- ・先生方が温かい保育をしていると感じました。



## 児童養護施設における学習ボランティアのあり方 ～学生と子ども・施設・地域の育ち～

東京都市大学人間科学部児童学科 伊藤陽一研究室  
八並百合夏、下村泉、前沢佳穂、溝口寛乃  
宮本愛衣、武笠蛍、山上由琴

### I. はじめに

私たち東京都市大学人間科学部児童学科3年伊藤研究室は、主に児童養護施設についての研究を行っている。世田谷区近郊の児童養護施設と関わりを持ち、多くの経験をさせていただくうえで今回はその児童養護施設における学習ボランティアのあり方から学生と子ども・施設・地域の育ちについて考える。

### II. 現状把握

児童養護施設は、児童福祉法第41条『児童養護施設は、保護者のいない児童虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする。(一部省略)』に規定されており、毎年のように施設のあり方が改正され、1997年の改正でその目的に「自立支援」が導入された。加えて、入所に際して本人の意向を聴くことや児童相談所の処遇指針を受けて、子どもおよび保護者の意向と関係機関の意見を踏まえて作成する、自立支援計画の作成が義務づけられた。2013年の5月1日現在では、高校進学は高くなったが、高校進学後の進路は、一般に比べ進学率は低く、就職率が高くなっている。

児童養護施設で暮らす子どもにとって児童養護施設は生活の場であり、家であるといえる。近年は小規模化が進んではいるものの集団生活である為、日々の生活の場面で制限はあるが、家庭環境に近い環境の中で他の子どもや職員と生活を送っている。LDHDや高機能自閉症といった障害を抱えている子どもも少なくなく、特別学級に通う子どもや通院をしている子、処方された薬を飲んでおり、施設には学校や病院、その他の関係機関とのさらなる連携が求められている。また退所後は経済的な問題もあることから、大学・短大、専門学校等へ進学する子どもは少なく、就職する子どもが多い。そのため就職の幅を広げるために技術系や福祉系など専門の知識や資格を得ることができる高校に通う子どもがいる。

### III. おわりに

過去に川崎市の児童養護施設と関わりを持ち学習ボランティアを行っていた。実際に子ども達と関わりながら施設のあり方なども感じられていた。今後、学習ボランティアを行っていくうえで、フィールドワークを広げ多くの施設と関わりを持っていく。

参考文献については当日の発表にてお伝え致します。

<質疑応答>

Q：学習ボランティアをする中で難しい、課題と感じたことは何ですか。

A：児童養護施設で暮らす子どもたちも、普通の家庭で育った子どもと何も変わらない元気で素直な子どもたちです。この子どもたちをこれからどうサポートしていくことができるかを考えました。

自分自身が人見知りで、小学生との距離感が難しかったのですが、子どもたちは来てくれました。

小中学生の勉強は大変です。子どもたちとの信頼関係がない中で、どうするのがよいか悩みましたが、一番身近な大人として言葉遣いや態度に気をつけました。最初は、身構えてしまいましたが、自分も素直にいけばいいと思うようになりました。

<助言者コメント>

- ・施設の職員や子どもたちが素晴らしく素敵な施設ですね。子どもと関わることは大切です。
- ・子どもと関わるのが皆さんにとって学びになりますし、学習することが大変な中で、皆さんの関わり方が良かったです。



## 高校中退防止のための学びと出会いの場「寺子屋みらい in 善宗寺」活動報告

聖ヶ丘教育福祉専門学校 一般社団法人子ども・若者応援団

古澤 昇

たけむら社会福祉士事務所 一般社団法人子ども・若者応援団

竹村 睦子

寺子屋みらい in 善宗寺の活動の目的は、一人ひとりの夢や希望に満ちた自立を支えるために高校卒業を目指すことと、さまざまな学びや経験、新たな出会いを通じて自己肯定感を高めることにあります。また、実践内容としては、活動日は毎週金曜日、活動時間は10:00～20:50としており、この間で自分の都合に合わせてそれぞれが設定します。会費は原則月額15,000円ですが減免制度を導入しており個別の相談によって参加費を決めています。対象は中学生・高校生ですが、保護者の就学支援の観点から社会人も受け入れています。さらに、入会までの流れは、①問い合わせ→②個別相談→③見学→④体験→⑤入会手続き→⑥入会としており、子ども自身が入会を希望していることが唯一の条件としています。9月現在、参加者は4名（内訳：中学2、高校1、大人1）、スタッフは講師4名、ソーシャルワーカー1名、大学生2名で展開しています。講師は教職や塾講師経験者であり、地域に暮らす学校長経験者が塾長を努めています。

活動を始めて半年が経ち、活動の結果として4点があげられると考えています。すなわち、①教育と福祉のエキスパートの参加によって教育と福祉の両輪の支援体制が可能となった。②わからなかったことやできなかったことがわかるようにできるようになったなど学習効果が確認できるようになった。③大学生のスタッフが子どもとの関わりを通してメンターとしての役割を果たすようになった。④中学生、高校生、大学生、社会人の参加により10代～70代の異世代間の交流ができている。

そして、この結果を踏まえ、寺子屋みらいがコミュニティの一つの拠点として人を人やさまざまな機関につなげ、コミュニティのネットワーク化が図れるのではないかと考えています。

さらに、今後の課題としては、①参加者とスタッフの増員、②活動の周知、③地域の中学校や高校への連携強化の3点があげられると思います。①については、特に地域に暮らす教職経験者の掘り起こしと協力要請をしていこうと考えています。②については、ホームページの充実や関係機関への定期的な訪問を通して、顔の見える関係づくりを心がけたいと思っています。③については、活動の趣旨を理解していただき、支援を必要としている子どもとできるだけ早い時期に出会うために活動の理解と協力がいただけるように努めていこうと考えています。

<質疑応答>

Q：ソーシャルワーカーの今後の関わりや、寺との関係について教えてください。

A：参加者にはひとつの社会参加の場として来て欲しいという気持ちです。ソーシャルワーカーは、保護者等との信頼関係の構築や子どもの今の状況を把握するようにしています。また、他の関係機関との連携も行い、入塾したあとも継続して連携しながら対応しています。

寺との関係については、スタッフ会議に同席してもらい、子どもたちのことを知ってもらうとともに、子どもたちとスタッフがどう関わっているのかを理解いただくよう努めています。参加者と寺をつなぎたいと思っていて、どうつないでいくかを話し合っています。

Q：減免制度について教えてください。

A：お金のために諦めることがないように「誰でも入れる寺子屋」を実現したいと思っています。そのため減免制度を導入していますが、費用については家庭の状況により相談させていただいています。

Q：10時から21時と長い時間をどのようになさっているのでしょうか。

A：個人の生活の状況に合わせて、この場をどう使うかは参加者に任せ、来る時間も帰る時間も自分で決めています。このように「いつでも受け入れる」ことを大事にしています。

Q：保護者に対するケアについてどのようになっていますか。

A：定期的な面談や保護者会を開催しています。

<助言者コメント>

- ・切れ目のない支援が大切な中で、そのような子どもたちを支援されているのですね。このような活動が根づくといいですね。



## 地域と学校をつなぐ中間支援機関としてのボランティアセンター

社会福祉法人世田谷ボランティア協会  
ボランティア・市民活動推進部  
宮崎 紘子

### 1. 活動の目的

- ・次世代のボランティアの育成。若者（特に高校生や大学生）の“ボランティア”との最初の出会いをより充実したものにする。
- ・学生が地域に参加することにより、世代間の交流を図り、地域を活性化させる。

### 2. 実践内容

- ・都立高校の教科「人間と社会」（旧教科名「奉仕」）や、大学の「ボランティア入門講座」等の時間に、地域の複数の団体に協力いただき、体験活動をコーディネートしている。その場限りの単発で終わらないよう、また、学生の自主的・主体的なかわりにつながっていくよう、できるだけ継続的なプログラムを提案している。
- ・ボランティアセンターが中間支援機関として地域の団体と学校との間に入り、双方の希望や限界を聞き、双方が無理なく実施できるよう調整役をつとめている。
- ・直接的な体験活動のほかにも、高校生にむけて、大学生によるボランティア体験談の授業も企画し、身近な世代からボランティア活動の多様性や意義を伝える機会を提供している。大学生にとっても自分の経験を人に伝えることであらためて振り返ることができ、貴重な機会となっている。

### 3. 結果と考察

- ・多分野の団体に協力いただくことで、参加する学生が希望するメニューを選択して、より主体的な活動につなげることができる。「誰かのためにするものだと思っていたけど、自分の成長にもつながった」「“ありがとう”といわれて疲れが吹き飛んだ」「もっと私たちの世代ががんばらないと！と思った」などの感想があった。
- ・これらの授業をきっかけに、自発的に地域の活動に参加してボランティアとして活躍したり、NPO団体のスタッフになった事例もある。
- ・学校側は地域とのつながりが少ないため、どの団体に依頼したらいいかわからない。一方で、地域の団体は学校（学生）のために協力したくても、どのようにアプローチしたらいいかわからない。その間をつなぐ役割としてボランティアセンターが機能している。

### 4. 課題

- ・公立校は教員の異動が多く、数年で体制が変わりやすい。学校側の理解と担当教員だけでなく、学年・学校全体としての協力体制が不可欠である。
- ・団体によっては、学校の授業のために特別プログラムを企画して取り組むこともあるので、継続していくために負担にならないような配慮が必要と思われる。

<質疑応答>

Q：運営費はどこからどのような形で集めているのでしょうか。

A：金額の定めはありません。学校側から謝金や事業委託費をいただく場合もありますが、寄付やバザー等で法人の事業運営費をつくっています。

Q：活動は区内が中心ですか。また、何校くらい行っているのでしょうか。

A：ほとんど区内の学校で、年間20校くらいになります。平均して小学校で5～6校、中学校で3～4校、高校で5～6校、大学は4～5校になります。

Q：ボランティア経験者がNPOのスタッフになったとありましたが、どのような状況だったのでしょうか。

A：高校の授業で計10時間の体験活動をして、その活動に興味を持った高校生が、その後ボランティアを経てスタッフになりました。

<助言者コメント>

- ・中学生は社会科見学をさせていただいています。私達の周りで若い力を感じることは、大人としても嬉しいことです。これから発展していくことでしょう。



## 児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としての

### シェアハウス運営

#### 特定非営利活動法人若者の自立支援すみれブーケ

理事長 内田 朝代

1. 目的：18歳の春には施設を退所しなければならない若者たちが社会で困難に陥ったときのために、彼らの実家となるシェアハウスを世田谷区で平成26年4月より運営しております。

若者が帰ってこられる場、休息や相談に訪れられる場、就労のための準備ができる場、そうした場所を提供することで、彼らの社会的自立と再スタートを支援しております。

2. [居場所づくり] シェアハウス運営

すみれブーケは、児童養護施設等を退所後、生活していくなかで失敗したり、進学したけど困難に陥ったりしたときに、再チャレンジしたい若者を世田谷区で平成26年4月より支援しています。その活動の中心がシェアハウスを運営することによる「若者の居場所づくり」です。居場所といっても、すみれブーケの運営するシェアハウスは、単に住居を提供するというわけではありません。親がいても親に頼ることのできない若者、親との関係性を絶たざるを得ないなか社会で生きていく若者たちです。失敗したりつまづいたりしたときに、何が必要でしょうか。皆さんが、そうしたときに当たり前のようにしていること、家族にぐちったり、相談したり、泣いたり、怒ったり、怒られたり、それが彼や彼女たちにはできません。そこですみれブーケは次のように考えています。

- ・社会人と住むことを重視

すみれブーケは、若者がシェアハウスで社会人とともに住むことを重視しています。「ひとりではないよ！」と思ってもらえるように、すみれブーケは彼や彼女たちに寄り添っています。

- ・コーディネーターを配置

社会人といっしょに住んだからといって、必ずしもいつもうまくいくわけではありません。いっしょに住むからこそ、つらいこともあります。そこで、すみれブーケではコーディネーターを配置しています。

- <コーディネーターの役割>

- ・若者が相談したいときにすぐ相談に応じる。
  - ・いっしょに住む社会人との関係調整を行う。
  - ・暮らしの中でのルールの大切さを説明する。
  - ・公的書類の書き方や提出方法・法律関係・お金の使い方・バイト先の手続等など、社会的自立に向けたアドバイスやサポートを行う。

3. 今後の課題：当団体は制度外の試みのため公の補助金等は無く、会員様の会費や寄付金で事業を行っておるため資金不足や賃借可能な家も賃料等条件が合わず、もう一箇所のシェアハウスを開設できておりません。多くの若者を受入れるためにも資金を調達しなければなりません。

<質疑応答>

Q：社会人と利用者のマッチングのポイントは何か。

A：特にはないです。完璧な社会人はいないので、お互いに成長していく感じ。社会的養護の理解がある人ならよいと思います。

Q：弁護士や司法書士など外との連携について、どのようにしたらつながりを持てるのか教えてください。

A：法人会で知り合い、もともとあった関係から無料相談を行っていただいています。また、書類に関する費用等も弁護士の方々に負担していただいています。

Q：入居できるのは、世田谷区の人だけなのでしょうか？

A：現状は世田谷区民のみです。他の区などからも問い合わせの電話があり、拡げることも考えなくてはと思っています。

Q：地域との関わりはどのようになっていますか。

A：もともと地域との関わりが多かったこともあり、NPO法人の立ち上げをしました。今も地域のイベントなどに参加しています。

Q：入居にあたっての利用料は？

A：家賃として3LDKの場合は、社会人は6万2千円。利用者は半額程度の3万円いただいています。

Q：社会人が入居する場合の審査、基準、条件はどのようなものでしょうか？

A：特に決まりはありませんが、一緒に住む若者に対して過去にとらわれることなく、その人の現在をありのままに見ることができるかが重要です。

Q：自立支援ホームにせず、シェアハウスにしたのはどうしてですか？

A：年齢制限もないなど、制度にとらわれず運営できるからです。



## 昔遊びやわらべ歌の良さ

発表者：東京都市大学人間科学部児童学科 河野真帆、新井山信、原田彩加  
共同研究者：東京都市大学人間科学部児童学科 安部琴美、亀田恵梨  
川上雪乃、田中摩実

### 【目的】

昔から今まで親しまれ続けてきた昔遊びやわらべ歌がなぜ楽しいと感じるのか、どのように楽しまれてきたのかを知り、改めて昔遊びやわらべ歌の良さを再認識する。

### 【内容】

わらべ歌、昔遊びの中から2つを取り上げ、これらについて考察する。また、実際に参加者と一緒に取り組むことで、どのような楽しい要素があるのかについて実感するとともに、参加者からの意見を参考にさらに考察を深めていく。

・わらべ歌 ・とおりゃんせ ・でんでらりゅうば  
・はないちもんめ ・あやとり …など

### 【考察】

昔遊びやわらべ歌の良さについて様々な視点から考察することを通して、語り継がれる理由やその魅力に迫っていく。

### 【課題】

- 伝承の方法や場が減ってきている。
- 伝承できる人との関わりが少なくなってきたおり、伝えられる歌や遊びが限られてきている。

以上のことから、昔遊びやわらべ歌の良さが再認識されないまま、気づかないうちにいつしか失われていくのではないかという懸念がある。



<質疑応答>

特になし

<発表者からの感想>

- ・テーマを決めるときには、児童学科なので、子どもに関するテーマを考え、あやとりを挙げましたが、思ったより難しく、練習に時間がかかりました。しかし、練習をする中で会話が生まれ、昔遊びの素晴らしさを実感できました。
- ・「はないちもんめ」や「でんでらりゅうば」などの遊びは相手がいなければできないということがわかりました。保育現場でもふれあいなどを大事にしたいと思います。
- ・自分たちがわらべ歌ではないと思っていた歌があったり、わらべ歌の幅の広さを知りました。
- ・昔遊びのメリットは、道具が簡単なものだったり、異年齢交流の良い機会になっていたのではないかと思います。昔遊びを活かすなど、現代でもさまざまな世代の交流の場をつくりたいです。
- ・あやとりを取り入れている保育園が多いことが実習でわかりました。
- ・あやとりは、できない人でも教えてもらうなど、できない人とできる人の良いコミュニケーションの場であると思いました。
- ・あやとりは、はじめての人でも楽しそうにやっていることから、あやとりの良さを改めて感じました。

<助言者コメント>

- ・子どもにとっては、遊ぶことが勉強ですね。
- ・昔遊びやわらべ歌は、大人にはメンタルヘルス（心身の健康）につながる役割があると思います。



## 知的障害のある方を支えるために

社会福祉法人せたがや檜の木会大原福祉作業所  
伊能 亮

### 1. はじめに

知的障害への偏見や周囲の理解の不足、社会的排除といった問題が現実に行き起きている今、知的障害のある方の自分らしさと自信とプライドをもった豊かな生活を支えるために、多くの方に知って頂きたいことが何なのかを考えたい。

### 2. 目的

多くの方は知的障害のある方と関わる事がほとんどない。そして関わりたくてもどう接したら良いのか分からないという不安を抱える方も多い。知的障害のある方の現状と生きづらさ、知的障害のある方と関わる上で大切なことを発表し、多くの方に知的障害者に対して関心を持って頂き理解の土壌とすることを目的とする。

### 3. 知的障害者の現状と生きづらさ

#### (1) 知的障害者とは

日常生活において物事を判断したり、必要に応じて適切な行動を自分で行う力が一般的に遅れた水準にとどまっている状態のことをいう。しかし、感性（感じる力：嬉しい、悲しい、辛い、誇らしいなど）はとても豊かである。そういった方々が、住み慣れた地域で、自分らしく生きるためには何らかの支援が必要とされている。

#### (2) 現状

(平成 27 年障害者白書)

**知的障害者数 74 万 1 千人**

身体障害者 393 万 7 千人、精神障害者 320 万 1 千人

#### (3) 知的障害による生きづらさ

① 相手の気持ちを察することができにくい

② 自分の思いを上手く伝えられない

### 4. 知的障害のある方と関わる上で大切なこと

#### (1) 初めての出会いにあたって

・常識を大事にする・本人の意思に沿う・見守ることの大切さを知る

#### (2) つきあう視点

・関心を持つ・受容する・共感する・その人らしさ、持ち味に気づく

#### (3) 実際のエピソード : 本人の詩を通して

「私」

私はしょうがいしゃです

でも、足も手も口もことばもしっかりしているもん

やっぱり頭が悪いのかな 障害者って何

私もできることあるよ

だって大人だもん

<質疑応答>

Q：どのような活動をしているのでしょうか。

A：18歳から75歳までの28名の方が、9時から16時まで通所して、コーヒー・クッキー作りや企業からの受託作業をしています。また、宿泊旅行などの余暇活動もしています。

Q：障害による生きづらさとは、コミュニケーション以外ではどんなことがあるのでしょうか。

A：多くの方は人間関係、コミュニケーションの問題が生きづらさにつながります。作業能力の有無に関わらず、企業へ就職してからの人間関係が課題になることも多いです。また、親亡き後や、障害の制度から介護保険制度へ移行する時なども多くの課題があります。地域の方との共通理解の度合いなども生きづらさにつながると感じます。

<助言者コメント>

- ・地域にはいろいろな人が生活している施設があります。これからも施設を大切にしていきたいですね。





## 教室型発表 第2分科会

### 働く社会に参加する/協働・連携（チームケア等）

進行役・助言者

辻本 きく夫（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

牧野 まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）

	発表者	所属	テーマ
1	根本 真理子 朴 明生 山下 麻紀	特定非営利法人 まひろ 特定非営利法人 まひろ 東京都若者社会参加応援事業 Area-1	なかまち NPO センターでのわかものの活躍 ～市民活動支援と若者支援のコラボレーション～
2	山本 剛志	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	将来を見据えた暮らしへの支援
3	深山 ゆみ 三橋 綾香	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部 玉川ボランティアビューロー 代田ボランティアビューロー	発達障がい特性をもつ方の地域参加 サポート
4	野口 淳史 鈴木 裕貴	特別養護老人ホーム フレンズホーム	手作りお神輿 一緒に夢を担ごう
5	長見 亮太	社会福祉法人せたがや桜の木会 上町工房	Aさんとのエピソードを通して利用者 支援の醍醐味を考える
6	三浦 覚	特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ	特別養護老人ホームで働く生活相談員の仕事 ～生活相談員の業務改善とその効果～
7	赤理 文子 堀内 良子 宮下 享子	下馬あんしんすこやかセンター (社会福祉法人日本フレンズ奉仕団)	地区のケアマネ支援

## なかまち NPO センターでのわかものの活躍 ～市民活動支援と若者支援のコラボレーション～

特定非営利活動法人まひろ 根本 真理子、朴 明生  
東京都若者社会参加応援事業 Area-1 山下 麻紀

### 1. 目的

Area-1 は、なかまち NPO センター内で引きこもりや疾患を持つわかものの居場所としてフリースペースを提供している。そこでわかものたちは居場所内での各種プログラムの参加と市民活動の一環として NPO センター内の巡回や共有部分の管理等を行っている。若者支援と市民活動をコラボレートさせることにより社会参加を体験すると同時に自己肯定感・達成感を得ることを目的とした。

### 2. 実践内容

開所日：月・水・木 午前10時～午後16時（祝日は除く）

活動内容：(1) なかまち NPO センター内の管理  
(2) 各種プログラムの参加  
(3) 季節毎のイベントの企画や開催

### 3. 結果

社会で生きていく中でつまづいた経験や自己否定感を抱いている方、行き場がなく自宅以外の居場所を必要としているわかもの達が、自宅以外のご自身の居場所として Area-1 にたどり着き、そして様々な活動を一緒に行うことで人と関ることや社会に出ていけていることを体感し、その過程において自分を肯定してゆくことができたと考える。なかでも居場所のある NPO センターをわかものが主体となり管理してゆくことと NPO センター主催の市民活動への参画は大きな効果であった。NPO センター利用者・団体の方々には心地よく NPO センターを利用していただけ、それが市民活動の促進の一助となり、一方わかものたちは居場所内の小集団のみでなく社会との確実なつながりを体験することができたのである。その体験が自己肯定感や責任感を感じる1歩につながりご自身の今後の人生において大きな糧となっている。

### 4. 今後の課題と考察

市民活動を始めとし様々な活動やプログラムに参加してゆくことで、自己肯定感が生まれ人との関わりを持ち続けてゆくことは大きな成果である。自己理解を深め就労した方、職場体験実習などの就労への具体的な一歩を踏み出している方もいる。しかし、居場所において自我が強まり自分の意見に固執しコミュニケーション等に課題が生じている。これらを成長の過程と捉え、自分の意見も主張し、相手の意見も尊重することをこれらの活動の中でどのように伝え学びを促してゆくのが今後の課題である。

<質疑応答>

Q：Area-1では、ひきこもりの方に対して、どのように具体的なアプローチをしているのでしょうか。

A：Area-1では、まず見学に来てもらい話をします。その際、ひきこもりの経緯や理由を聞かないようにしています。「とりあえず何でもよいので来てください」「やりたいことはありますか」などの声かけをしています。スタッフが一緒になって支えていく姿勢でアプローチをします。

Q：来所されている人たちの生の声を一言聞かせてください。

A：就職した方から「心の拠り所、戻れる場所である」と言っていたことがあります。



## 将来を見据えた暮らしへの支援

社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所  
山本 剛志

### 1. 概要

世田谷区立世田谷福祉作業所（以下、当施設）は、障害者総合支援法に基づく就労継続支援 B 型および就労移行支援を展開する多機能型施設であり、おもに知的障害者が通所利用（以下、利用者）している。当施設では、本事業である就労支援（作業・生産活動の提供や、就労を目指す人への必要な知識、技術習得・向上のための支援等）に加えて、利用者の日常生活における QOL（生活の質）の向上に着目した支援を実践している。これは、やがて来る自立や親亡き後等、利用者の生活環境が変化しても、日常生活が向上していくことを目指して支援しているものである。日常生活に即した支援を当施設で実践することで、利用者の家庭生活にどのような変化がもたらされ、課題が見えてきたかを報告したい。

### 2. 取り組み内容

#### ①アンケートの実施

アセスメントの領域を施設利用から生活全般へ拡大し、金銭管理や交通機関の利用、調理経験や施錠、電話の受発信などの取り組み状況について、4 分類 29 項目に整理してアンケートを実施した。

#### ②支援の実践内容（抜粋）

- (1)調味料の利用…給食時に提供しているドレッシングやソース等を個包装で使い切りタイプのものから、家庭用サイズのボトルへ変更し、自分で好きな味を選んだり、好きなものに好きな量をかけられるようにした。
- (2)電話の利用…作業における取引先への要件や材料の発注時に必要な電話連絡を利用者の役割として切り出し電話の利用経験が深まるようにした。
- (3)交通機関の利用…製品の納品も利用者の役割として切り出した。近隣へは台車を押して、遠方へは電車やバスを乗り継いで行くことで行動範囲の拡がりや不測の事態にどう対応するか、課題を自分で解決する力の向上を図った。
- (4)選挙…利用者自治会の役員選出における選挙を、実際の選挙に近い環境でおこなうことにより、経験を積み、実際の選挙権の行使につながるようにした。

### 3. 実践の経過

家族との連携を図れた事例では、当施設での支援実践が家庭生活にも活かされる事例もあった。今後、利用者本人が描く将来像を家族や支援者も共通イメージで持っていることが、自立や生活面における支援をしていくにあたり、ますます求められると考えられる。

<質疑応答>

Q：利用者の生活を高めていく上で、危険なこともあると思いますが、保護者、職員との情報共有はどのように行っていますか。

A：家族会を活用しています。例えば、買い物の場面では最初に職員が付き添いの上、見極めてから利用者単独で買い物をするなど、少しずつ段階を踏んで行うことや万が一困ったことがあれば、取引先などの周囲の方がたに協力してもらうことなどを家族会で報告しています。

Q：利用者が講師を務めたことで、変化はありましたか。

A：目に見えた大きな変化はないが、講義や発表の場を持つことで、自信や自己肯定感を持っていただいたのではないかと思います。

<助言者コメント>

- ・生活に即した実践的な取り組みがとても良いと思いました。リスクはあると思いますが、日々の実践の繰り返しをこれからも続けていってください。



## 発達障がい特性をもつ方の地域参加サポート

社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部  
玉川ボランティアビューロー 深山 ゆみ  
代田ボランティアビューロー 三橋 綾香

世田谷ボランティア協会では、2013年度より事業として成人期の発達障がいのある方の地域参加のサポートに取り組んできました。協会の窓口発達障がいのある方が来所して、ボランティアをしたい、社会とのかかわりを持ちたいとの相談が増えてきたため、また、理解がないために地域で孤立している方がいる現状が見えてきたためです。この状況に、まずは近くで地域参加をサポートする人材が必要と考えました。

当時、発達障がいについての認知は今ほど進んでおらず、全国的に当事者支援について模索中でした。その中で、世田谷区は先駆的に成人期の発達障がいのある方の支援を進めていました。そこで、区の担当課とともに検討を進め、発達障がいのある方が地域でいきいきと活躍できる仕組み作りについて、区とボランティア協会が連携して取り組むことにしました。

具体的には、区と共催で発達障がいのある方を支援するボランティア養成講座を複数回実施しました。講座修了者にさらなる学習会や活動の場などを提供し、支援について一緒に考えていくことで、世田谷ボランティア協会内の3拠点を活動場所とするボランティアグループがそれぞれに立ち上がりました。

玉川ボランティアビューローに『ココカフェ』、世田谷ボランティアセンターに『ナマバラ』、代田ボランティアビューローに『虹色クラブ』です。これらはすべて、当事者の方もそうでない方も運営にたずさわっています。それぞれの活動内容は、発達障がいのある方やそのご家族が安心して過ごせるカフェ形式の居場所づくり、発達障がい関連をテーマとする公開トーク、当事者の方と一緒に献立作成・買い物・調理をおこなうお料理会です。どのグループも試行錯誤を重ねる中、活動が充実してきています。メンバーからは活動における喜びや楽しさについての声が聞こえてきます。

運営する中で特性ゆえのトラブルもありましたが、メンバーは発達障がいの特性理解に努め、誰も排除することなく続けてきました。ボランティアビューロー職員も運営の相談にのり、活動がスムーズにいくようにサポートしています。

今後の課題は、グループの活動に責任をもってかかわるボランティアの充足、当事者の方のイベント参加を促すための活動の周知です。活動を安定的に続けるにはこの二つが必要と思われます。

取り組みを始めてから3年半経ち、行政のサービスも含め社会資源は大幅に増えてきました。地域の方も発達障がいについて以前より理解があると思われます。しかし、当事者やご家族また地域の中には、今でも理解されていないと感じている方、また理解ができずに困っている方がいます。ボランティア活動をとおして理解や支援の輪が広がり、当事者の方がさらに地域参加をして、みんながいきいきと暮らすよりよい地域になることを望んでいます。

<質疑応答>

Q：発達障害があり、人との対応が苦手な息子がいます。人に関わらず、一人で参加できるボランティア活動はありますか。また、参加する年齢に制限はありますか。

A：このような方に対しては、一人で取り組む簡単な事務作業があります。また、複数の人で行う活動では、他の人に関わらずに離れて一人でできるように工夫します。年齢に制限はありません。実際、発達障害のある中学生から大人の方が活動しています。その方にあったボランティアを見つけることも職員の役目であると考えています。



## 手作りお神輿 一緒に夢を担ごう

特別養護老人ホーム フレンズホーム 野口 淳史  
鈴木 裕貴

### 【目的】

昨年度発足した余暇活動委員会では、今年度のコンセプトとして、レクリエーションの他に入居者と職員と一緒に作業できることはないかと考えた。更に形に残る物を作成することにより完成するまでの楽しみと完成後の達成感を味わって頂く事、長く飾って楽しんで頂く事を目標とした。そこで入居者にとって昔から馴染みのあるお神輿を作成する事とした。材料として、オムツの入っていた段ボールを使用し、廃材利用も兼ねようと考えた。入居者は女性が殆どで、見たことはあるが担いだ経験のない人が多く、作成後も珍しいものが身近にある事を楽しんで頂きたい。

### 【実践内容】

余暇活動委員会のメンバーが主体となり、まずはお神輿の全体的な形を作成した。そもそも、お神輿がどのようなものか、どんな形をしているものなのかを理解していなかったため、手探りの状態でスタート。材料には、普段はそのまま捨ててしまっていた、オムツの段ボールを使用することにする。段ボールは、お披露目の際、担ぐには軽くて丈夫でなければいけないという点でも一番の素材であった。作成する場所には、入居者がくつろいでいるリビングの隣にある和室を選び、入居者から「何を作っているの?」「どんな形になるの?」と一緒に楽しみながら作成することができた。細かい作業が出来ない入居者にも、自分も参加したと実感を持って頂けるよう、アイスを食べて頂きその棒を柵に使用する等の工夫をした。

### 【結果】

8月に行われた夏祭りで、歩行の出来る入居者数名に担いで頂いた。大学生のボランティアや地域の方がたくさん参加されていて、大盛り上がりとなった。その後、敬老祝賀会では会場にお神輿を飾り、多くのご家族様にも見ていただいた。

### 【考察・課題】

できるだけ「一緒に」をテーマに物作りをすることを目標にしたが、ほとんどの方が認知症のため、細かい作業は難しく「一緒に」の大変さを痛感した。

材料が段ボールなので、作りやすいが壊れやすいという欠点もあった。一度担いだだけで担ぎ棒と本体が剥がれそうになるため、これ以上の実用は難しい。今後は飾って楽しむ方向で、更に飾りをつけて、見た目にも美しいお神輿に進化させていきたい。

<質疑応答>

Q：若者の居場所を提供する立場で年齢差がありますが、牛乳パックでベッドをつくるなどお年寄りと「共に何かをつくる」ということはよいことだと思います。上手にできなくても共に空間を共有することが大切だと思います。

また、お年寄りに馴染みのあるお祭りを選んだこともよかったですね。発表の活動の他に、夏祭りではどのような活動をして、地域とはどのように関わったかを教えてください。

A：盆踊りやかき氷、綿菓子などを職員がメインでやっていましたが、太鼓を買ってから利用者が自分で太鼓をたたいたり、利用者も一緒になってみんなでつくる祭りになりました。地域との連携もボランティアや学生と一緒に盆踊りを踊ってもらったり、車いすを押したりしてもらうなど参加してもらいました。

Q：認知症の利用者も多いということで、反応の違いもあると思いますが、どうだったでしょうか。

A：神輿を見て笑顔になる方もいました。見えるよう配慮したこともあり、神輿の作成にあたっては、入所者の誰も見ることが出来るリビングを使って作成したため、普段反応がない、話すことができない人もその様子を見て、目の色が変わって表情が明るくなる様子が見られました。



## Aさんとのエピソードを通して利用者支援の醍醐味を考える

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房

長見 亮太

### 1. 目的

知的障害者への支援の中で、課題や問題行動に着目し、行き詰まりを感じることもある。元々は困っている状況にいる人たちを支えるための仕事だが、時に彼らの振る舞いや言動に対して、困った人と捉えて関わることで、より付き合いにくさが増すことになる。

反対にその人を肯定的に捉えて関わることを主眼に置き、言動の背景にある本人の気持ちに気付いたり、共感する思いになることで、ゆっくりではあるがその人が育っている実感を得ることがある。そのように、支援者の心情が本人の姿に反映していくという側面も踏まえて、利用者支援の難しさ、面白みをエピソードを通して考察する。

### 2. 背景

Aさん（20代男性、自閉症、愛の手帳2度）は人への関心が強く、いつも元気に挨拶をして、人が好きで根の素直さを感じさせる青年である。人への関心から、気になる仲間への関わりがボディタッチの形になり、つねったり、小突いたり相手の拒否的な反応をもらうことでやりとりがパターンの的になり、固執する場面が続いていた。

### 3. 支援経過

ちょっかいは相手に関わりたい気持ちと捉え、双方に柔らかい対応を意識していたが、相手に怪我をさせる事態になる。心理士と医療相談も交え、してはいけないことと、こうしたらいいことの伝えを明確にして、行動の範囲も本人の思いのままにはせず、制限することも含め行動を整理する対応を始めた。

その対応でAさんの中で歯止めが利いている様子があり、その後の1年仲間への手出しはほぼなくなった。今でもこちらの意向に沿って共に行動してもらうことは多いが、本人が強いストレスを感じているような印象はなく、それまで気が散りやすかった分、作業の時間などはかえって集中が増し、力を発揮しやすくなった。

### 4. 考察

枠組みがあることで生活の組み立てがすっきりとした。一方で行動の制限という視点で接する機会が多いと、どうしても指示的な関わりが多くなり、指示に沿う沿わないの基準で本人を捉えてしまう怖さがある。本人のためにと思いながらのジレンマである。Aさんを支援する上で「教える」対応は必要だが、同時に「育む」関わりも必要となる。

生活が安定してきた中で、作業や行事での場面を通してAさんが見せる新たな自己表現や、こんなことに期待しているという思いを丁寧に拾っていくと、Aさんなりの育ちが見えてくる。指示的な関係では見えてこない、自分が肯定的に受け止められている、認められている、という後ろ支えによって主体的な表現が発揮されているように感じる。その人の育ちに関わり、それが支援する側の心情の表れによって反映されるという関係の在り様が、この仕事の醍醐味であるようにこの頃感じている。

<質疑応答>

Q：Aさんの節分での心情の変化以前に、どのような関わりがあったのでしょうか。

A：Aさんは、歌うことを嫌がって（走って逃げる）いたため、誘うことも控えていました。しかし、節分ではAさんが目配せを何度もしてきたため、試しに「歌ってみる？」と誘ってみました。「歌ってみます」とAさん。タイミングがあった、共感したようで嬉しかったです。

Q：障がい者という特徴的な人に対して専門家ほど否定的な表現（〇〇さんは～だからやめておこう）となりがちですが、そのような表現に対してどう思いますか。

A：専門家の意見も大切です。しかし、私は、日々の積み重ねである実際の生活をとおして「本人はこういう人である」ということを専門家に伝えていきたいと思っています。



## 特別養護老人ホームで働く生活相談員の仕事 ～生活相談員の業務改善とその効果～

特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ  
三浦 寛

### 《現状と課題》

50名規模の小規模な特養では、生活相談員の業務は煩雑を極める。新任で着任をした中で、手探りの業務習得をし、手本となる文献検索を行うも業務改善の手掛かりを得ることは困難を極めた。事業所の経営と運営にも色濃く関わる生活相談員の業務改善を課題と捉え、改めて客観的視点で課題検討を行った。

### 《研究や活動の目的》

一生活相談員の業務を振り返ることで、生活相談員業務改善の一事例として、他施設でも参考にでき、生活相談員の業務改善の一助となる目的を立て、仮説とした。

### 《実践内容》

- ① まずは「己を知る」取り組みとして、セルフ・マネジメントを実施する。
- ② 新任生活相談員としての他職種、入居者、家族等との信頼関係構築に時間を割いた。煩雑な本来業務に加え、事務室補助業務も寛容に、積極的に対応し、他職種との関係づくりを構築する。
- ③ 施設長と共に生活相談員の業務優先順位の見直しを進めた。この背景には人員配置の改善もあった。生活相談員が施設経営に大きく関わる役割と責任を担っていることを自覚し、長期入居の稼働を優先に、稼働構造の改善に取り組んだ。短期入居稼働優先の煩雑な業務に翻弄され、業務比重がかかっていることに気づき改善を図った。

### 《実践の結果》

- ① 自らが「お山の大将」となり、組織に悪循環、悪影響をもたらしていたことに気づいた。
- ② 生活相談員と他職種の連携のポイントである情報発信の受け手との信頼関係が深まった。
- ③ 兼務する介護支援専門員のプラン作成継続のシステム構築。業務優先順位の意識改革とマネジメント能力向上と稼働率上昇。その他、シナジー効果を認めることができた。

### 《まとめ》

単独配置となる生活相談員にこそ、「自律」「協働」「学び」が重要である。

<質疑応答>

Q：福祉職の離職率改善のため、現場において同僚・後輩にどのように接していますか。

A：クッション材が必要だと思います。安心して働けるような環境づくりをしています。

<助言者コメント>

- ・生活相談員の仕事が改めて大変だということがわかりました。



## 地区のケアマネ支援

下馬あんしんすこやかセンター（社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団）  
赤理 文子（主任介護支援専門員）  
堀内 良子（主任介護支援専門員）  
宮下 享子（社会福祉士）

（下馬あんしんすこやかセンターについて）

都営下馬二丁目住宅を含む下馬地区一帯は、戦後、町会、日赤奉仕団、生活学校、生活協同組合など、住民活動が活発に行われてきた地域である。日本フレンズ奉仕団は、アメリカ・フレンズ奉仕団を前身とし、昭和26年に保育事業を開始した。平成2年、保育園と高齢者福祉施設の合築による複合施設「フレンズ世田谷センター」を開設し、地域の拠点施設として、住民団体との協働で、地域活動を展開してきた。

同じ施設の中に平成11年フレンズ下馬在宅介護支援センター開設、平成18年地域包括支援センターの発足により下馬あんしんすこやかセンターを受託した。

平成27年1月、下馬あんしんすこやかセンターが世田谷センタービルより下馬四丁目の下馬複合施設へ移転し、下馬まちづくりセンター、今年7月、社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局と一体化したことで、地域包括システムの構築に向けた中核機関として役割を担っている。

（活動目的）

地域包括ケアの取り組みとして、ケアマネ支援をとりあげる。

（実践内容）

地域のケアマネジャーから情報交換のできる場所がほしいと相談を受けた。

地域の居宅支援事業所に声をかけたところ、賛同者があり平成26年1月、自主的な集まりとしてケアマネカフェをスタートした。ケアマネカフェの目的は、地区の社会資源とネットワークを駆使しながら、相互の支えあいによって、介護保険利用者の生活課題を解決していこうとするものである。下馬あんしんすこやかセンターは場所の確保や勉強会開催の後方支援を行っている。

（結果）

現在も月に1回開催し、事業所をこえて情報交換しながら気軽に相談できる場として継続している。

（考察、課題）

今後はさらに下馬・野沢地区の主任介護支援専門員とも協働して地区の課題把握、地域資源のネットワークづくりを連携しあい支えあいができる関係づくりをしたい。

<質疑応答>

Q：ケアマネカフェで苦勞を分かちあっているようですが、辛い、辞めたいという気持ちの解消や離職防止にどのような対策をとっていますか。

A：同業でしかわからないことを小さなグループで話しあったり、先輩が後輩に気分転換の方法を伝えたりしています。本音で話せる関係を大切にするなど、信頼関係を築けるよう努めています。

<助言者コメント>

- ・大変な取り組みをしているのですね。地域の皆さんはあまり知らないと思いますが、あんしんすこやかセンターは大変な仕事量なので、様々な工夫を行いながら心身の健康に注意してこれからもがんばってください。





## 教室型発表 第3分科会

最期までその人らしく生きる/認知症とともに豊かに生きる

進行役・助言者

加藤 美枝（世田谷区老人問題研究会）

高橋 学（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

	発表者	所属	テーマ
1	河島 修	世田谷区民	前立腺がん患者、再発・転移2年間の感想
2	梶原 大 箱山 玄	特別養護老人ホーム 久我山園	転倒事故を乗り越えて ～家族、本人が望む生活を支える～
3	萩野 直人 和田 徹太郎	世田谷区立駒沢生活実習所	世田谷の福祉資源を活用して、老障介護 家庭を支える～現状と課題～
4	岩永 真祐 新田 正伸	特別養護老人ホーム博水の郷 ショートステイ 特別養護老人ホーム博水の郷	職員視点から利用者視点へ
5	安田 博子	世田谷区立きたざわ苑	Well Being（健幸）の取り組み
6	北村 絵里 高橋 裕子	世田谷区高齢福祉部 介護予防・地域支援課	世田谷区認知症カフェ開設支援事業の 取り組み
7	清水 城次 加藤 貞行 河原 絵梨花	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	変わった！ ～見る、話す、触れる、ケアを通して～

## 前立腺がん患者、再発・転移2年間の感想

世田谷区民 河島 修

1968年に享年81歳で没したフランスの画家マルセルデュシャンの墓碑銘には「されど、死ぬのはいつも他人ばかり」という意味深い言葉が刻まれているのは有名なことです。今日はわたしの死に限定してお話しします。

ここには看取る方・病者をケアする方が多く集まり、いかに上手に看取るか・ケアするかということを発表する場ですが、ひとりくらいは、看取られる側の立場・死んでいく立場の側からの話があっても良いと思い、お話いたします。

1 わたしは前立腺がんの第4ステージ、すでにリンパ節転移・骨転移を起こしている患者です。病歴については、資料をご覧ください。がん判明以来7年目、転移してからは3年目です。医師からは予後はないと言われていました。

2 いろいろ治療を施していただいておりますが、薬も次第に減り、手詰まりの中の試行錯誤の日々です。痛みは緩和ケアによって抑えられておりますが、倦怠感や味覚障害、排泄不順や痒みなどの副作用が大きな悩みです。

3 看取られ方の成功例としては、わたしの場合、予測ですが、痛みもなく、静かにそっと息を引き取る、という状況でしょうか。

看取られ方の困難例としては、痛みに苛まれ、色々騒ぎ立てて家族や医療者の皆さんを困惑させた果てに死んでいくというケースでしょうか。終わりなのだから、何でも許されるという考えもあります。よりよき患者学、と言う言葉も目につきますが、そんな遠慮することもあるまいとも思います。

4 現代は多死時代です。看取られる人は益々増えるでしょう。そして生が多様なように、また死にゆくものも多様でしょう。わたしの死はわたし固有の形を示し、極めて個別的でしょう。皆さんは、たくさんの死者を見てきたからそこには共通点があることも、充分にご承知でしょうが、看取られる者は一回こっきりであることを、どうか忘れないで下さい。

5 現代はまた生者にとって人権拡張の時代でもあります。従って看取られる者にとっても、人権は大切にされなければなりません。例えばがん患者についても、画一的な見方が横行しています。マスコミの作り出す「頑張り美談」「痩せこけたがん患者」は当事者のわたしには大変迷惑です。また、根拠に基づかない軽々しい慰めは患者たちを傷つけます。

6 一人ひとり状況の異なる患者に寄り添う、という事は大変なエネルギーが必要でしょう。しかし、それこそがわたしにとってほんとに有り難いことです。言葉であれ、態度であれ、手当てであれ、看取られゆく者はやや敏感になっております。

以上よろしくお願ひいたします。ご静聴有難うございました。

<質疑応答>

Q：がん患者を支援している方の言葉で傷ついた、嫌な思いをしたことはありますか？

A：ドクターと話すとき、ドクターは上からものを言いますね。ドクターにはたくさんの方が押し寄せてくるし、時間も足りないので遠慮もしてしまいます。「自分が自分の主治医だ」という思いでいます。「死」を少しでも受け入れていくようにしています。宗教関係の方は受け入れませんがね。

<助言者コメント>

- ・がんが判明して再発後、現在進行形の患者体験の発表であり、その理性、冷静さに気持ちを揺さぶられました。
- ・がんはこれからも増えていきます。小中学生や高校生、大学生に、がん患者についての教育が必要なのではないでしょうか。発表者のように、がん患者自身も、がんを客観的に捉えることが必要です。
- ・死にゆく人の人権を考えることの大切さを改めて痛感しました。



## 転倒事故を乗り越えて ～家族、本人が望む生活を支える～

特別養護老人ホーム久我山園 梶原 大  
箱山 玄

### ① 事例紹介

80代後半 女性。要介護度5 レビー小体型認知症あり、指示行動不可。前後に動く常動運動あり。全身筋力低下あり。日常生活動作は全介助を要する。食事はソフト食提供。入所当初は自己摂取もできていたが、認知症の進行に伴い、自己摂取不可となり、全介助にて摂取。食事中、集中力散漫、咀嚼中の発語あり、誤嚥リスクが高い。キーパーソンはご主人。週に2, 3回、面会に足を運び、夫婦の時間を過ごされている。また2か月に1度、介護タクシーを利用し、本人と美容院外出をしていた。

### ② 研究概要

平成28年4月29日、移乗介助中に介助者と共に転倒。整形外科受診し、右大転子部骨折が判明。ご家族の意向に沿って、入院手術加療となった。この転倒事故に関しては、介助中の事故である為、ご家族に謝罪し、損害賠償手続きを行った。

入院当初より懸念されていた事が認知症の進行である。「食べ物を食べ物として認識できない。」「咀嚼・飲み込みの仕方がわからない。」等の、認知力の低下があり、口から食事が摂取できず、点滴をしている状態となっていた。ご主人は、大腿部の手術内容や術後の様子、食事が摂取できない状況等、それぞれの感情の焦りから葛藤される様子が見受けられた。日々の病棟の面会帰りに施設に立ち寄られた際には、不安や不満を溜め込まないように傾聴に努め、ご家族のメンタルケアに配慮した。

約1か月間の入院後、2度の手術を経て退院となり、施設での事故後の対応として、移乗介助に関しては、骨折部位に負担をかけないための移乗介助の方法、車椅子離床時の姿勢保持の方法について、機能訓練指導員が中心となり、検討した。また、骨折事故を防ぐためのセミナーを開催し、施設職員全員で意識を高め、ベッド上でのポジショニング及び安全な移乗介助の方法の検討・統一を行った。

食事に関しては、退院後、施設の食事を提供するも、口の中に溜め込んでしまう様子があり、摂取困難な状況であった。しかし、その食事の状況を観察し「コップで飲む」という行為、液体を飲むという機能が、反射的に脳に残っていることがわかった。その後、栄養士等の多職種で食形態を検討し、経管栄養をコップに移し、摂取していただくという方法が考案された。

この事例では、転倒事故を経て、認知症進行における摂取不良改善に向けた多職種の取り組みと、ご家族の気持ちに寄り添い、本人とご家族が望む余生をどのように支援し、実現していくのか、という事について、検討・考察する。

< 質疑応答 >

Q：経管栄養からミキサー食になるまでのきっかけは何でしたか。

A：敬老会です。おやつを食べることができたからです。

Q：飲み込みの評価、見極めはどうしましたか。

A：管理栄養士と看護師とが一緒に飲み込む様子を観ながら評価しています。

Q：「食事の状況を観察した結果、コップで飲む」という事ですが、誰が観察していましたか？

A：管理栄養士やケアマネジャーなどの関連職種と一緒に退院後の食事の状況のアセスメントを行い、介護士が残存機能の発見をしました。



## 世田谷の福祉資源を活用して、老障介護家庭を支える ～現状と課題～

世田谷区立駒沢生活実習所 萩野 直人

和田 徹太郎

当施設（知的障害者の通所生活介護施設）では、老障介護による生活を送る家庭が増えている。その中で世田谷区で行われている福祉サービスを活用しつつも、家庭での生活を終了し、施設入所することを決断したAさん家族への支援を通して①家族の希望と現実のギャップ②今後の福祉支援の課題、について報告する。

Aさん：40歳代 主たる介護者：両親70歳代後半

利用サービス：移動支援（自宅⇄バスポイント、平日以外の外出）、入浴、施設通所（土日祝日以外）

当初の家族の希望：少しでも長く家庭での生活を送りたいと願っていた。

施設入所希望の変化：両親の高齢化、Aさんの生活パターンの変化（夕方には入眠し、夜中に起床してしまう。もしくは夜間の断続的な睡眠）に徐々に付き添えなくなったため。

入所希望地域：可能な限り、少しでも自宅に近い場所。（いつでもAさんに会いにいける距離）

入所決定地域：八王子地区

- ① Aさんに限らず、入所施設を検討する家庭は世田谷から近距離での施設を希望している。しかし、現在世田谷区内に入所施設はなく、他区もしくは他地域に頼らざるを得ないのが現状である。Aさんは八王子地区で入所するところだったが、これまで東北地方などの遠方施設への入所が余儀なくされている。
- ② 親子分離した利用者・家族を地域（世田谷）で支え続けるためには、今後どうしていったら良いのだろうか。

<質疑応答>

Q：職員は、日頃どのような取り組みをしているのでしょうか。

A：主に高度障害の方が地域で過ごすための方法を考えています。9月のどんどこ祭り等のイベントで地域の方に訴えかけています。どんなところでどんな人がいるのかを地域の方が知らないなので、知っていただきたいという思いです。

Q：親が高齢になった場合や、保護者の方が認知症などになったときはどうしますか。

A：「成年後見制度」を活用しています。困っている人に紹介して使っていただくという取り組みです。

<助言者コメント>

- ・生活リズムができて、何かのきっかけがあると変化していきます。それに対応していくことができます。地域の方々とのつながりがとても大切です。例えば得意な分野をお願いするなどです。



## 職員視点から利用者視点へ

発表者：社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷  
ショートステイ担当 岩永 真祐  
特別養護老人ホーム担当 新田 正伸  
共同研究者：博水の郷看護師 渡邊 麻衣子

### 目 的

施設で生活をしている利用者の状態はADLの機能低下と共に、認知症が進行している方も年々増加している。そのなか認知症の有無にかかわらず、その方らしい生活をおくれるように、個別性に応じたケアの関わりを検討していく必要がある。今回に2例を通じて利用者視点でのケアについて考えていく。

### 実践内容 1 ～ショートステイ～

初回利用時に、強く不安に感じ激しい行動が見られたA様。今後安心して、ショートステイを利用して頂くことが課題だった。

- ① 次回利用にむけた目標設定
- ② 目標を元にA様に関わり本人と家族からのヒヤリングの実施
- ③ 初回ご利用時を振り返り、自分たちの行動がどのように影響を与えてしまったかを話し合う
- ④ 個々の対応したことを話し合い、情報共有していく。

### 結 果

利用を重ねるごとに歌のレクリエーションにも参加するようになり、穏やかな表情で過ごしている日が増えてきた。

### 今後の課題と考察

利用者の状況、状態を職員全体で理解し、それを踏まえた上で、その方の思いに向き合う姿勢を整えていくことが、安心して過ごせる環境整備に活かしていけることに気が付いた。今後も安心して過ごして頂くために、さらにコミュニケーションや日々の関わりを大切にしていくことが課題だ。

### 実践内容 2 ～特別養護老人ホーム～

新規入所で、重度のアルツハイマー型認知症があり、入浴・排泄のかかわりに対して特に拒否反応を見せていたB様。ケアの関わり方について考えていった。

- ① 入所後、施設職員が決めたスケジュールで対応し失敗
- ② 本人の動作、言葉、表情を観察
- ③ 本人の気持ち、タイミングに合わせるように職員のケアを統一

### 結 果

穏やかに清拭が出来る回数が増え、風呂場で着替えることができるようになった。最終的には、洗身・入浴ができるようになり、その回数も増えていった。また、本人の意向に沿ったケアをおこなうことで、日常生活での拒否や抵抗も減っていった。

### 今後の課題と考察

今までの対応は、「認知症だから」と決めつけてその方の考えや思いを理解せず対応をしてきたことに気が付いた。今回の実践を通じ、言葉に表現できない意思は非常に見過ごしやすいことに気が付いた。今後は本人の意思を探っていく視点を持つと共に、意思をくみ取ったケアにつなげていくことが課題だ。

<質疑応答>

Q：職員の視点で対応すると、利用者から観た場合、反発などを受けることもあると思いますが、どう考えますか。

A：ショートステイでは、暴れたり不安になった場面ではどうしてそうなったのか、ユニット会議で出たものをメモでまとめます。それを一人ずつ職員に伝え、全員で一つの方向に向かえるようにしています。

このように2事例の中では、ユニットの中でのケアを統一してリーダー会議などで、一つの目標に向かっていこうと頑張っています。

<助言者コメント>

- ・認知症などで、様々な行動があってもその人の生活を大切にしてください。
- ・当たり前のことを視点を変えて実践することやどういう声かけをするかなどについて、細かくわかりました。勉強になりました。



## Well Being（健幸）の取り組み

発 表 者：世田谷区立きたざわ苑 安田 博子  
共同研究者：世田谷区立きたざわ苑 岩上 広一

Well Beingを私たちは、「健幸」と訳し、ご利用者の心身の健康を支援することにより、日常生活を豊かにし、幸福をもたらすという仮説を立てて取り組んでいます。私達が考える「健幸」を実現するためには、心身状況を安定的に保つケアを展開することにより病気を発症しないことや、服薬での副作用を考え、薬の減量に取り組むことで、ご利用者の生活が元気で笑顔となる支援、その人らしい日常生活が送れることです。今回、病院から老健へそして、きたざわ苑(特養)と生活の場が変わってきた、お二人の事例から、仮説が実証した事例を紹介します。

事例1 94歳・女性・要介護度5 身長160cm・体重66kg

＜病名＞アルツハイマー型認知症、低蛋白血症

本人希望で介護保険サービスの自己中断、物忘れの悪化、自宅で転倒、右大腿骨頸部骨折と診断あるが被害妄想が強く対応困難で自宅へ退院。手術を断られ、大学病院を受診し手術。被害妄想、介護・処置抵抗、自殺をほのめかす発言もあり精神科隔離病棟に転院。その後老健を経て本人の強い希望で特養に入苑した方の取り組み報告。

事例2 84歳・女性・要介護度5 身長149cm 体重37.8kg

＜病名＞アルツハイマー型認知症、双極性感情障害、狭心症、左右大腿骨骨折手術H22年認知症と診断され、薬の服薬管理ができないことや暴言を娘さんに言うことなどから、精神科認知症病棟に入院、転院。その後老健入所、その後特養入苑となる。自立支援ケア、服薬の減量、廃止の取り組み報告。

考察 水分量・常食化・適度な運動量・下剤廃止による自立支援ケアの実施と、精神科薬、睡眠薬、安定剤、内科薬の見直しによる、減量と廃止、口腔機能改善を目的とした口腔内の衛生と義歯の調整による咀嚼嚥下の回復と維持、内科医、精神科医、医療部門と施設専門職集団（生活相談員を調整役として看護師、介護員、機能訓練指導員、管理栄養士、歯科衛生士）との連携は、ご利用者の生活の改善と機能改善に効果を発揮することが実証できた。介護を実践する時には、常に、利用者を中心とした多職種協働を実践することで、目指すWell Being(健幸)が達成でき、ご利用者の生活が元気で笑顔となる支援につながり、事例以外のご利用者にも同様な効果が表れている。特別養護老人ホームの役割は、ご本人の持っている機能を最大限に発揮することと健康で疾病を発症しないケアを行うと同時に、終末期のニーズにどのように応えていくことかが重要になると考えている。終末期のニーズに応えるためにも疾病を防ぐことは大変重要であることは誰しもがわかっていながら、実践が出来ていないかもしれない。今後も疾病を防ぐためのケアを学び実践を継続することが課題である。

<質疑応答>

Q：本人の変化はどういった所にキーポイントがあったのでしょうか。

A：各専門職が個人を見極めた上で本人の意志を尊重します。介護職は24時間介護をしているので連携ができています。

Q：事例1でリスベリン、ロゼリン（服薬）を廃止しました。これは本人にとって嬉しいことだと思いますが、止められたきっかけとその理由について教えてください。

A：最初は自分では考えられなかったことだったのですが、患者様の様子や状態について、他の職員とも話しをしたこと、医師の指示があったことでできました。

<助言者コメント>

・残存能力を見極めることが素晴らしいことです。良いことだと思います。



## 世田谷区認知症カフェ開設支援事業の取り組み

世田谷区高齢福祉部介護予防・地域支援課 北村 絵里  
高橋 裕子

### <はじめに>

平成27年1月、国から「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」が公表され、その中で、認知症の本人、家族、医療・介護の専門職、地域住民の4者が集い、相互に情報を共有し理解し合う場として「認知症カフェ」の設置の推進が位置づけられた。

世田谷区は、認知症カフェの設置を促進し、地域の共助意識を高めることを目的として、平成27年度から「認知症カフェ開設支援補助事業」を開始した。

### <事業の概要>

新たに認知症カフェを開設する団体で、区内で認知症ケアを行う介護事業所や医療機関、認知症の家族会、区民ボランティア団体を対象に、認知症カフェの開設に要する費用の補助を実施した。

補助額は1団体あたり10万円を上限として、年度ごとに補助団体を決定した。

平成27年度～平成28年度の2年間に補助を決定した認知症カフェは12か所であり、現在、すべての団体が認知症カフェの活動を開始又は継続している。

また、この他に、区が把握している認知症カフェで、区民や介護事業所が自主的に開設したところが13か所ある。

### <認知症カフェの種類や設置場所>

平成27年10月～平成28年10月にかけて、区が把握している25か所の認知症カフェについて、職員が現地を視察し、会場の場所や広さ、参加人数、実施状況等について確認した。

25か所の運営団体を種類別にみると、区内で認知症のケアを行う介護事業所や医療機関が18か所と最も多く、次いで区民ボランティアが4か所、家族会が3か所となっている。

開催1回あたりの参加人数は、少ないところでは5～6人、多いところでは50人と開きがあり、その要因は、特に会場の広さによるところが大きい。

設置地区をみると、区内27地区のうち18地区に認知症カフェがあり、地域別では、世田谷地域が5地区7か所、北沢地域が3地区4か所、玉川地域が4地区6か所、砧地域が4地区5か所、烏山地域が2地区3か所となっている。

### <課題と今後の方向性>

区は、平成27年度～平成29年度までの第6期世田谷区高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画の期間中に、区内27地区の日常生活圏域に各1か所以上の認知症カフェの開設を目指している。

今後は、未設置地区に開設を誘導するとともに、認知症カフェに関する普及啓発や、利用促進のための広報、各認知症カフェの交流活動等に取り組んでいく。

<質疑応答>

Q：「認知症カフェ」の設置は、住民参加の課題のひとつだと思います。未設置の地域について、誘導の方法を聞かせてください。

A：最近、マスコミで取り上げられることが増え、区民ボランティアの方たちに場所の提供をお願いしている。あんしんすこやかセンター等の行政の組織へのモニタリングを増やしていくようにしています。

Q：用賀駅前で認知症カフェを開いていますが、交流会で他のカフェの人の話が聞けて励みになりました。またこういう機会が欲しいです。

A：交流会に参加した人から「ありがとう」がたくさん聞けました。他のカフェのやり方等の情報交換は大切ですので、このような場を増やしていきたいと思えます。

<助言者コメント>

- ・がんはサロン、認知症はカフェの流れがありますね。



変わった！  
～見る、話す、触れる、ケアを通して～

世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム

清水 城次

加藤 貞行

河原 絵梨花

現在、高齢化が進んでいくにつれて認知症のある高齢者が増えていくなか、上北沢ホームでも、様々な症状をもった認知症の高齢者が生活を送っています。認知症ケアが重要視されている今、認知症に関する知識について学び、また統一した認知症ケア（チームケア）を実践することで、認知症の方が安心して生活できるようサービスを提供しています。

当施設では、認知症ケアの方法として、「見る」「触れる」「話す」の3つのアプローチ方法について取り組みました。

「見る」は、顔を見るだけでなく、正面から目の高さを同じにして笑顔で視線を合わせて見る。認知症の方でも笑顔を認識する能力は衰えていません。

「触れる」は、ケアの際に忙しいからと無言で触れるのではなく、声掛けしながら背中や手など優しくボディタッチを行う。

「話す」は、ケアの際に声掛けに反応が返ってこない場合でも無言でケアを行うのではなく、ケアをしている行為についてポジティブに声を掛け続ける。

この「見る」「触れる」「話す」のアプローチ方法について、今回の福祉区民学会で事例の発表と、また職員全員が、事例を通して介護に対する意識の変化が見られたことについて合わせて発表したいと思います。

実際に、認知症ケアで「見る」「触れる」「話す」を実践する事によって、介護に対して暴言や暴力的になって抵抗されていた方が、ケアを行う際に拒否なく受け入れるようになりました。「ありがとう」と労いの言葉を言って下さるなど穏やかになりました。また歩き回ってしまう方や妄想などの周辺症状が改善されるなど、お互いの負担も軽減される効果がみられました。

当施設では、職員に認知症介護を理解してもらうために、4つの認知症（レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症など）についての対応マニュアルを作成し、また施設内研修を行うなど、日々、認知症ケアの向上に取り組んでいます。私達は介護のプロである自覚を持ち、利用者の気持ちを良く考えて、利用者1人1人に寄り添った介護を心がけたいと思います。

<質疑応答>

Q：①時間的に余裕を持ってできるコツについて ②非常勤職員や派遣職員などがある中でのケアの統一について ③4つの認知症での活用について教えてください。

A：①時間の余裕はあまりないですが、利用者と接するときは、ゆったりとした気持ちでこころがけています。②正規職員が見本を見せることで統一させていきたいとがんばっています。③本の知識（アルツハイマー等の）を見やすく、わかりやすくしたマニュアルを作成しています。

Q：ポジティブに関わる見本を見せるとのことですが、まだ上手くできない職員のためにも、マネジメントをしているのですか。

A：何人かを対象にケアのコツや、ポイントを教えて記録しています。

<助言者コメント>

・ロールプレイの手法を取り入れ、実際に行ってくれたのでわかりやすかったです。





## 教室型発表 第4分科会

### 多世代による文化交流/一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者

橋本 睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局）

上之園 佳子（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

	発表者	所属	テーマ
1	新川 優奈	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	Aさんから気持ちを支える大事さを学ぶ
2	園原 一代 小山田 建太	NPO 法人ハートウォーミング・ハウス	高齢者所有の空き部屋活用、異世代間同居 「ホームシェア」
3	阿部 成子 佐藤 明子	世田谷区老人問題研究会 ひこばえ広場 たまごの家	「老老ケアと異世代交流」への展望 ーひこばえ広場「たまごの家」の実践から
4	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや榎の木会 上町工房	『主体性』の発揮を意図して
5	岩澤 辰洋	社会福祉法人せたがや榎の木会 わくわく祖師谷	Aさんの行動から心情洞察できたこと
6	新保 美里 井上 靖章	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ	ショートステイ中のトラブルへの対処が 安定利用に繋がった事例

## Aさんから気持ちを支える大事さを学ぶ

社会福祉法人せたがや檜の木会 世田谷区立下馬福祉工房  
新川 優奈

### 概要

自信のなさや照れから思わぬところでの泣き崩れや相手との距離感がつかめず、べたつきになってしまったAさん。12年の経過で変容した姿があるが、さらに受容的な土壌で持っている力を発揮できる姿を描いて対応を再整理する機会とする。

#### 1、日常の姿－生活能力

- ①作業…作業能力は高く、クッキー作業全般に取り組むことができ、行動力もある。
- ②余暇…全体の場には入りにくさがあるが、興味ある内容では参加。行事も楽しめる。
- ③対人関係…誰とでも仲良くできるが、自分の思いが優先されてしまう姿がある。

#### 2、支援経過

- ①受容的な付き合い方で分かり合い始める(平成16年～平成19年)
- ②分かり合えたことで少しずつ安定感が出てくる(平成20年～平成23年)
- ③考えさせ、振り返る間合いを持つ(平成24年～平成27年)
- ④新担当との出会いの様子(平成28年)

#### 3、改めてAさんの課題は何か

- ①デコボコの全体像を知る…情緒的な豊かさがある一方で、自信の低さや自律心のもろさが表立っている。
- ②現象としての表立つ課題…自分の思いとズレが生じた時には泣いたり怒ったりする姿もある。
- ③課題の本質…伝えきれていない思いがあり、そこが受け止めてもらえていない、という不充足感に繋がっているのではないか。

#### 4、Aさんの穏やかさに向けて 具体的な日常の支え方

- ①支援視点の確認…心情を大切に受けとめていくことで、安心感を得て次へ向かうエネルギーとなるという視点。
- ②持ち味を生かし楽しく参加する配慮に徹する  
…「入る－入らない」については課題とはしていないが、楽しめるのに入れない状況と言うのは何らかの不充足感があるのではないかという原則に立ち、お仕事ノートでのポイント参加を促している。
- ③崩れた時の気持ちの収め方を支える

…支えられてではあるが、自分での立ち直りの道筋が少し見え始めている。ここで受容的姿勢を後退させずに支え方をさらに詰めていきたい。

- 5、最近の手応え…今年度から関心事を中心にしたクイズを全体の場で行っている。一人ではその場への入りにくさがあるが、職員と一緒に配慮を得ながら参加をしている。ご自身からクイズの内容に関してどうするか相談してくれることから、期待感を持っていることがうかがえる。

### おわりに

「気持ちを支える」とは「あなた－わたし」の関係のありようがポイントである。

<質疑応答>

Q：支援者が甘えを受けとめることは大事であり、難しいが、地道にやっていくということだと思います。子どもではなく成人が甘えてくる場合、仕事とはいえどのような気持ちになり、支援していくのでしょうか。

A：自分にもそのような面を出してくれた、心を開いてくれたと嬉しい気持ちがあります。

Q：担当者は、毎年変わるのでしょうか。

A：数年に一度くらいは変更します。

<助言者コメント>

- ・発表についてですが、こういった分野に詳しくない方もいるので、最初に施設の概要や支援の方針などご説明いただくと分かりやすかったと思います。また、支援の目標や、そこに向けてどのような計画なのかも話していただけると良かったと思います。



## 高齢者所有の空き部屋活用、異世代間同居「ホームシェア」

NPO 法人ハートウォーミング・ハウス 園原 一代  
小山田 建太

本発表の目的は、現代的な様々な課題に答えうる「ホームシェア」という異世代間同居の住まい方を提示し、さらには、その「ホームシェア」の同居関係において表れる新しい関係性を考察することである。

近年、現状の社会生活への不安を募らせる人々の実態が散見されている。平成 28 年度版厚生労働白書に公表された「高齢社会に関する意識調査」の結果によれば、40 歳以上の男女の 81.7%が高齢期の一人暮らしを不安だと考えていることが明らかにされている。また年齢別に見ると、年齢が低いほど「大いに不安」と回答する割合が高い。一方若者について見れば、経済状況の悪化や新しい生活圏の希求といったニーズの出現により、「シェア」という暮らし方が注目を集め始めている(久保田 2009)。

さらには全国の住宅状況に関して、平成 25 年度には総住宅数が 6063 万戸へと増加しながらもその空き家率が 13.5%と過去最高となっている(総務省 2014)ことから、世帯規模の減少による生活の不安定化が全国的に進行していることが推測される。

以上のような社会背景を踏まえた上で本発表が取り上げたいのが、「ホームシェア」である。高齢者所有の空き部屋活用事業である「ホームシェア」とは、経済的かつ自然な形で、既存住宅を活用・再生することのできる事業である。それは高齢者の生活の一部を支えるとともに、ゆるい見守り効果や独居の解消、生活の活性化、そして学生・若者にとっても低額で安心な住まいの提供など、双方にメリットを生み出すものである。また近年空き家が増えるなか、この「ホームシェア」が空き家の防止やさらなる活用提案ができる仕組みとなることによって、住み慣れた街の循環的な既存住宅活用が可能となる。

重ねて本発表では、「ホームシェア」の同居関係において表れる新しい関係性を明らかにするべく実施したインタビュー調査(半構造化面接法)の結果も合わせて提示する。インタビュー調査の対象者は、ホームシェア事業代表者(以下、Sさん)、住宅を提供するシェアオーナー(以下、Oさん)、シェアメイト(以下、Mさん)の3名である。なお当時、シェアオーナーとシェアメイトは約2年間の共同生活を行っており、ホームシェア事業代表者による生活のコーディネートがなされていた。

インタビュー調査の結果、OさんとMさんはお互いの関係を「家族」ほどに何でも言い合うような「ウェット」な関係であるとは認識していないが、共同生活から得られる様々なメリットや面白さを享受し合いながら、相手を「自分とは違う別の人格を持って」人として尊重し合っているということが確認できた。加えて、「暮らしてみないと分からない」ホームシェアの暮らしにおいて、Sさんのような「第三者」を介在させながら共同生活のルールや疑問などを共有することによって、「互いの立場に立った」生活のコーディネートが実現している実態も確認することができた。

以上のようなデータを踏まえ当日の発表では、現代的な共助の関係性を生み出すホームシェアを、「普通に自分が住むところを選ぶ選択肢の一つ」として提案したい。

<質疑応答>

Q：ホームシェアについて、失敗例はありますか。

A：ホームシェアは、自宅をオープンにする共同生活なので、入居者と気が合わないなどいろいろな問題は起きます。シェアハウスと混同して考えられている部分もあると思います。家族ではないのでカラッとした関係なのです。お客さんを迎えるという考え方では難しく、フラットな関係で相方にメリットがあると考えられます。ホームシェアを解消する場合があります。

Q：ホームシェアをしているのはどのような方ですか。

A：オーナーの希望を聞きますと、学生や、社会人、女性がいいという声が多いです。外国人でもOKという方もいます。また、どのような方がシェアをしているのかを近所に伝える必要があると思っています。怖いと感じる人もいらっしゃるのです。オーナーは、しっかりと紹介するので、心配はないです。

<助言者コメント>

- ・インタビュー調査でSさんの評価とはどのようなものだったのでしょうか。
- ・ホームシェアをすることで協働性と社会性が生まれると言っていましたが、協働性についてももう少し詳しく知りたかったです。



## 「老老ケアと異世代交流」への展望 －ひこばえ広場「たまごの家」の実践から

発表者：たまごの家 阿部 成子  
佐藤 明子

協力者：ひこばえ広場 大沼 昌子

### 「たまご＝他孫の家」誕生の背景

世田谷区生涯大学・福祉文化コース修了後の自主活動として「ひこばえ広場」は区立世田谷保育園との交流を毎月続けて6年になる。

昨年は、就園前の親子を対象に「子育ていきいきサロン」を立ち上げた。毎月第二月曜日、近隣の親子や、スタッフに連れられた認証保育園児も遊びにくる。

「たまごの家」は、これらの活動の上に世田谷区介護予防・日常生活支援総合事業の1つ住民主体型地域デイサービスとして今年6月オープンした。

### 「たまごの家」の目指すもの

“高齢者の力を子育てに、子どもの力を高齢者の生きがいに”をコンセプトに、「できること・好きなことをして、誰かの役に立ちませんか」「昨日より少し元気になって帰りましょう」「赤ちゃんも居るだけで素敵なボランティアです」と呼び掛けている。地域包括の考え方が広がる中で、縦割り行政施策を超えて、老いも若きも障がいの有無も関係なく自由に交流できる居心地の良い場を目指している。

### 【社会背景】

超高齢少子社会、分断でなく個の自立と協同の再構築、文化・価値の再発見と継承の動き。

### 【活動と考察】

毎週土曜日、手作りランチをはさんで、健康体操・参加者の希望や持ち寄りによる多彩なプログラム（パズル・草笛・三味線・唱歌など）。6ヶ月24回の概略は当日に。楽しいから来る、美味しいから来る、語りたから来るなどの自発性を育み合いたい。

### 【課題と展望】

「たまごの家」の異世代交流は、試行錯誤の段階で、一つの社会実験と考えている。オープンして半年たらず、あんすこを通しての利用者がまだ少ないこと。他孫に当たる参加者も流動的であること。高齢の自由参加者は当番スタッフと合わせて10～15名あるが、要支援との境界をいくようなスリルの中での活動である。しかし人生経験豊かな人たちの集まりは想像も及ばぬ面白さがあり、次世代に知らせたい願望が湧く。ドイツ政府のプログラムに「多世代の家」構想があり、多世代交流コーディネーター養成も始まっていると聞く。当区でも今ある多種多彩な活動を横断的に組み換えると世代を越えてお互いを気遣う豊かなコミュニティが見えてくるのではないかと思う。

<質疑応答>

Q：世田谷区における介護予防・日常生活支援総合事業は4月から制度がスタートしているが、それに合わせて住民主体型地域デイサービスを立ち上げたのはどのような思いだったのでしょうか。

A：高齢者の力を子育てに、子どもの力を高齢者の生きがいに一というコンセプトで「ひこばえ広場」の活動が6年になります。住民主体型地域デイも同じ思いで、双方にウィンウィンの異世代交流を試みたいと思ったからです。行政の方から情報をいただき、スタートし、利用者はまだ少ないですが、やりがいを感じながら日々やっています。若い人に来てもらうためには、有給が望ましいと考えています。

Q：デイサービスの場所は、区役所の近くだと思いますが、近所の人に来ないのでしょうか。

A：付近は坂が多く、あんしんすこやかセンターから紹介される人は近所の方です。平素から陽だまり友遊会館を利用されている方は、少々遠くても気軽に参加してくれます。

<助言者コメント>

- ・このデイサービスでは、利用者が参加者であり、支援者でもあるという2つの側面を実現していますね。人生のいろいろな時に社会参加ができる、共有ができる良い場になっていると思います。今後、1ヶ所とは言わず、増やして欲しいと思います。



## 『主体性』の発揮を意図して

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房 斉藤 由子

### 1. はじめに

当所では、就労支援継続B型として『仕事』を中心として活動を組み立てているが、手順や方法の定められた『仕事』の中では、主体性というものは発揮されづらい。自分らしく生き活きと、より良く自分の生活を送るためには、自分の思いを知り、それを表現していく主体性が必要と考える。そのため、日々のやりとりや役割、行事等を通し、主体性が発揮できる場面を意図して盛り込んでいる。その一つに『朝の体操』がある。プログラムの中身と、利用者の様子を紹介し、その意味について考察する。

### 2. 『朝の体操』

これまでは、見本となる職員を前にして、皆で列を作り、ラジオ体操を行っていた。気持ちの整えという狙いであったかもしれないが、仕事同様、自らを表現するという要素は少ない。また、模倣が苦手な方には難しいにも関わらず、「できる・できていない」という視点にもなりがちであった。そこで、全員が自分の『おすすめ体操』を披露し、皆で行っていくという形に変えた。

### 3. それぞれの変化

変更してしばらくは、自分で『おすすめ体操』をする、できるという方は数名のみ。能力的にはできると思われても、「いいよ、私はいい」と遠慮されたり、「そんなのやらない」と反発が見られたりと、皆の前で自分を表現するという経験のなさや、自信のなさが大いにうかがえた。そこで、「何をしても、どんなものでもOK」を伝えるため、職員がおすすめ体操を試したり、抵抗感なく体操ができる方をムードメーカーとして、場を盛り上げたり、和やかな雰囲気を作ることを心がけた。何をしても良いのか分からずに戸惑っている方には、それぞれのちょっとした動き、よく見られるしぐさからおすすめ体操を考え、提案して行ってもらようにした。

そうして一カ月、数か月を経て、徐々に形ができ、馴染んでいき、2年が経過した中で、それぞれの体操や取り組み方が大きく変わっている。皆が自分の番を期待し、揚々と、また緊張感を持って、また安心して、取り組まれている。仲間の体操にも期待するようになり、他者への関心・関係の広がりを感じられる。ラジオ体操にはなかった笑顔や、自分たちで“場を仕切る”ような姿があり、まさに『主体的に』動かれている様子がある。当日の発表で、個別のエピソードをいくつか紹介する。

### 4. まとめ

本来、こんなことをしたい、あんな風になりたいという思いは、皆が持っているはずである。自分で考えたことを行うことは楽しいはずである。しかし、実際にそれを表現することは難しい。これまでの失敗経験や、こんなことを言ったらダメと言われる、止められる、という思いがあればなおさらだ。しかし、主体性の育ちに重点を置き、それを意図したプログラムを継続していくことで変化があった。自らの発信を皆が受け止め、一緒に笑い、一緒に行ってくれること、それが自信に繋がっている。

人の暮らしに大切なこと、必要なものをどう捉え、それをいかに活動に組み込むか、また、その活動をマンネリ化させず、常に新鮮に、楽しさと新たな気づきを返しているか。活動一つ一つの意味を考え、チームで継続していくことの大きさを実感した。

<質疑応答>

Q：発表いただいたプログラムや取り組みをする中で、若い人たちがなかなかついてきてくれないことや一緒に楽しむだけになってしまうなど、支援にはならないことがあるのではないのでしょうか。

A：どんなプログラムに関しても、それを行う意図や、行ったことでの利用者の変化などを伝えることを大事にしています。意図なくただ行うのでは、ルーティンになってしまいますから。

<助言者コメント>

- ・職員の意識形成が難しい中で、よく取り組んでいらっしゃると思いました。とても良いプログラムで素晴らしい発表でした。



## Aさんの行動から心情洞察できたこと

社会福祉法人せたがや桜の木会 わくわく祖師谷  
岩澤 辰洋

### はじめに

私は生活介護に異動して半年が経ち、Aさんのこだわり行動や繰り返し行動などの独自の行為に接していく中で、感じたことについてまとめてみました。

#### 1、出会いの印象

20代男性、愛の手帳1度、支援区分6、特別支援学校を卒業後、わくわく祖師谷（生活介護）に通所し5年以上経つ。

#### 2、課題にしていること

28年度の支援目標は、『楽しく満足感あるわくわくの生活スタイルを探っていきます。』である。

#### 3、最近の行動のとり方から感じる事

- ①唸り声や目つぶり
- ②エピソード：午前の動き出し
- ③エピソード：帰りの動き出し
- ④エピソード：歩きで帰るとき
- ⑤エピソード：昼食が取れない
- ⑥エピソード：健康診断でのトイレ促し

#### \*不安緊張の背景は何か

6つのエピソードから不安・緊張を抱えているAさんにとって、安心を与えることがAさんの安定につながり、安心があってこそ行動に移れると言えるのではなからうか。

#### 4、小さな変化に気づく

- ①座ってパズルに取り組む姿も
- ②お楽しみ活動にも
- ③頭突きのポーズでおふざけ

#### 5、不安について思うこと

- ①出会いのころの動きから
- ②理解力の視点から

### おわりに

Aさんのこだわり行動や繰り返し行動などは、今の環境の中ではせざるを得ないことと受け止めている。Aさんにとって必要なことであり、苦しいことでもある。コミュニケーションの工夫で衝動性は減少してきているが、こだわりなどの軽減につながっているようでもない。Aさんが不安や緊張を抱えて過ごしていることを忘れず、Aさんが安心感を持てる関係を構築していきたい。

<質疑応答>

Q：ドキドキしちゃうからやらされるからという気持ちがあるAさんについて、どんなふうにしたら安心できるようになれるか、支援者はどう考え、工夫し支援につなげているのか教えてください。

A：Aさんのペースにはなりますが、Aさんから教えてもらっています。急がせないようにし、グループ全体でAさんのことを「待っているよ」という姿勢、気楽さ、さりげない優しさを感じてもらえるようにしています。そうやってお互いの信頼関係を築いている途中にあると思います。

<助言者コメント>

- ・障害が重度の方への対応がとても難しいことがよくわかりました。せたがや福祉区民学会は、専門の方だけではないので、今後区民の方に向けたメッセージを強めていただけたらいいと思いました。社会福祉法人檜の木会さんは、この学会でも7事例も発表されていて、熱心だなと感心しています。今後同業の方が集うような場でも、発表されたらいいのではないのでしょうか。



## ショートステイ中のトラブルへの対処が安定利用に繋がった事例

社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ

新保 美里

井上 靖章

### 1. トラブルの概要と目的

ショートステイ利用者のAさんは自閉症の利用者である。Aさんは隣室の利用者Bさんの居室が気になるようで、Bさんの居室を覗くことを繰り返した。BさんはAさんの行動を怖がるようになり、時には大声で叫ぶ等の感情失禁が見られる場面もあった。AさんはBさんの反応が過剰になればなるほど、躍起になって居室を覗こうとする。これを受け、トラブルの解決を目的として二人の利用者に対しそれぞれのアプローチを行った。

### 2. 実践内容

①Aさんに対し「Bさんの居室を覗いてはいけない」というルールを説明した。Bさんには、Aさんから同意をとり、ショートステイの利用日程を前もって知らせた。さらにAさんが居室を覗こうとしても知らん顔をしてほしいと協力を要請する形で伝えた。

②各利用者の居室に①の内容を記載したホワイトボードを設置し情報の可視化を図った。

③Bさんの居室の扉のすりガラス部分に段ボールで作成した目隠しをはめ込んだ。

### 3. 結果

それぞれのアプローチの結果、まずBさんに変化が見られた。AさんがBさんの居室を覗こうとしても、こちらの依頼通り「知らん顔」をするようになり怖がる様子を見せなくなった。AさんはBさんが怖がる様子を見せなくなったためかBさんへの関心が薄れ、居室を覗こうとする頻度が減り、その後は特にトラブルもなく現在に至る。

### 4. 考察及び今後の課題

Bさんは元来、自尊心の強いタイプであるということに留意し、管理者からトラブル解決への協力を要請した。それが功を奏し、Bさんは終始協力的な態度であり、解決に至ることができた。Aさんは相手が過剰に反応すればするほど行動がエスカレートするという特徴を持つので、Bさんの変化がその行動を抑制したと言える。このように、特性の異なる二人の性質を把握した上でのアプローチが、今回のトラブルを解決に至らしめた要因と言える。今回の事例を振り返り、利用者支援は画一的な対応ではなく、一人一人の障害特性や性格を理解した上でなされるべきであると改めて認識した。今後も利用者間のトラブルは数多く見られるであろうが、今回の事例を糧に支援に取り組んでいきたい。

<質疑応答>

Q：障害のある方にとって、環境を整えることや見通しを持って支援することは重要だと思います。ホームの職員の方は、シフトで勤務していて直接話すことが難しい場面もあると思いますが、どのような工夫をして職員同士が連携しているのか教えてください。

A：月に1回全職員が集まる会議があります。それ以外にも日常の中でコミュニケーションをとることはできるので、シフト勤務だから難しいということはありません。

<助言者コメント>

- ・ AさんやBさんの個別の対応をお聞きし、いろいろな意味で他の実践にも生かせることだと感じました。スタッフ同士のコミュニケーションやチーム支援の大切さを感じました。職員側からの視点でチーム支援についてまとめると、また別の発表ができると思います。





## 教室型発表 第5分科会

### 生きがい・まちづくり/一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者

植田 祐二（世田谷高次脳機能障害連絡協議会）

田邊 仁重（世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長）

	発表者	所属	テーマ
1	矢吹 千恵子 河合 信吾 亀井 文男 鈴木 一夫	世田谷区老人問題研究会	せたがや・ふるさと区民まつりと「世老研」
2	田島 和美	社会福祉法人せたがや榎の木会 わくわく祖師谷	新しい出会いから支援のあり方を考える
3	新玉 枝理	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	摂食が難しいA君へのアプローチについて
4	和多田 陽	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	グループホームへの移行とその後の経過について GH 利用を自己決定するまでの歩み
5	伊藤 潤一 佐々木 松治 黒羽 希次 中島 智也 鬼塚 正徳	おでかけサポーターズ 世田谷区障害福祉担当部障害者地域 生活課 NOP 法人せたがや移動ケア	おでかけサポーターズの活動の紹介
6	谷田 さつき	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	家族との連携を通して本人の生活の安定を図る
7	甲斐 実	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	エピソードに人づきあいの変容を見る

## せたがや・ふるさと区民まつりと「世老研」

世田谷区老人問題研究会 矢吹 千恵子

河合 信吾

亀井 文男

鈴木 一夫

### {概要}

☆せたがや・ふるさと区民まつりも今年で39回目の開催となりました。

世老研はこのまつりには第22回より参加しております。最初はなんでも相談と、各自で持ち寄った物品の販売を致しました。参加を重ねるうちに、物品の販売ではなく何か良い活動は無いかと、実行委員会を設けて話し合い、検討の結果「高齢者と子供達との交流」をテーマとして遊びやゲームをすることに決定し、今まで「輪投げ」「ボーリング」「スマートボールすくい」「ゴム製の金魚すくい」等を試みました。『まつり当日は神輿や山車等が出て場所が狭く子供達が遊ぶことが出来ない』等の反省をふまえ、現在では「金魚すくい・輪投げ」の2活動に絞っています。今回はその「金魚すくい・輪投げ」について発表致します。

### {目的}

☆世老研では「なんでも相談」で高齢者に対しての対応だけではなく、今後我々高齢者が子供達とどの様な交流を持てば良いかについて、お祭りでの活動を通して観察し、高齢者の活動の場とする事を目的にしております。

### {活動内容}

☆実行委員会にて予算額決定後、子供達が喜び・楽しく遊べる品・活動の準備。

☆前日：会場の設営、特に金魚すくいのプールと景品の用意。

☆当日：「金魚すくい・輪投げ」の時間毎の担当を決めて、子供達の対応にあたる。

☆当日：高齢者が行なうので暑さ対策に注意する。

※当日は「なんでも相談」の場所も設置。

### {孝察}

☆子供達がどの様な遊びを「金魚すくい・輪投げ」を通して行うか、その時我々高齢者は子供達にどの様な対応が出来るか。

☆なんでも相談にはどんな方が相談に来るか。

### {今後の取り組み}

☆今後「世老研」は高齢者だけでなく我々高齢者が子供達とどの様な関わりを持つべきかについての検討も進めて行くべきではないかと思う。

<質疑応答>

Q：世田谷区老人問題研究会が行っている「なんでも相談」には、どのような相談が寄せられるのでしょうか。

A：「ひまわりサロン」についての相談が多いです。

Q：区民まつりの中での相談内容は、どのようなものがありましたか。

A：区の人がどんなことを行っているのかという質問がありました。相談や質問については、傾聴しました。

Q：子どもの育ちについて、具体的にどのような声かけや関わりをしていますか。

A：世田谷区老人問題研究会の中に保育園と関わるグループがあり、そこを中心に活動しています。

<助言者コメント>

- ・「たまごの家」は、保護者に良い影響を与えており、多世代交流が行われていますね。一緒にご飯を食べたり、遊ぶことはとても重要なことだと思いますので、これからも続けて行って欲しいと思います。



## 新しい出会いから支援のあり方を考える

社会福祉法人せたがや檜の木会 わくわく祖師谷  
田島 和美

はじめに

1 1年勤めた職場から転勤となった。新しい出会いにワクワクしながらこれから関係を築くことへの緊張感で気を引き締めた。環境変化や出会いが互いの経験の積み重ねになることを踏まえ、初心に立ち返り、それぞれのエピソードから何を読み取れるか、そこから支援の軸をどう考えるか。半年という短い期間ゆえの感じ方、捉え方を通して支援のあり方を再度考える。

### 1. 一見わかりにくい心情を探る

〈エピソード1〉人が好きで関わりたい気持ちがありながら、話しかけられると目をそらしてしまうAさんとのやりとりを通して、目に見える印象とは違うAさんの気持ちを考える。

### 2. これまでの対人関係をみる、読む、想像する

〈エピソード2〉自分の思いやあるべき姿を他者にも同様に求め、強い口調で一方的になってしまうBさんとのエピソードから、今までどう過ごしてきたか、どんな辛さがあったか、わかる力と共に考える。

### 3. 障害特性とともに、その方の理解の仕方を探る

〈エピソード3〉「ごめんなさい、謝って」と言葉にしなげに仲間に対して衝動的に手や足が出てしまうCさん、やっでは困ることをご本人がわかるように伝えるためにどうしたらよいのか。繰り返し「ダメ」と言われ続けてきたことが表だって行動にでてしまうことでみえてくる、理解の仕方の細部を考える。

### 4. 考察

対人支援だけにとどまらず、対人関係を築く上で相手を知る、ということが必要になる。時には言葉や行動に左右されながらも本当の思いがどこにあるかを読み取らなければならない。それは、支援者のひとりよがりにならないように気をつけながらも肯定的な解釈に立ち、そこに導くことが支援者の資質を問われることになるのではないかと。改めて、心して出会う、つきあうこと、関係を大事にすることを考えるレポートになった。

<質疑応答>

Q：エピソード2のBさんは、言葉が強いと感じました。6ヶ月で変化はあるのでしょうか。

A：さまざまな職員との関わりがありますが、6ヶ月ではあまり変化はないと感じています。しかし、長い目では成長が少しずつ見られることから、皆で関わっていきたいと思っています。

Q：新しい職場の対応を踏まえ、今までのやり方をどのようにしていきたいのでしょうか。

A：新しい考え方を学びたいと思っています。すべてが正しいとは限らないので、難しい面もありますが。

<助言者コメント>

- ・私も17～18年障害者施設で勤務していました。様々な障害を持った方がいるので、同じ対応をするというのはおかしいですね？正解は一つではありません。その人に合った対応が必要です。

一つの型にはまった対応では、一人の人を救うこともできません。どのようにしていくのがよいか、皆さんで話し合うことが大切です。今回気づいたことを大切にして、今後に活かして欲しいと思います。



## 摂食が難しいA君へのアプローチについて

社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所めばえ学園

新玉 枝理

家庭でも特定の乳児用マグカップ（マグマグストロー）でミルクしか飲むことが出来ない新入園の3歳児A君に対して、食べ物への興味関心を持ってもらう為にどのようなアプローチを実践したのか、入園時から半年間の経緯について報告する。

### 【入園前の状態】（母親からの聞き取りによる）

めばえ学園入園前に受けていた摂食指導では、まずA君自身の食べる意思が必要と言われていた。家庭ではミルク以外に炙りアーモンドやスルメなど様々な物を試し、口に入れて噛む物もあったが、次第に興味を示さなくなった。そして食べ物やスプーンを口に近づけると手で払ったり顔をそむけて嫌がるようになった。反面食事以外では、ハンガーなど堅い物、紐やTシャツの襟や裾などは自ら好んで積極的に口に入れている様子がみられた。

### 【A君への関わり】

めばえ学園では、家庭で唯一口にできるミルクは敢えて用意はせず、他児と同様におやつ（スナック菓子）や給食を用意した。そして食べることにに関して嫌なイメージを与えないために、食べ物を口に入れることよりも感触や感覚を経験してもらうことを優先した。療育者が食べるように誘うことはせず、A君がおやつを触り、捨てることがあっても見守るようにした。その中で本児自ら食事中にスプーンを持って口にくわえる様子があったので、煮汁や果汁などにスプーンを浸して置いておくようにした。また使い慣れているマグカップを家庭より持参してもらい、中身をミルクではなくスポーツ飲料を入れてもらうようにした。

### 【結果】

上記のような関わりの経過の中で、徐々におやつに手を伸ばして触り、口にくわえるようになった。その後、噛んで口の中に含ませ消化するようになった。また持参したマグカップでスポーツ飲料を飲むようになり、ご家族との外出時にもミルク以外での水分摂取ができるようになった。そして給食では、麺類、ごはん等を口の中に入れて飲み込む様子が見られるようになり、家庭でも食卓で家族の食事に手を伸ばすようになった。

### 【考察と今後】

“家庭以外の場”でミルクではなくスポーツ飲料を用意したこと、また食事やおやつも他児と同様のものを提供し、手で触るなどの本児の自発的な行為を制止するのではなく見守ったことが食べ物への興味関心につながったと思われる。現在のA君の関心の多くは、触る、握る、口腔内や噛んだ時の感触を確かめるなどであるが、今後は飲み込める食べ物を見つけ、増やしていくことが必要だと考える。又同時に食事に対する良いイメージをより持つことができ、自発的に“食べよう”と思えるような働きかけの工夫を続けていきたいと思う。

<質疑応答>

Q：検討はチームで行ったのですか。

A：グループの職員やスーパーバイザーなどで良く検討して進めました。

Q：摂食が苦手な子どもは多いのでしょうか。

A：ミルクしか飲めないような子は少ないですが、白米のみやふりかけがないと食  
べることができない等偏食を持っている子はいます。

Q：専門の方はどれくらいいますか。

A：看護師はいますが、偏食を担当するものはいないので、栄養士などと一緒に検  
討をして進めていくようにしています。

Q：家庭ではどのような変化がみられましたか。

A：以前よりも食への関心は増えていますが、片付けなど親の負担が大きくなって  
しまうのでめばえ学園ほどの環境をつくることはできていません。

Q：3歳でめばえ学園に入園し、家庭では不安だったと思いますが、地域で母親は  
どのような支援を受けていたのでしょうか。

A：入園前に摂食指導を受けていましたので、そのような関わりから母親としても  
次の支援につなげていくという心づもりはあったように思います。

<助言者コメント>

- ・いろいろな人々の関わりの中で成り立っているように見えます。親としては子どもにやってあげたくてもできないもどかしさがあると思うので、専門家が助けてあげて欲しいです。



## グループホームへの移行とその後の経過について GH利用を自己決定するまでの歩み

社会福祉法人せたがや檜の木会 世田谷区立下馬福祉工房  
和多田 陽

### 1、はじめに

Aさん（50代男性、愛の手帳3度、知的障害、脳性麻痺による体幹機能障害）は身体障害があることを皆とは違うと捉えており、思っていることを伝える時控えめになってしまうことがあるが、こちらが聞く姿勢をとり時間をかけることで、思いを伝えることができる。年齢層が若い仲間からの言葉掛けに多少物怖じすることもあるが、上手に受けてくれている。人との関わりが好きで、職員、仲間と冗談を言い合って笑い合える環境にいる。体力的な引け目が主体性の弱さに転化している。

### 2、一貫した基本的な支援視点

この福祉作業所に来て約15年経過。初期は緊張感を持ちやすく、不慣れな場や儀式的な状況ではより強くなることがあった。そこからセルフコントロールを欠くようになり、身勝手な言動になることもあった。まずは安心できる関係作りと、日常の役割として献立発表や行事での司会進行役、乾杯の音頭など経験するにつれ緊張もなくなっていく。また、得意領域の描画で作品集を作って仲間に渡したり、美術展への出品などで自信を得ていった。自己肯定感の低さは本人ではなく、「障害」が引き起こしているもので、疲れを自覚して、上手に休む、興奮や高ぶりを感じたら、周りが速やかに外に出ることを促すなど「障害」と上手に付き合っていく支援を行なっていた。

### 3、本人の気持ちの受け止め、変化

上町GHの新設を好機として見学に行き、「僕、あそこに入りたい」と本人から要望が出た。今すぐ、どうしてもと必要性にかられているわけではないが、引っ込みがちな彼が「入りたい」と意欲的に自分の意見を言ったこと、周りもそんな彼を自然と肯定的に後押しする形となり、入居が決まった。移ってからは環境の変化に身体と気持ちの追いつかないような、連日疲れた表情もあり、お休みが何日も続いた時があった。体調、本人の慣れない思いに配慮しつつ、せめて工房での暮らしが今までと変わらないものであるように心掛けた。それから約一カ月、徐々に生活リズムに慣れ始め、イベントや行事で帰り時間が遅くなると、「遅くなると、みんなが心配するんだよ」と、自宅とはまた違った「家族」が待っているような捉えが見えてきた。

### 4、50代のこれからの暮らし

加齢による体力の衰え、年齢的な引け目がある実態。これまでの約15年の経過によって、それらと共に上手に、たくましく過ごしている今がある。「自己実現する生き方」ができてきている今、周りが共通認識を持ち「楽しい、充実した暮らしができていく」ことを折々に注ぎ込んでいき、さらに人生が豊かになるような、仲間に思い、思われる関係を大事にしていきたい。

<質疑応答>

Q：グループホームに入所する際、グループホーム側では「大変なのでは」という心配があったそうですが、実際に入ってみるとそのような声が聞かれませんでした。Aさんはグループホームでイメージを変えていったのだなと感じましたがいかがでしょうか。

A：彼の15年を見ていると、自分で伝えるというスタンスが地道な働きかけでできてきたのだと思います。

Q：15年の積み重ね、ゆっくりと変化していくとのことでしたが、どこに重点を置いて支援をしていったのでしょうか。

A：彼は身体障害があるということで、自己肯定感が低かったです。そこに対してがんばれというだけでなく、今の自分でいいという受けとめ方ができるように鍛えていく方向で支援をしてきました。

<助言者コメント>

- ・意思決定支援とは、自分の言いたいことを伝えられるように支援することですが、うまく引き出しているなと感じました。(Aさんは)50代からの支援という厳しい環境だと思いますが、この支援を通じてご本人以外にも家族に安心感を持っていただけたのは素晴らしいと思いました。



## おでかけサポーターズの活動の紹介

おでかけサポーターズ／世田谷区障害者地域生活課／NPO 法人せたがや移動ケア  
伊藤潤一、佐々木松治、黒羽希次、中島智也、鬼塚正徳

### 1、はじめに

一人ではおでかけが困難な方々（移動困難者）の外出支援に協力してくれる人たち（特にシニア世代を核として）の募集と組織化（おでかけサポーターズの立ち上げ）の活動を、世田谷区障害者地域生活課と当団体の協働事業として進めた内容を紹介します。

### 2、活動内容

- (1) サポーターズメンバーの募集や活動PR
  - ・ 掲示用ポスターの制作や、活動PRチラシの制作
- (2) おでかけに関する支援者や支援リーダーの育成
  - ・ 例会の定期開催、おでかけに関する勉強会の開催
- (3) おでかけイベントの企画とイベント時の送迎支援の実績作り
  - ・ 深大寺の日帰りツアー、羽根木公園の梅まつりツアー、砧公園の花見

### 3、協働事業の選定委員会のご指摘(以下抜粋)

- ・ サービスではないボランティアの仕組み作りは重要だ。一方でボランティアだからと言って、有償サービスと比較して安全が劣ってはいけない。バランスが難しいが、ぜひ仕組みができるとうい。
- ・ ちょっとしたことから事故になった時、大変なことになるということをきちんと考えて、区と相談しながら事業のバランスをとってほしい。事故が起きてからでは遅い。せっかくの事業が台無しになるので気を付けてほしい。
- ・ いつも課題になるのは情報発信だ。どう工夫していくかが問われている。協働事業なので、行政と連絡を密にとってほしい。「報・連・相」というが、連絡を密にしてより良い事業をしていただきたい。

### 4. 今後の進め方

- ・ 国から年金という給与をもらっているシニア世代が、地域活動に汗を流すしくみのひとつが「おでかけサポーターズ」ですが、今後も、協働事業の選定委員会のご指摘に対して、活動の中で対応方法を考えながらすすめていきます。

誰もが自由に外出し移動できる  
世田谷にするために

もとでる

世田谷区福祉移動支援センター

〒156-0056 世田谷区八幡山 1-7-6

TEL:03-5316-6621

FAX:03-3329-8311

[info@setagaya-ido.or.jp](mailto:info@setagaya-ido.or.jp)

<http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/>

<質疑応答>

Q：知的障害者向けの移動支援サービスがありますが、各事業所ではそこに人手を割くと人員が足りなくなります。おでかけサポーターズとして施設におでかけの手伝いに行くことはできますか。

A：地域のおでかけのニーズの対応方法やその体制に関しては、少しずつ検討を進めている段階です。我々サポーターズのように、子育てや介護が終わった世代は時間があるので、できるできないは別としてあきらめずに声かけしていただくことが大切です。

Q：そとでの事業所とおでかけサポーターズの違いはありますか。また具体的な費用について教えてください。

A：そとでは介護タクシーや有償運送のNPOなどの車を使った有料のおでかけ支援のための配車を実施しているところです。おでかけサポーターズはおでかけ支援の実験的な活動です。そとでのホームページには各事業者の料金表がありますが、おでかけサポーターズはボランティア活動で、その実費の費用は、現時点ではその都度考えています。車両で送るだけではなく、その後の見守りや付き添いもサポートできるような環境づくりを目指しています。

<助言者コメント>

- ・課題を投げかけると、働きかけてくださるのがわかりました。これからもニーズ調査をしながら課題解決に努めていってください。



## 家族との連携を通して本人の生活の安定を図る

社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所おおらか学園 谷田さつき

Aさんは物や状況へのこだわりや執着が強く、家庭に置いては生活の仕方（物の管理も含め）自分の思い通りにしたいという欲求が強い。それが叶わないと不安定な状態につながり、家族の日常生活にも支障をきたすことが多い。そのようなAさんに対し、支援員が家庭訪問を行い、家族（母親）と連携しながら、Aさんの家庭での生活の仕方や家族との関係調整を図り、安定した生活に向けた支援を継続してきた。その支援経過を報告する。

### 【Aさんの状態】

Aさんは、家庭において衣替えができず、暑くなっても長袖の上着で外出したり、また夏になってもホットカーペットの使用を母親に強要し、汗をかきながらカーペットの上で食事をする様子が見られた。また冬用の掛け布団から夏用のタオルケットに変えることもできず、母親が少しでもエアコンをつけたり、衣替えの話をするなど、季節に合った衣類や寝具の調整が難しかった。また夕食メニューも本人が決め、冷蔵庫の中を常にチェックし、足りないものがあるとすぐに母親に買いに行かせ、それが叶わないと大声や自傷行為に繋がることもあった。その為母親もAさんの思うようにさせていたが、Aさんが暑さから不快な様子を見せたり、こだわることでより増え不安定な状態がみられることで、母親自身も困惑している様子だった。

### 【Aさんへの関わり】

学園では『衣替え』に関しては、Aさんはカレンダーを気にすることから、反対にカレンダーに「6月になったら半袖」「10月になったら長袖」と書き込み、それをAさんと確認をし、また本人に見立てた着せ替え人形を用意し人形の衣替えをしながらAさんも衣替えをすることを繰り返し丁寧に話していくようにした。ホットカーペットや掛け布団に関しては、衣替えを受け入れた段階で、「布団の衣替え」ということで「学園で預かります」と伝え、支援員が家庭訪問に行き布団をタオルケットに替えるようにした。また、夕食メニューは、予め一週間のメニューを母親が決めて、事前に学園に伝えてもらい、Aさんに「おおらか学園のお昼ご飯と同じです。Aさんのお家の夕食のメニューが決まりました」と伝え、母親がメニューを決めて準備ができるようにし、次第に母親から連絡帳に記載しAさんに伝え、学園からも献立表と同じであるということを引き続き話をしていくようにした。

### 【結果・考察】

衣替えに関しては、まず登園後に学園で着替えることで変更の受け入れがスムーズになり、現在は母親も本人に求めることが少しずつできている。布団類に関しても支援員から伝えていたが、徐々に母親から「学園で預かります」「夏なので替えます」と話し、替えるようになった。夕食も今では変更があっても母親が連絡表に記述し、Aさんに話をしている。Aさん自身もそのことを受け入れ不安定になることも少なくなった。母親自身が学園と協働しながらAさんへの理解を深め、Aさんが受け入れやすい関わりを一緒に考え工夫し進めていく中で、Aさんも安心して母親の話を聞こうとする態度や気持ちの変化がみられ、Aさんの生活の安定に繋がったと感じる。

<質疑応答>

Q：このような支援は長期的な視点が必要ですが、記録の共有、読み方など担当者が変わったとき等のことも踏まえ、有効な方法を教えてください。

A：一人ひとり個別指導計画を作成しています。また、家庭訪問時は必ず記録を残しています。前任者の記録も確認しながら慎重に行っています。

<助言者コメント>

- ・「見える化」すると混乱が少なくなります。本人も周囲の話をプラスに捉えられる素質があるのではないかと思います。親にもそれぞれタイプ、事情もあると思うが、そこも考慮しつつ、これからも頑張ってください。



## エピソードに人づきあいの変容を見る

社会福祉法人せたがや桜の木会 世田谷区立下馬福祉工房  
甲斐 実

### 概要

人への関心はあるものの、対人関係の持ち方につまづきをみせていたAさん。彼女の行動を整理しながらも、日々のやりとりの中で楽しいと感じられるよう心情を大切にしていって支援を続けていく中でみられてきている変化について報告する。

#### 1、事例プロフィール

30才 女性 通所12年目 愛の手帳3度 自閉症

作業能力は高く、一度覚えたシールの色や袋の形は間違えることなく行うことができる。しかし、日常の生活場面や、対人関係においては、大声や汚言、飛び跳ねといったセルフコントロールの難しさや、関心のある仲間の顔をべたべた触る、頬ずりするなど対人的な距離感がつかめないなどの課題があり、アンバランスさをみせていた。また、以前は急な変更や、受け止めがたいことに会うと、大きな声で騒ぎ立てこちらの声も一切届かないような状態になってしまうこともしばしばみられた。対人的なやりとりで、不安を慰めてもらうことのできにくさが表に出ていた。

#### 2、12年間の基本的な支援方針、配慮等

(1) 仲間関係の調整 (2) 社会的な適応力 (3) 持ち味を発揮する

#### 3、エピソード

##### ①エピソード 「びっくりしたね」

昼食時、いつもと変わらず給食を摂り、皆そろそろ食べ終わりかという時間になった頃、隣のテーブルに座っていた男性利用者が、大きな声を出しながらトイレへ向かっていくということがあった。以前であれば、突然の大きな声におどろき、Aさんも大きな声になってしまい、ドキドキしてしまう不安な気持ちを抑えられずにいただろうと思われた。しかし、この日は少しおどろいた顔はするものの、僕と目を合わせ「大丈夫かな？」という気持ちを視線で伝えようとしてきてくれたので、こちらも目を合わせ「大丈夫だよ」と伝えるつもりでうなずくと、そのままその場はやり過ごすことができた。皆が食べ終わり「ごちそうさま」と各テーブル下膳をはじめ、自分たちもカウンターにお盆を下げに行った際、「さっき、びっくりしたね。」と声をかけにきてくれた。その自然な姿におどろきと感動を覚えながら「そうだね、びっくりしちゃったね」と返すと、満足そうな顔をしてハミガキへと向かっていった。

##### ※エピソードから気づくこと

このエピソードで私は、まず不意な状況が起こった時にそのまま反応してしまうのではなく、とっさに私と目を合わせ一呼吸置いてAさん自身が自分の気持ちを確かめようとする、その時を一緒に共有できたことが嬉しかった。客観的に見れば、目が合ったのが偶然かも知れないが、私も不意の状況にあってとっさにAさんの方を見たのは、こういった状況にAさんが戸惑うであろうという思いがあったのかも知れない。そしてそれは、Aさんにとっては「気にかけてくれている」というメッセージとして受け取ってもらえていたのであれば、さらに嬉しい事である。

そして、その後の「びっくりしたね」は、視線を交わしあった瞬間のAさん自身の受け止めに言葉に伝えてきてくれている、さらに居合わせた私もきっと同じような思いを抱いていたのではないだろうかと感じていたから出てきた一言であったのではなかろうか。その一時の思いの交錯を言葉にして伝えてきてくれることで、同じ場面、気持ちの置き所がより一層深い共有体験として感じられるように思われた。

#### 4、こうしたエピソードが生まれる土壌を考える

思いの映し返しの中に「不安を慰める」関係が育つことを願っている。

<質疑応答>

Q：Aさん以外と職員との関わりは変わってきていますか。関わりが広がってきているのであれば、支援上留意していることを教えてください。

A：Aさんとの関わりでおもしろいことは、最近、他の職員ともやってみたりしています。

Q：家庭への支援はどうしていますか。

A：「今日はこんなことがありました」と施設での様子を報告することで、家庭からの報告も増え、全体が肯定的な雰囲気になってきています。

<助言者コメント>

- ・集団行動の中で様々な関係性が生まれてきてベースができます。不穏になったりすることには原因があります。そう考えるのが自然です。彼らからすれば、1対1の関わりです。それを見て他の人が隠れてしまうこともあります。大変でしょうが、頑張ってください。





# 教室型発表 第6分科会

## 地域をつなぐネットワーク

進行役・助言者

北本 佳子(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授)

瓜生 律子(世田谷区高齢福祉部長)

	発表者	所属	テーマ
1	進藤 義夫 大野 圭介 経塚 章寛	特定非営利活動法人障害者支援情報センター 社会福祉法人 藍 社会福祉法人 藍	世田谷セレ部 活動報告
2	今関 将弥	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 ボランティア・市民活動推進部	いつか来るその時のために 一都立芦花高校での授業の取組みー
3	丸山 節子 橋元 裕明 百瀬 智彦 安藤 秀彦 鈴木 健太 山本 恵理	砧地域ご近所フォーラム 2017 実行委員会	ネットワークを上げる ～砧地域ご近所フォーラムの「特別企画」 ～
4	須澤 和也 佐貴 梢 榊原 克史 桑谷 和司 片野 智幸	世田谷区介護サービスネットワーク パナソニックエイジフリー介護チェーン世田谷 ヤマシタコーポレーション世田谷営業所 (株)共英 (株)トーカイ セントケアリフォーム等々カ	地域における福祉用具連絡会の役割と活動
5	吉田 俊之	成城大学大学院経済学研究科 経済学専攻博士課程後期	住民主体の互助を活性化する 10 のポイント
6	高橋 祐孝	社会福祉法人世田谷ボランティア協会 福祉事業部	地域のだれでも参加! 「いっしょに食べよ」 ～”食”のワークショップで見えてきたこと～
7	松田 妙子 松本 居恵	NPO 法人せたがや子育てネット	地域とつながって子育てする ～おでかけひろばぶりっじ@roka の実践

## 世田谷セレ部 活動報告

特定非営利活動法人障害者支援情報センター 進藤 義夫  
社会福祉法人藍 大野 圭介  
経塚 章寛

「世田谷セレ部」は、世田谷区内の就労継続支援B型事業所等が連携し、共同受注や共同販売等を行う障害者施設ネットワークであり、利用者の工賃向上を目指すとともに、障害があっても地域でいきいきと豊かに暮らせる環境づくりを進め、地域と連携し、地域住民に貢献する活動を行うことを目的としている。

本ネットワークは平成13年に世田谷区から特定非営利活動法人障害者支援情報センターが受託して、東京商工会議所世田谷支部等企業団体の協力のもと行った、「作業仲介事業」（作業を与えたい企業から作業を欲している障害者施設への作業の仲介をおこなう事業）を核として始まった。その後、障害者自立支援法（現：障害者総合支援法）の施行のもと、「工賃を高めること」「施設のネットワーク化」がより大きな課題となり、共同受注や共同販売を実践してきている。平成26年からはネットワークに「障害のある人もない人もみんなでセレブになろう」「活動を通じて地域の皆様のより素敵な暮らしにつなげよう」という意味をこめ、さらに「部活動」的に楽しく活動できるよう、「世田谷セレ部」という名称を定め、本活動に賛同する就労移行支援事業所や生活介護事業所等とともに活動を行っている。

「世田谷セレ部」では毎月定例会を行い、共同受注や共同販売の情報共有や打ち合わせを行うとともに、勉強会として新規受注への営業の仕方や実際に企業の方を招いてのディスカッションなども行っている。また、共同受注では、各施設から利用者と職員が集まりライオンズクラブ発行の会報紙（ライオン誌）を全国のクラブ事務局宛用に35000部を1日かけて仕分け封入する共同作業「ライオン誌封入作業」を毎月10数施設で行っていることが特筆に値する。共同販売イベントでは、しもきた商店街振興組合の多大なるご協力のもと年4回開催する「下北沢大学はっぴいハンドメイド」のほか、年1回は世田谷セレ部主催の「障害者フェスタ」を「二子玉川ライズ」や「下北沢大学」にて開催し、各施設の自主製品の販売だけでなく、ステージや作品発表・福引やゲームコーナーなどの受注中心の施設や生活介護事業所も参加しやすい取り組みも行い、世田谷区内の施設主催の販売会としては最大のものとなっている。

「世田谷セレ部」はその成り立ちから、企業団体と深い連携が取れることが他の自治体のネットワークと比較しても大きな特徴であるとともに、ネットワークに最初から事務局が存在し、「参加したい施設が参加したいときに参加できる」緩やかな形態をとっていることが大きな強みでもあり弱みともなっている。現時点では、参加施設の自主性の向上を推進するとともに、ネットワーク形態の見直しや安定化、ネットワークを支える次世代の育成が課題となっている。

<質疑応答>

Q：農協と協力をすることで売り上げも上がるのではないのでしょうか。

A：農協との関わりはあり、災害時の支援など、アイデアを出しています。今回の質問を受けて実現に向けて取り組みたいと思います。

Q：企業側からの受け入れも行っていきますか。

A：企業からの受け入れは行っており、事業の見学などを行う部署もあります。受け入れや見学を行ってくれた企業などには感謝状を贈っています。

<助言者コメント>

- ・「地域」から認められることも大切であり、さらに地域に目を向ける活動を行うことで自然に事業の拡大につながると信じています。



## いつか来るその時のために ー都立芦花高校での授業の取組みー

社会福祉法人世田谷ボランティア協会  
ボランティア・市民活動推進部  
今関 将弥

### 1. 目的

都立芦花高校では1年生全員を対象に、「災害時に高校生が地域にどう貢献するか」をテーマにした「奉仕」の授業を行っている。世田谷ボランティア協会では、講師の紹介やプログラムの実施などをコーディネートしている。

### 2. 内容（2015年度実績）

- ・対象／1年生240名
- ・授業時間／全4日間（オリエンテーション：11/4 体験：11/6,11/13,11/20）  
事前学習は学年全体、体験は2クラス（80名）ずつ実施
- ・授業内容
  - ①マンホールトイレの組立て体験＋防災まち歩き（4コースに分かれる）
  - ②防災講話
  - ③AED講習
    - ※①②は、世田谷ボランティア協会でコーディネート
    - ※③は、芦花高校側でコーディネート
- ・ボランティアは毎回7名前後  
地元の青少年委員、東日本大震災時のボランティアバス参加者、せたがや災害ボランティアセンター運営委員、ボランティア活動団体のメンバーなど

### 3. 結果・考察

ふだんの生活とは違う視点でまちを見たり、初めてマンホールトイレに触れることで、生徒それぞれに発見や気づきがあった。

～生徒アンケートから抜粋～

- ・「まちを歩いていると意外に消火器があるのだと思った」
- ・「マンホールトイレの組立ては意外と体力のいるものだったので、若い自分たちが率先してやらなければと思った」
- ・「いざという時のために、自分の地域に何があるか知っておくことが大切だと思った」

また、協力者からも、「マンホールトイレについて知ることができた」「生徒から『災害時は手助けしたい』というコメントがあり嬉しかった」という声があった。

### 4. 課題

ほとんどの生徒が初めての体験で、実施する意義は大きい。しかし、1年生で体験した後のフォローはないので一過性の体験になっている点をもったいないと感じた。

<質疑応答>

Q：学校という場所で発想力を育てていって欲しい。学校は、自分たちに何ができるのか考える場所でもあります。クリエイティブな生徒たちの考えをもっと引き出せるような場を与えていって欲しいです。

A：今、芦花高校は女子生徒が多く、学年によっては男女比が1：2くらいです。ですので、今後は女性の視点でもっと何ができるかを考えていくことにしています。

Q：AEDなどの講師は私立学校でも呼んでいるのでしょうか。中学生や高校生の頃から知ることによって、ボランティア協会への興味を持つことができます。はじめからそうなっていれば、講師もやりやすいです。学生はさらに興味を持つこともできます。1年に1回ずつでも、もっと継続的にやって欲しいと思います。

A：学校によって災害プログラムの切り口が違います。本プログラムを始めた当時の芦花高校の校長先生は、災害について生徒に気づいてほしいとの思いがあり、このようなプログラム内容を提案をしています。

Q：防災のこと以外に何に取り組んでいますか。

A：夏休みのボランティア体験プログラムなどを呼びかけたり、希望者にはより深く体験する場を提供しています。

<助言者コメント>

- ・街に出て、街をチェックすることを若い視点で突き詰めていく。このことをとおして興味を持った人に、継続的に興味を持ってもらえるように工夫をしていって欲しいと思います。まだまだこういったボランティアに来る若い人は少ないので、よろしく願いいたします。



## ネットワークを拡げる ～砧地域ご近所フォーラムの「特別企画」～

砧地域ご近所フォーラム2017実行委員会 丸山 節子、橋元 裕明  
百瀬 智彦、安藤 秀彦  
鈴木 健太、山本 恵理

「砧地域ご近所フォーラム」は、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指して顔の見える関係づくりを進めていこうと、平成22年から始まったフォーラムである。これを主催する実行委員会は、医師、歯科医師、薬剤師、高齢・障害・子育ての支援者、社会福祉協議会、町会自治会、行政等で構成されている。

このフォーラムでは、砧地域にあるさまざまな取組みを、活動している方々に自ら発表・展示していただき、それによってお互いを知り、さらにネットワークを拡げてきた。今回はそれに加えて「つながろう、つなげよう、高齢・障害・子ども・若者の窓口！」と題した特別企画をおこなった。

近年、住民の抱える困りごとは多様化・複雑化・複合化しており、従来の高齢・障害・子育て・若者など領域ごとに設けられた個々の相談窓口だけでは解決が難しくなっている。そこで、領域を超えた連携ができるよう、相談窓口をつなぐ場を作ろうと考えた。初めての試みであったため、担当者は毎月集まって検討を重ねた。

その結果、「コーディネート機能を持つ窓口の担当者が、利用者から相談を受けてどうしたらいいか困ったとき、今回知り合った人たちに相談ができる顔の見える関係づくりをめざそう！」という目的のもと、ワールドカフェ方式でグループワークをおこなうことになった。

当日は、高齢・障害・子育て・若者の各領域、またそのすべてに関わる窓口から43名が集まった。事前に提出してもらった「つなぎ先がわからなくて困っていること」を元にアイデアを出し合い、非常に活気のあるグループワークとなった。

終了後のアンケートでは「いろいろな職種の方々の意見を聞いて良かった」「短い時間の中で、ここまで情報が出てくることに正直驚きました」と高評価であった。

第7回砧地域ご近所フォーラム2017は「わたしからひろげよう地域のわ」というテーマで、平成29年3月18日（土）に成城ホールで開催する。今回はこの特別企画を「ひろげよう」をテーマに実施しようと検討中である。今回はじめてつながった領域間のネットワークをより深め拡げ、具体的な実践に活かせるようにと考えている。

砧地域ご近所フォーラムは、この特別企画だけではなく、さまざまなネットワークをつなげて拡げる場となっている。今後も新たなつながりを生み出し、地域の力を高めるべく活動していきたい。



<質疑応答>

Q：地域ネットワークを有効に進めるための必要な能力についてお聞かせください。  
また、そのために何が重要だと思いますか。

A：地域ネットワークを有効に進めるための人材が必要だと考えています。

Q：地域がまとまらない。地域への介入をどのように考えていますか。

A：地域力の低下を感じています。すぐにできる策はありませんが、仲間を見つけて知恵を絞り、考えるしかないと思っています。しかしながら、このような状況においても各地区との関わりは増えていると思います。

<助言者コメント>

- ・砧地域ご近所フォーラムは、住民主体のまちづくりを積極的に行っている団体であると認識いたしました。住民の声や意見を待つだけでは持続させていくのは難しいのではないのでしょうか。プロ（専門家の人たち）同士のつながりはどの地域でも必要であると思います。そのつながりの先駆けになっていると感じました。



## 地域における福祉用具連絡会の役割と活動

発表者：世田谷区介護サービスネットワーク福祉用具連絡会副代表 須澤和也（パナソニックエイジフリー介護チェーン世田谷）、同副代表 佐貫梢（ヤマシタコーポレーション世田谷営業所）、榎原克史（㈱共栄）、桑谷和司（㈱トーカイ）、片野智幸（セントケアリフォーム等々カ）

共同研究者：世田谷区介護サービスネットワーク福祉用具連絡会幹事一同

平成12年に介護保険制度が発足しました。この制度の中で福祉用具が介護給付の対象となったことをきっかけとして、高齢者にとって福祉用具がたいへん身近な存在となりました。しかし、福祉用具は多種多様であり、高齢者の身体状況に合ったものを選択するためには専門的な知識が必要です。

世田谷区内で福祉用具を提供する事業所は40数社ありますが、訪問介護やデイサービスなどの事業と違って横のつながりが希薄な状態が続いていました。しかし、世田谷区介護サービスネットワークという事業者団体の中で、福祉用具を使った研修へ会員事業所が用具を提供したことをきっかけとして「せたがや福祉用具連絡会」が設立しました。

本連絡会の目的は、会員事業所従業者の選定技術と商品知識の向上、展示会などを通じて福祉用具の適切な使用方法を広めること、介護関係者や医療関係者への情報提供、地域包括ケアの中で専門職としての地位を築くことなどです。

本報告においては、本会の発足までの経緯を時系列に説明し、また、発足後の活動について紹介します。ついで適切な福祉用具を選択することによって、利用者の生活が大きく変わることを二つの事例を通して説明します。比較的軽度な障害をもった利用者の事例と、重度な障害をもった利用者の事例において、どのような福祉用具を何のために導入したのか説明したいと思います。

最後に介護保険法における福祉用具貸与事業の問題と課題について説明します。次期法改正においては要介護2未満の軽度者を対象とした福祉用具の使用制限や住宅改修の制限が議論されていますが、年間95億円の国家財政負担を利用者の自己負担にすることによって、軽度者の生活の質が相当程度低下することが懸念されます。社会保障費が増大していることは事実ですが、適切な福祉用具使用によって利用者の自立度を高め、生活の質も高めることができる制度の維持を求めています。

本報告を通じて福祉用具貸与・販売事業への理解が深まれば幸いです。

<質疑応答>

Q：福祉用具は使う、利用するだけではなく、けが等を「防ぐ」ことや「(機能を)回復」するような用具であって欲しいと思います。また、そういった道具を作って欲しいです。

A：アイデアをメーカーや医師などに提案をしていきたいです。アイデアを大切にしたいと思っています。

Q：施設ではあまり福祉用具を使用していない現状がありますが、この問題について取り組んでいることはありますか。

A：福祉用具の金額が高いことも問題のひとつだと思います。また使い方がわからない場合は教えに行きますので呼んでください。

<助言者コメント>

- ・アイデアをぜひメーカーに伝えてほしい。フィッティングに時間やお金がかかると介護中けがをして人材が離れていってしまうので、よりよい福祉につなげて欲しい。



## 住民主体の互助を活性化する10のポイント

発表者：成城大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程後期 吉田 俊之

共同研究者：慶應義塾大学大学院経営管理研究科 田中 滋

### 1. 研究や活動の目的

超高齢社会の到来に備え、本邦では地域包括ケアシステムの構築が急がれる。その重点課題のひとつは互助形成と発展にほかならない。そこで本研究の目的は、都市部で意図的に互助を形成する際に共通する調整機能を明らかにすることとする。

### 2. 実践内容

池尻地区および若林地区を含む6つの都市部の先進事例から、互助形成に共通するコーディネート機能を3つの形成段階に分け分析した。互助形成に主体的に関与した関係者に対しインタビューし、得られた情報を概念化・カテゴリー化した。

### 3. 結果

共通した10のコーディネート機能は次の通り。(1) 準備・声かけ期では、①信用・信頼関係に頼ったネットワークづくり、②とりあえずの交流や接触機会の用意、③非公式なリストアップと直接声かけ。(2) 活動開始・初期では、④イレギュラーな現象は正面から取り扱う、⑤居心地のよい人間関係づくり、⑥厚めの支援、⑦数値目標によるマネジメントは避ける。(3) 活動定着期では、⑧活動の運用を任せる(自走化)、⑨対等な関係づくり、⑩受け身一辺倒の年寄り扱いしない。

### 4. 考察

互助形成の段階別にみると、活動開始前では、信頼や信用を軸としてネットワークを形成しつつ、効果的に協力相手を探る機能が抽出された。活動初期では、特に虚弱高齢者を想定した厚めの支援を実施し、数値管理によるマネジメントを避けていた。一方で、改善活動に類似する取り組みがあった。最後に、活動定着期では主体性の向上が重視され、互助活動の主体者に運用を任せる行動が観察された。これらのことから、互助形成時のコーディネート機能は、協同活動が前提となるなかで、信頼や信用のネットワーク基盤の構築と、関係者間の妥結点を円滑に模索する機能に寄与すると考えられた。また、ボランティアマインドによる活動のため、動機を高めつつ、機会主義的行動をうまく抑制する役割を果たしている可能性があるかと推察された。

### 5. 課題

本研究の限界について、互助形成時の共通項目を抽出することを目的としているため、互助形成と抽出要因の因果関係を論じるには不十分である。今後は、定量研究を含め抽出項目が必要・十分条件を満たすか検討が必要と考える。

<質疑応答>

Q：個人情報の取り扱いについては、どのようにしているのでしょうか。

A：声かけをするときに、できる範囲で説明し同意を得ています。データの管理は厳重にしています。

Q：近隣だけでない互助（井戸端会議）についても、考えていくべきではないでしょうか。

A：ボランティアの人たちは、近隣ではなく遠いところに行って活動している現状はあります。

<助言者コメント>

- ・この研究内容は、ソーシャルワーク、特にコミュニティソーシャルワークに関連しています。専門職に限らず、地域の人たちが連携していくことで、まちづくりも発展していくことでしょう。



## 地域のだれでも参加！「いっしょに食べよ」～“食”のワークショップで見えてきたこと～

社会福祉法人世田谷ボランティア協会 福祉事業部 高橋 祐孝

### ○はじめに ～世田谷ボランティア協会の概要～

世田谷ボランティア協会はボランティア活動の推進事業を行うボランティア・市民活動推進部と、おもに高次脳機能障害のある人たちを支援する施設、高齢者や障害者の福祉サービス計画作成、ヘルパー派遣、障害やいろいろな理由で生きにくさを抱えた人たちの相談支援センターなどの事業を行う福祉事業部のふたつからなる社会福祉法人です。

世田谷区では出張所・まちづくりセンターで、地域の課題の相談窓口を開設し地域包括ケアシステムがスタートしました。協会福祉事業部でも協会が取り組める地域包括ケアを検討した結果、実施しているプログラムの実績から、“食”は人を惹きつける重要なキーワードであると考え、2015年3月から「夕食会 いっしょに食べよ」をスタートさせました。

### ○実施の目的／

昼間には高齢者を対象にした食事会や居場所としてのサロン活動が多くありますが、夜に実施しているところはほとんどありませんでした。そこで、夜間でも安心して参加でき、美味しい食事を楽しんでもらえる夕食会を実施しようと考えました。この夕食会では高齢者や障害のある方、地域のみなさんとボランティアが顔の見える関係をつくっていくことで、まちで出会ったときに「こんにちは」と声をかけられ、何か困ったときには相談できるつながりづくりを目指しています。

### ○実施内容／

参加の呼びかけは、あんしんすこやかセンター（5か所）やボランティアセンターで、障害のある方や介護保険を利用している方、そしてボランティアに声をかけています。

当日はスタッフとボランティアが調理と会場の準備を行い、自力移動が難しい方の送迎を実施します。参加者は調理を手伝い、配ぜんに協力するなど自分の役割を見つけています。

### ○実施結果／

2015年3月から隔月、20名程度の参加者でスタート。現在では（毎月1回、第4金曜日）90歳代の方から身体障害、精神障害、高次脳機能障害のある方、就学前後の子どもと保護者、そしてボランティアと40名を超える「夕食会」になっています。最初は馴染めないかなと思われた高齢者が続けて参加、子育て中の母親は友だちを誘ってと、少しずつ参加者が増えてきました。高齢者が小さい子どもといっしょに食事をし、その準備をボランティアといっしょに障害者が行います。学生ボランティアには、会場準備から配ぜん、みなさんの話を聴き、いっしょに子どもたちと遊ぶというとても貴重な経験の場になっています。

### ○見えてきたこと

「いっしょに食べよ」では、“食”をテーマにしたことでさまざまな人がかかわる機会を提供しています。高齢者は、ひとり暮らしではつくりたくないような晩ご飯を、子育て中の母たちは、家では作らない、ファミレスでも食べられない料理を気に入ってくれます。夜が早い高齢者は、食後すぐに帰りの時間を気にし始めますが、仕事で遅くなった母親は週末の晩ご飯を子どもといっしょに食べながら、ママ友と話をしています。仕事を終えて合流するお父さんも現れました。この光景は、いろいろな人たちがこの地域に住んでいるという当たり前のことに気づかされ、開始当初から参加者がほぼ倍増している事実は、「夕食会 いっしょに食べよ」が地域の居場所のひとつになってきたことを教えてくれました。

<質疑応答>

Q：第三者的に見て、ここまでこの会が発展してきたポイントは何だと思えますか。

A：いらした方に「軽く」声かけをしてみたり、若い人へはSNSで発信したりしています。強制はしていません。食事の際は、年代や性別などが固まって座らないようにするのを心がけています。

Q：食事は、おいしいですか？

A：「普通」だと思います。うす味ですかね。

Q：ボランティアはどのように集めていますか。また、どうしてそんなに長く続けているのでしょうか。

A：学生は関われる時期に限度もあるので割り切っています。その次の世代につながって、続けばいいと思います。

Q：50代、60代の方もいらっしゃいますか。

A：いらっしゃいますし、そういった方は学生さんに料理などを教えてくれています。

<助言者コメント>

- ・誰もが関心のある「食」とおしての活動は素晴らしいですね。来年もまたこの活動のその後についてお聞きしたいです。



## 地域とつながって子育てする～おでかけひろばぶりっじ@rokaの実践～

NPO 法人せたがや子育てネット

松田 妙子

松本 居恵

### 1. おでかけひろばぶりっじ@rokaの概要

- ・世田谷区おでかけひろば事業（地域子育て支援拠点事業・第2種社会福祉事業）
- ・南烏山のUR 芦花公園団地11号棟1階にて、月～金曜日の10時～15時開室。
- ・参加費無料。一時預かり1日2名、有料。（要事前登録）
- ・妊娠期から、乳幼児をつれた親子が気軽に過ごせる場所として、一日3名のスタッフ体制で運営しています。

### 2. 子育て親子の現状

地域とつながりのない中で慣れない育児をはじめている親子にとって、「地域とつながって子育てする」ことはとても重要なことです。子育て親子が見守られ支えられる地域にしていくには、どんなアプローチが必要なのでしょうか。

### 3. おでかけひろばぶりっじができること

おでかけひろばぶりっじでは、親子が「地域とつながっている実感」につながるとして、「団地に立ち話を増やす」ことを目標のひとつに挙げています。「知らない人とは話してはだめよ」と子どもに教える時代。地域の人が声をかけてくれることは、子どものことを知っている人が増え、地域の人への信頼が生れる瞬間ではないのかと考えました。身近に立ち寄れる常設の場をつくることで、その橋渡し（ぶりっじ）役を担えると感じています。

### 4. 親子が世代の違う地域の方とつながるために、ぶりっじが行っている活動

#### ①ぶりっじの存在を知ってもらう。

団地の掲示板等にひろばの行事カレンダーを貼る

広報ツールを工夫してぶりっじのPRを担ってくれる協力者を増やす

#### ②地域の方がぶりっじに来られるイベントを企画。（おもちゃの修理&包丁研ぎ等）

#### ③地域の行事に参加し、親子を地域につなげる。（烏山のまつり、防災訓練等）

また、親子が自然と地域の方と立ち話ができるよう、積極的に外遊びにでています。子どもの声がうるさい、という風潮は顔見知りの子どものいないことも要因のひとつだと考えます。

### 5. ぶりっじを通して親子が地域の方に見守られていると感じられる事例

★もみの木の飾りがポストに

★なっちゃんが縫ってきてくれた白い袋は・・・

★シロツメクサ至急！事件

常設の場の強みを生かし、多世代に活動をひろげていくためのアドバイスをぜひお願いいたします！

<質疑応答>

Q：知的障害や精神障害のある子どもも利用できますか。

A：もちろん、できます。母親の気持ちのハードルが高いとは思いますが、気にならず参加していただきたいです。

Q：世田谷には「おでかけひろばぶりっじ」は何ヶ所ありますか。

A：13ヶ所あります。

Q：利用する際の料金はどのようになっていますか。

A：2時間で1500円です。その後1時間経過ごとに500円です。

Q：利用する場合、住まいの範囲などはありますか。

A：特にありません。

<助言者コメント>

- ・地域にいない母親の支援が、実は地域の支えになっていると思います。





# 教室型発表 第7分科会

## 一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者

吉田 輝美（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

市川 裕太（グループホームかたらいホーム長）

	発表者	所属	テーマ
1	山岡 まゆみ	特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ	「立つ、座る、歩く」が快適にできる生活 リハビリの取り組み～年を重ねての、寝る、 座る、立つを安全に楽ちんに～
2	鈴木 奈穂美 小見 奈那江	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家	おむつ改革
3	櫛原 大空 西村 将太 渡辺 三恵子	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	適切な評価に基づいた口腔機能維持向上へ の個別の取り組み
4	澤田 美咲 石井 琢也	世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケア マネジャー部会 優っくりグループホーム鎌田 グループホーム成城さくらそう	「私をわかって」 ～ICF を用いて本人の気持ちを理解する～
5	小川 優香里	昭和女子大学	特別養護老人ホームにおける回想法の実践
6	有馬 秀明 安藤 俊一	社会福祉法人 敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑	ファミリーハッピーライフ リターンズ！

「立つ、座る、歩く」が快適にできる生活リハビリの取り組み  
～年を重ねての、寝る、座る、立つを安全に楽ちんに～

発表者：特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ 山岡 まゆみ  
共同研究者：特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ 笹川 美由紀

当、等々力共愛ホームズ（以下当ホームと略す）は52名の方が入居されるユニット型の特別養護老人ホームである。入居者の平均年齢は89才。平均介護度は4.3となっている。ご自分の足で歩いて移動できる方は12人。入居者の77%の方は車いすの利用なしには動くことができない状況である。ベッドの上に寝た姿勢や車いすに座った姿勢をご自分で変えることができない方も多い。

当ホームでは、機能訓練指導員を1名配置して、ADLを低下させないように、ケアスタッフと協働して筋力低下防止・拘縮予防に努めている。高齢者は激しい筋力強化運動は困難で、日常生活の中の動作を利用しての運動で筋力低下防止に努めている。

今年度新たに理学療法士による研修を開始した。研修の目的は、適切で安楽な姿勢をとる技術の習得である。適切な姿勢は安楽で、筋肉の緊張を低下させ拘縮を予防・改善する。拘縮予防・改善に関する新しい概念と技術を習得しながら始めた実践と、その効果を報告する。

研修講師の理学療法士田中義行氏は、拘縮を予防・改善する適切な姿勢のポイントとして、6点を挙げている。①下肢を屈曲させて腰が反ることを防ぐ②肩甲骨を外側に開く③頸部は軽度前屈位を取る④頸部、体幹部、股関節など全身のねじれを作らない⑤股関節の傾きを作らない⑥体とマット（椅子）の間に隙間を作らない

上記の6ポイントが満たされた姿勢は、臥位でも座位でも安楽であり、呼吸が深くゆっくりとなり、筋肉の緊張が低下するとのことであった。6ポイントは既知の知識と異なる点もあり、研修者にとっては驚きであった。しかし、実際に姿勢調整を行って見た入居者には、肘が曲がり縮こまっていた腕を降ろし、握り占めていた指が開くようになり、眉間に寄った皺がなくなり、呼吸がゆっくりとなるなどの変化が見られた。研修者自身も6ポイントを抑えた体位を体験することで、安楽な姿勢を実感することができた。実践を始めると、体のねじれを作らない、股関節の傾きを作らない体位をとることがなかなか困難であった。また、交代勤務の中では、直接講師の指導を受ける機会がないスタッフもおり、ケアスタッフ全員が適切な姿勢のポイントを理解することや、講師からのアドバイスを全員に伝達することの難しさもある。しかし、入居者に少しずつ現れてきた変化が、技術習得のモチベーションに繋がっている。

「安楽な姿勢をとること」は介護ケアの基本であり、スタッフ誰もが実践してきたつもりであった。しかし、今回の研修で、安楽とは程遠い実践を行ってきたことに気づき愕然とした。まだまだ、改善途中ではあるが、適正な姿勢保持の取り組みの経過を報告する。

尚、本発表に際し、せたがや福社区民学会および当法人の規定に則り、映像、入居者情報など倫理的配慮をした。

<質疑応答>

Q：6つのポイントをもう一度教えていただけませんか。

A：①下肢を屈曲させて腰が反ることを防ぐ②肩甲骨を外側に開く③頸部は軽度前屈位を取る④頸部、体幹部、股関節など全身のねじれを作らない⑤股関節の傾きを作らない⑥体とマット（椅子）の間に隙間を作らないです。

<助言者コメント>

- ・とても貴重な実践報告です。今後の発展を期待しています。データの取り方をもっと細かくしたり、時間による変化もポイントになるのではないのでしょうか。安楽な姿勢によって、ご本人のストレスを取り除いていく、生活を取り戻すというところにリハビリの意味があると思います。



## おむつ改革

特別養護老人ホーム等々力の家

鈴木 奈穂美

小見 奈那江

等々力の家では、27年度は排泄ケアの改善に力を入れるべく、「排泄委員会」を発足しました。

ご利用者の快適性の向上と皮膚トラブルの軽減の為、紙のリハビリパンツやテープ式紙おむつを、少しずつ布パンツへ移行していきました。また、布パンツとセットで使用する尿取りパットも、こまめな尿測とアセスメントにより最小限のものになるよう選定の見直しを図りました。排泄用具の種類や大きさの変更により、より正確なケアが求められる様になりましたが、研修会を実施するなどの工夫を重ね、普及するにいたりました。

結果、ご利用者からは快適性が上がったという声が聞かれ、おそらく紙製品の摩擦が減少したことから、皮膚トラブルも軽減しました。さらには使い捨て製品の発注量が減ったことにより、コストの削減にも繋がりました。

ご利用者にも優しく、コストもかからないケアを目指して取り組みました。

<質疑応答>

Q：紙おむつからコットンパンツに変えたことでの良さについては理解しましたが、問題点はありますか。

A：リハビリパンツ（紙おむつ）の場合は、尿もれが少しあっても大丈夫ですが、コットンパンツは少しの尿もれでも着替えなければならない点でしょうか。

Q：不安に思う職員に対してどうアドバイス、助言したのでしょうか。

A：使用するパットによって、当て方の違いを実践して見せました。

<助言者コメント>

- ・おむつ改革をしたことによって、利用者のADLが改善しているのかもしれないね。コットンパンツにしたことで、改善したこと、良くなったことを職員が理解し、意識できるようにすることは大切です。



## 適切な評価に基づいた口腔機能維持向上への個別の取り組み

発表者：世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム

介護職員 櫛原大空、西村将太

歯科衛生士 渡辺三恵子

共同研究者：世田谷区社会福祉事業団特別養護老人ホーム芦花ホーム

介護職員 松山友香、澤雅樹

看護師 吉廣祥子

管理栄養士 永井雅子

公益社団法人 東京都世田谷区歯科医師会 芹澤直記、小森幸道

昭和大学歯科病院 口腔リハビリテーション科 高橋浩二、湯浅研

芦花ホームでは入所者の摂食嚥下の機能を維持していくために、多職種が協働して評価を実施し、様々な取り組みをしている。しかし、個々の利用者に合わせて対応の中で、効果が感じられないまま取り組みだけを継続し、迷いが生じるような場面も見られていた。そこで、専門医による適切な評価をすることで口腔機能維持向上へ繋がり、取り組む職員も効果を感じられた事例が2例みられたため、それぞれに報告する。

1例目は、入院を機に食事量減少がみられ自力摂取ができなくなったケース。介助での食事の際に咽込む場面もみられ、食べこぼし・流涎・舌の不随意運動・口唇閉鎖不全など様々な症状が出現した。嚥下内視鏡検査（VE検査）を実施し、食事の観察評価（ミールラウンド）を通して専門医より助言をもらい、経口維持計画を立案した。健口体操などの他に、ふき戻しや座位保持訓練などの取り組みを実施し、自力摂取が再びできるようになった事例である。

2例目は、独り身で入所前の状況なども不明、発語不明瞭で意思表示はYes/No形式のみ表出可能だったケース。口腔内に泡沫状の唾液が貯留していることや呼吸機能の低下が発語を阻害していたと考えられた。まず食前食後の口腔ケアを徹底して口腔内の環境を改善していった。また、胸郭を広げる運動を実施し呼吸機能の改善につなげていった。その結果、発語が明瞭になり、少しだが会話が成立するようになった。しかし、会話の中で「食べたいものはない」など、食に対する意欲が低いことがわかり、適切な食事形態の検討をするためにVE検査を実施した。専門医より取り組みの効果を認めてもらい、食事形態も適切に判断できた事例である。

芦花ホームでは世田谷区歯科医師会・昭和大学歯科病院と連携し、VE検査を実施している。また、検査を施行した専門医がミールラウンドを行い、食事介助の方法・食事形態・機能維持のための運動といった今後の対応の指示を受ける。専門的見地に基づいた経口維持計画を実施していくことで、入所者の口腔機能維持向上がみられ、取り組みの効果判定もできるようになり、職員のモチベーション向上にもつながっている。何より「食べる」ことは生きていく上で大きな楽しみや喜びであるため、入所者の意欲の向上も感じられた。

このように個別の取り組みを実施していく中で、「口からおいしく食べられる」ことを継続していくためには、適切な評価を受けることが重要である。

<質疑応答>

Q：89歳の女性の方について、食事のとき吸う動作が多くみられていますが、これは唇を閉じる力が無いということなのでしょうか。

A：私ではわかりかねるので、先生（歯科医師）からアドバイスをお願いします。

A：（歯科医師より）患者さんを診ないとよくわかりませんが、むせはありますか。吸う動作が多く、食べられないというわけではないなら、何かの行為を補っているのかもしれませんが（代償行為）。不安はあるとは思いますが、検査を試みるのが重要です。

<助言者コメント>

- ・介護の視点から、実践を諦めないことです。利用者さんの可能性を引き出してあげることが大切です。
- ・限界点を自覚することによって、他職種からの視点も考慮し、自分たちにできることを知ることが大切です。
- ・個人的には、うまくいかなかったことを取り上げて発表することも良いと思います。



## 「私をわかって」～ICFを用いて本人の気持ちを理解する～

世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケアマネジャー部会  
優っくりグループホーム鎌田 澤田 美咲  
グループホーム成城さくらそう 石井 琢也  
共同研究者 施設ケアマネジャー部会会員

### 1 はじめに

◆ “お風呂を嫌がれば⇒「入浴拒否」、 “便を持って歩けば⇒「不潔行為」” …、このような言葉を使い、ともすれば「困った人」として利用者を受け止め、「ここではとてもお受け入れできません」という結論に至ってしまうことがある。

◆ また、職員の立場からは、「こんなに一生懸命ケアしているのに、なぜわかってくれないの？」という声が挙がるが、利用者本人にはなかなか通じない。なぜなら、それは本人が望んだケアではないから。

◆ 世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケアマネジャー部会」では、施設に勤務するケアマネジャーが毎月集まり、本人主体のケアマネジメントについて学び合っている。

\*いつの間にか、自分たち職員や施設本位のケアになっていないだろうか。

\*本人が発する“困った”行動こそ、本人からのメッセージ、意思表示ではないだろうか。

### 2 事例検討

■ グループホームで暮らす認知症のあるY様の、施設にとって“困った”行動について、ICFの考え方を用いて検討を重ねた。

\*自分の大便を、ちり紙に丁寧に包んでポケットに入れる。口に入れることもある。

\*ある入所男性を「お父さん」と呼び、部屋に入るなどの言動でトラブルになる。

■ Y様の生活の全体像を、ICF(国際生活機能分類)の6つの要素で捉え直していった。検討の過程では、新たに把握が必要となる情報が出てきてアセスメントをし直すなど、適宜情報の追加や修正を行った。

■ 捉え直しにあたっては、特に、「Y様は、どのような気持ちからこの行動をしたのだろうか」という観点から検討した。

### 3 私たちの気づき

● 何をするにも本人にはきちんと理由がある。その理由(信念や、その人のその時の気持ちのありよう等)を理解しようと向き合えてこそ、見えてくることがある。

● 例えば、“大便を口に入れる＝不潔行為”と一般化するのでは、本人の気持ちは見えてこない。

● 施設ケアマネジャーとして、過去現在未来の全体像からその人を理解しようとすることを、一貫して実践していきたい。

<質疑応答>

Q：グループホームのスタッフ全員がまとまるまで、どのような苦勞がありましたか。

A：ホームの1階に従事するスタッフから順番に、代表者が話していきました。1階は主婦の方が多く家事に関してはベテランですし、介護の視点も細やかで特に今までとは変わりはなく反対するスタッフも少なかったなので、声かけを意識しました。スタッフ全員がまとまるまで期間はあまりかかってはいません。

Q：病院はその状態だけを診てレッテルを貼ってしまいがちなので、入院する場合はその方のいつもの状態など全て伝えてくれるとありがたいと思います。

A：実際入院時も退院時も病院スタッフと会話することが時間的に難しいのが現状だと思いますが、その方の為にも今後は施設での生活状況なども書類で伝えていけたらと思います。

Q：なぜICFを選んだのでしょうか。

A：ケアマネ連絡会では本人主体というテーマで勉強会をしていたので今回はICFを用いてまとめてみました。

<助言者コメント>

- ・「否定しないで、受け入れる介護」という考え方が大切だと感じました。
- ・認知症の介護においては「ひもときシート」を使うことが多かったと思いますが今回ICFを使って分析をしたことが斬新でよかったと思います。



## 特別養護老人ホームにおける回想法の実践

発表者：昭和女子大学 小川優香里

共同研究者：昭和女子大学 寺田早希、増田愛実、橋本由梨

佐々木瑛江、藤江美幸

特別養護老人ホーム フレンズホーム 三木撰也

### 【活動の目的】

大学の近隣にあるフレンズホームよりボランティアの依頼があった。せっくなので、ボランティアを高齢者ソーシャルワークのゼミ活動の中でどのように活用できるかを検討した。入所者にとっては楽しみが提供されること、学生にとっては実際の現場からの学びが得られることの双方が満足できるために、回想法の実践に取り組むことにした。回想法とはなにか、何を大切にすることかなどをゼミで学び、そのことを実際にやってみるといふ、机上の学びではなく、実際の現場から学ぶことを目的に活動した。

### 【実践内容】

前期は、2015年6月下旬から7月下旬までの毎週、計6回の実践を行った。後期は、2015年10月中旬から12月中旬まで2週間に1回、計5回の実践を行った。実践の時間帯は14:00～14:30の30分間とした。前期は、全員が共通のテーマで、学生3人に対して入所者複数のグループ回想法を行った。後期は、学生がそれぞれ計画書を作成しテーマを決め、学生1人に対して入所者2～3名の毎回同じメンバーで回想法を行った。

### 【結果】

回想法を実践すると利用者がたくさん話をした。出身地の話や家族の話をしたり、昔の遊びの話を通して家族で過ごしたりしたこと等を思い出し、涙ぐんで懐かしいと述べることもあった。回想法の道具として準備したおはじきに利用者は興味を持ち、笑顔が見られたこともあった。

実践中は、想定していないことがたくさん起こり、せっかく考えていったテーマに利用者が興味を示さなかったということもあった。そのようなときは、テーマにこだわることなく、柔軟に対応することが求められ、その際は、目の前の利用者が何に興味があるのか、どんなことを話したいと思っているのかと考えて内容を変えることも行った。

### 【考察】

認知症がある場合には、回想法は難しいのではないかと考えていたが、その人の状態に合わせて、語りたい本人の世界を表現することができることを学んだ。回想法の評価は確立されていないが、1回でも多く利用者の笑顔を見るために回想法の実践をした。そのことによって、自分たちが持っていた特別養護老人ホームの生活に対するイメージも変わった。認知症を治すことは回想法ではできないが、世界にたったひとつの人生を生き生きと話してもらう時間と空間を一緒に満喫することはできる。そのようなことが、ひとりひとりを大切に尊厳ある関わりをもつことにつながっていくのだと考える。

<質疑応答>

Q：戦争での出来事を思い出して悲しみ、自分を責める人がいると思いますが、果たして回想法は有効なのでしょうか。

A：重い話をする事で、スッキリする人もいます。人によっては有効です。

Q：年を取ると何回も同じことを言ってしまいます。うすい記憶はどうやって引き出すのでしょうか。

A：写真を見せるなど、アプローチを変えると新しい情報が得られる場合があります。

<助言者コメント>

- ・ホームの中では、業務が忙しいために利用者一人ひとりへの関わりが不十分になってしまいます。利用者は、特殊な場所で戸惑うと思うので、本人の気持ちや思いを引き出すことは大切だと思います。



## ファミリーハッピーライフ リターンズ！

社会福祉法人 敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑

有馬 秀明

安藤 俊一

### 1. 目的

「施設に入居するということは、色々なことを諦めることだと思っていました」これは千歳敬心苑に入居されている方のご家族の言葉です。事実、施設に入居すると決まった時点で、入居者様もそのご家族も多くのことを諦め、覚悟を持って入居に踏み切っていることでしょう。

「好きだった食べ物も好きな時に食べられなくなるな」

「会いたい時に会うということも難しくなるな」

「行きたいところに行くことも難しくなるな」

特別養護老人ホーム千歳敬心苑ではこの「諦めた何か」を取り戻して頂くための様々な支援に注力しております。今回はその中のひとつである「一泊家族旅行の支援」を通じ、「諦めていた家族旅行」の機会の提供とともにその「諦めた何か」を取り戻し、それを実感して頂くことを目的としました。

### 2. 実践内容

「一泊家族旅行の支援」希望者を募り、旅行目的地からアクティビティに至るまで細部にわたりニーズを調査することから始めました。次に、施設職員はあくまで黒子、ツアーコンダクターとして関わり、「親子水入らずの家族旅行」が実現できるよう演出、プランニングを行いました。そして平成28年度は6月27日～28日の期間で箱根への家族旅行を実践しました。

### 3. 結果

「歩けない母と再び旅行が出来るなんて思ってもいなかった」

「100歳を過ぎた母と一緒に温泉に入ることが出来るなんて・・・」

「施設に入ったらもう無理と思っていたから嬉しくて」等、ご家族より「諦めた何か」を取り戻せた喜びの言葉や、「懐かしい感じがして、なんだか嬉しいわ」等、入居者様の幸福感溢れる言葉を頂き、目的を十分果たせた結果となりました。

### 4. 今後の課題と考察

一泊家族旅行の支援は支援規模が大きく、その効果は比較的得やすいものであります。日々の生活の中で「諦めた何か」を取り戻して頂く支援規模の小さな実践もしていますが、その多様性に対応し、頻度を高め「諦めた何か」という概念の消失に向けて、今後も入居者様、ご家族との関係性を深め、「施設入居」＝「幸福」とすることが出来るよう邁進していきたいと思います。

<質疑応答>

Q：「一泊家族旅行支援」について、旅行中困難だったことはありますか。

A：天候によって行動が左右されました。食事の見直しも大変でした。課題がわかったことで来年はより良い旅行ができることを目指します。

<助言者コメント>

- ・職員の方の「やりたい！」という思いがあるから実践できるのだと思いました。感動しました。





# 全体会Ⅱ



## 大会総括

司会／そろそろ時間になりました。

発表者、進行役・助言者の皆様、また、ご参加いただきました皆様、そしてボランティアスタッフの皆様、お疲れ様でした。これから、全体会Ⅱを開催いたします。

引き続き、全体会Ⅱにおきましても、その記録及びせたがや福社區民学会の広報使用のために写真とビデオの撮影を行いますことをご了承ください。これらの使用について、不都合のある方は、恐れ入りますがスタッフにお申し出ください。

それでは、開催校を代表いたしまして、東京都市大学人間科学部児童学科学部長の井戸ゆかりからご挨拶をさせていただきます。

井戸／こんにちは。本日は、皆様のご協力のもと、無事にせたがや福社區民学会第8回大会を終了できましたことを、心から御礼申し上げます。今回の大会に先立ち、準備をしまいましたが、もしかしたら、不手際もあったかもしれません。お許しいただきたいと思います。今後も学会を通じて、人々の輪が広がることを祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

司会／ありがとうございました。

それでは、続きまして、大会の総括に入ります。本日は、東京都市大学人間科学部の早坂先生の基調講演に続き、9のパネル型発表、47の教室型発表が行われました。その他、会場では、手作り品の販売や休憩コーナーも作られました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの様々な会場の様子について、皆様からのご感想をお聞きしたいと思います。

まず、教室型の発表者の方、発表をされてのご感想をお聞かせいただけますか。

お手を挙げていただけたらありがたいです。発表者の方、いらっしゃいますか？

発表されていかがでしたか。手が挙がりました。マイクを回します。所属と名前をお願いします。

### 【東京都市大学人間科学部児童学科3年の河野様】



「本日発表いたしました、東京都市大学人間科学部児童学科3年の河野真帆です。私たちは、『昔あそびやわらべ歌の良さ』のテーマで発表させていただきました。テーマを調べ始めてからは、なかなか進まないことも多く、ゼミの中でもあっちがいい、こっちがいいとなったのですが、今日発表して、来ていただいている方が楽しそうに、あやとりなどをしてくださり、調べてよかったと思っています。人

間科学部の同じ学年の仲間も、たくさん見に来てくださったので、すごく発表しやすい空気でとても楽しかったと思います。  
以上です。ありがとうございました」

司会／ありがとうございました。

その他、発表された方で、ご意見、ご感想等ございますでしょうか。  
来年こうしたほうがいいのか、とか、そういったことでも結構です。

【東京都市大学人間科学部児童学科 伊藤陽一研究室の前沢様】



「東京都市大学人間科学部児童学科 伊藤陽一研究室の前沢佳穂と申します。児童養護施設における学習ボランティアのあり方、学生と子ども・施設・地域の育ちについて発表しました。この発表までに、研究室のメンバーでたくさん準備をしました。

私たちが児童養護施設で学習ボランティアをして感じたことや、施設の方たちの思いをこの場で伝えるにはどのようにし

たらいいかとか。日本語は難しいねと言いながら、みんなで試行錯誤して準備してきました。今日、発表をさせていただいて、私たちの思いが少しでも伝わったらいいなと感じました。

これからもしっかりと、せたがや福社區民学会を経験させていただいたことを研究室の活動や自分たちの糧にしていけたらいいなと思います。ありがとうございます」

司会／ありがとうございました。

本学会は、現場の方もたくさんいらっしゃいますが、学生も勉強のために参加させていただいております。学生の発表はまだ、本当に未熟ですが、継続して続けていくことが大事なので、これからどうしていくのか、いろんな現場の方、学生にぜひアドバイスをお願いいたします。

次はパネル型の発表者の方、お願いできますでしょうか。

どちらにいらっしゃいますか？いらっしゃらないですか。

教室型、パネル型それぞれの発表には、19名の助言者の方々がいて、一つひとつの発表を聞いてくださいました。助言者の方々、ぜひ、パネルも教室も一緒だと思えますが、ご意見をいただきたいと思えます。

先生方、積極的に手をあげていただきましょう。どうぞ。

助言者の方でなくてもだれでもいいという、実行委員長の話です。何かご意見ありますか。

【グループホームかたらいの市川様】

「第7分科会の助言者を担当しましたグループホームかたらいの市川です。



ます。今日は、ご苦労さまでした。ありがとうございました」

司会／ありがとうございました。

とても素晴らしい意見をいただきました。

その他に？ 手を挙げてらっしゃる方。

【東京社会福祉士会の岡野様】



「東京社会福祉士会の岡野と申します。今日、初めて参加して、国は地域包括ケアシステムの中で包括事業として、世田谷区も取り組みをしているのかなど。発表者の話を聞いて、そんなに難しいことじゃない、肩肘を張らないでありのままの姿で参加すればいい。その成功例が2つ、印象に残りました。

1つは下馬で食べることで、つながりを持つ。根本的になぜ人が集まったかと聞いたら、縛りがいいこと。縦の関係も横の関係もない、ありのままに都合のいい人が参加すればいい、ラジカルな自由なつながりがいい。参加者が毎年、倍々ゲームで上がっていく。

もう1つは、おでかけひろばぶりっじ。公団の施設を借りて、緊急時の子ども預かり。そこの利用者も年々、増えている。その極意は、何なのかと考えたら、人の心のぬくもりを問われる社会。そのことはみんな持っている。だけど表現することは難しい時代になった。まったく見ず知らずの人に声をかけるのは度胸がいる。私自身の知恵から、子育て世代の娘さん、息子さんに一声突っ込んで言う、かわいいねと。それが、どんなにか両親の心の豊かさになるか。その少年は、私がやってみて、転居するときには挨拶に来た。なるほどと。難しいことはない。たった1つ、勇気をもって『かわいいね』と言う。

世田谷区の特養で認知症の方に食事介助をしています。最高にいい仕事だな、と。十分食べてくれる、そして、私にありがとうと言う。1人の女性がこう言いました。『あなた、ハンサムね』と。なるほど、してやられた。会話はユーモアが必要。それが我々にとって必要なのかなど。

それを今日、改めて認識させられました。以上です」

司会／素晴らしいご意見をいただきました。

東京都市大学の学生にも、地域で必ず挨拶するように話をしています。優しさをもっていても、それを実現するには勇気が必要だと話をしています。本当にありがとうございました。

他には？ お願いします。

【かたよせ会の高山様】

「はじめまして。上北沢に住んでいます高山と申します。



介護の家族会を 20 年やっております。今回、せたがや福社区民学会大会には 4 回目の参加をしました。パネルで、いろいろな写真とか作品とか、皆さんでつくったものなどをやっています。平成 9 年に立ち上げたときは、本当の介護の真っ最中の方たちでしたが、今は看取られた方が多くなりました。会員は 40 人近くいますが、ほんの 2、3 人しか、現役の方には来ていただけません。

月に 1 回第 3 木曜日に上北沢ふれあいの家でやっております。毎年 3 月に年間計画を立てて、いろいろなイベントをしています。パネルの発表の第 2 会場ですが、毎年出るたびに、改良してほしいと思っただけです。

同時発表なんです。1 つの会場の中で 4、5 つが同時に発表します。せっかく来ていただいた方から、マイクもないので、よく聞こえないという苦情がありました。

今回は第 2 会場だけかどうかわかりませんが、実行委員長の了承を得て、4 つのグループが、15 分発表・5 分が質問ということではなく、大体 1 つのグループ 10 分で、それぞれを分けて発表という形をさせていただいて、とてもスムーズに発表ができました。自分たちも他の発表されるグループが同じ部屋に展示してあるのに、同時発表は見られないのです。4 回目で、なんとかならないかと思ったら、今回はしていただきました。

これからパネルのときに同時発表は改善していただいて、それぞれの言いたいこと、聞きたいことが皆さんの耳に届くような発表の仕方を、ぜひ、これから 9 回目のときにはそういう形をとっていただければ、発表する側としてはありがたいと思います。パネルで発表された方、いかがでしょうか、私はそういうふうに思いました。どうぞよろしく願いいたします」

司会／ありがとうございました。

今回はそのような形にさせていただいたということで、また、次回もぜひ、皆さんが発表を聞けるような仕組みを次回の開催校でお願いしたいと思っております。

その他、ございますでしょうか？よろしいですか。

助言者の方、何かございますか？先生、お願いします。

【東京都市大学人間科学部児童学科教授の早坂様】

「今、パネルのご意見をいただいた第 2 会場担当の早坂です。

私もこの学会は初めてでした。通常はたくさんの方がいっぺんに発表されると、他の人の声が聞こえなかったりするので



すが。

今回、4グループで同時発表というふうに、もともと事務手続きで、マニュアルにはあったのですが、現場で、参加者の方も多くなく、むしろまとめてやるより、4つのものをちゃんと1個ずつやったほうがいいのではと、その場で実行委員長の了解を得て、そのようにやりました。大変勝手に申し訳なかったのですが、スムーズでよかったんじゃないかと思います。ご報告させていただきました」

司会／早坂先生の機転、ありがとうございました。

他にございますか？大丈夫でしょうか。

それでは、皆様ありがとうございました。

いずれの会場も、大変活発な交流が行われていた様子が伝わってまいりました。

ぜひ、この大会の成果を、明日からの実践活動や、そして次回大会につなげてまいりたいと思います。



## 次回開催校挨拶

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授  
北本 佳子

皆様、こんばんは。次期開催校の昭和女子大学の代表として、一言ご挨拶申し上げます。来年度、昭和女子大学で3回目の開催校を引き受けることになりました。来年度の開催日時は、平成29年10月1日（日）です。時期が早まりますのと、日曜開催ということで、今までと少し違った趣きになると思います。時期が早まるということを手返して、早い時期から皆様と準備を始めたいと思っています。

今、事務局と話をしている最中ですが、3回目の開催ですので、今までにない企画や今までにない取り組みもしていきたいと思っています。

地域包括ケアでは、地域の方により多く参加していただけるということで、地域に住んでいるだけではなく、昭和女子大学をはじめ、東京都市大学の学生さんも世田谷に学校がある、世田谷に勤めている方も発表ができるということですので、今まで以上に幅広い方に声をかけ、多くの方にご参加いただきたいと思います。また、大学でもそれができることを考え、土曜や平日は授業があつて教室使用が限られます。そういうわけで、日曜に開催をしますので、ご近隣の方々も気軽に聞きにこれる学会大会にしたいと思っています。

ぜひ早い段階から、皆様方のご意見やアドバイスをいただきたいと思います。来年、昭和女子大学で皆様にお目にかかれることを、楽しみにしています。

簡単ではございますが、大会に向けてのご挨拶とさせていただきます。



## 第8回大会実行委員長挨拶

せたがや福社区民学会第8回大会実行委員長  
園田 巖

皆様、お疲れ様でございました。  
こんばんは。あたりは4時半を過ぎると真っ暗ですので、「こんばんは」というご挨拶にさせていただきます。

当キャンパスは駅から少し離れていて、お越しいただくのにご不便をおかけしましたが、大きなトラブルもなく終えることができそうで非常に安堵しています。これも皆様方、会場にお集まりいただきました皆様方のご協力があったことだと、非常に感謝しております。ありがとうございました。

総括といっても、そんなに大したことは言えません。ばたばたとしておりまして、各分科会場、細切れに拝見しました。その印象について、お話ししたいと思います。

いろいろな立場、視点から様々な切り口で発表されていきました。いくつかのポイントがあると感じています。まず、1つ目。本人主体、本人が主体なんだということが、どの発表にも共通してあったという印象を受けています。本人が主役で、本人が主体。その本人が主体になったときに次の柱である、よりよく生きるためには、どうすればいいのか。よりよく生きることを皆さん、目指されて、お仕事されている、活動されているなど感銘を受けました。よりよく生きるということには、自己肯定感、達成感といったキーワードを大切にしながら、お仕事に取り組まれていると、いろいろな分科会で感じました。よりよく生きる、あるいは本人が主体であることの流れの中で、次に来る言葉は、細かなニーズへの対応だと感じました。それぞれ皆様方が一生懸命取り組まれている活動は、本当に本人から、いろいろなお話をうかがい、いろいろなご希望を伺い、細かなニーズを把握して、そのニーズ1つ1つに丁寧に対応している。そういった発表が非常に多かったと思います。もうずいぶん以前の話ですが、まだノーマライゼーションが日本に紹介されたばかりの頃です。国立のコロニーと言いまして、障害者を山奥の中に入れていた時代があります。個人のニーズは、まったく関係なく、本人に意向を聞くことなく、こういうやり方がいいんだという押しつけのような福祉が、当たり前のように通用していた時代があります。それからすると、本当に一人ひとりのニーズを細かく聞き取って、それについて丁寧に対応する。この取り組みはすてきだなと。皆様方が、そういったことにプライドを持って取り組む。切り口はさまざまですが、各会場を回りまして感銘を受けました。その中で、もう1つの視点として、連携が強調されていました。

サブテーマを設定するにあたり、メッセージにこめさせていただきました。『つながろう、そして育もう～世代を超えてつながろう～せたがや福祉の実践～』とメインテー



マ、サブテーマを設定しました。地域社会の中で、あるいは私たちを取り巻く状況が以前と比べて変貌していく中で、1つのこと、あるいは1つの分野、1つの機関で完結することはほぼ不可能になっています。もっと言えば、福祉の中で、高齢者の課題は、高齢福祉分野だけで考えれば解決するのかということ、そういう時代は、とっくの昔に過ぎ去っています。子どもであったり、障害であったり、細かく他の分野、関係諸機関と連携する、それ以前に地域の一人ひとりの人とつながりを持つ、それが連携につながっていく。そういった実践を今日はたくさん見させていただき、勉強になりました。



もう1つは、「世代を超えて」ということです。高齢者の発表も、いくつか見ました。保育所と連携して、赤ちゃんをお年寄りがだっこしている写真も拝見しました。地域で横のつながり、世代で縦のつながり、様々な縦横、縦横無尽につながろうとしている世田谷の福祉のあり方を垣間見て、感動を覚えました。「世代を超えて、分野を超えて」は、私どもが、今回、この大会を始めるにあたり、大切に設定したテーマです。皆様方が一生懸命、取り組まれている中で、実現できていることを感じて本当によかったと、私自身は思います。また発表に当たりまして皆様方の研究も様々で、ケース検討を非常に深く掘り下げて1つ1つケースを分析する手法。あるいは、量的にきちんと分析している手法。あるいは、一人ひとりのニーズを聞き、アンケートを行った上で質的にきちんと分析して発表されている方。それからシステムを分析して、システムそのものを構築するシステム論の発表。まさに様々な発表の仕方があり、そして、本当に深い発表もたくさんありました。世田谷の地域福祉のレベルは非常に高いと改めて感じた幸いです。特に感銘を受けましたのは、どこの分科会か失念してしまいましたが、ICFモデルを使い分析をしていました。個人の考え方、きちんと個人からニーズをくみ取り、それに対して働きかけている。本当に素晴らしい実践だと感じました。皆様方の協力や、非常に深い研究がありまして、第8回大会は大きなトラブルもなく終了できました。

いろいろと細かな点で行き届かなかった点、もっとこうした方がいいといった改善点等々、あると思います。アンケートを配っていますのでこれらのことをぜひお書きいただきたいと思います。いただいたご意見などは、次期開催校に申し送りしたいと思っています。

それから、概数ですが、本日も来場いただいた方は約 500 人ぐらいです。かなり多くの方にお越しいただきました。また、発表数は、年々多くなる傾向となっています。こういう形でせたがや福社区民学会の活動、皆様方のお仕事も含めて、ますます発展しますことを祈念しまして、私の大会の総括とします。

辺りは暗くなってきています。どうぞ、お足元にお気をつけて、怪我なくお帰りいただければと思います。

本日は、ありがとうございました。

区内障害者施設手作り品販売

休憩・交流スペース「ほっとスペース」



# 資 料 編

- せたがや福社区民学会 役員名簿
- 第8回大会実行委員名簿
- 第8回大会実績
- 団体会員名簿
- 設立趣旨

せたがや福社区民学会役員名簿

【順不同】

役職	氏名	所属／職名
会長	ながやま まこと 永山 誠	昭和女子大学大学院特任教授
理事	あげのその よしこ 上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	いまいずみ れいすけ 今泉 礼右	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	い ど ゆかり 井戸 ゆかり	東京都市大学人間科学部児童学科教授
理事	さとう こうせい 佐藤 光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	もりもと しゅうぞう 森本 修三	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
理事	よこやま じゅんいち 横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻准教授
理事	たけうち たかひと 竹内 孝仁	国際医療福祉大学大学院教授
理事	おおくま ゆきこ 大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	はせがわ みき 長谷川 幹	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
理事	かとう よしえ 加藤 美枝	世田谷区老人問題研究会理事
理事	むらた さちこ 村田 幸子	福祉ジャーナリスト
理事	やまざき じゅんこ 山崎 順子	東京都発達障害者支援センター長
理事	うへだ ゆうじ 植田 祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
理事	つじもと きくお 辻本 きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	なかはら ひとみ 中原 ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
理事	うりゅう りつこ 瓜生 律子	世田谷区高齢福祉部長
理事	ふくだ とくお 福田 とくお	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	こ が まなぶ 古閑 学	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	あたけ めぐみ 阿竹 めぐみ	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	かなざわ しんじ 金澤 眞二	世田谷区会計管理者
監事	まきの まゆみ 牧野 まゆみ	日本放送協会学園高等学校教諭

第4期 (H27. 4. 1～H29. 3. 31)

H28. 4. 1 現在

せたがや福社区民学会 第8回大会実行委員名簿

順不同

	氏名	所属/職名
◆◎	井戸ゆかり	東京都市大学人間科学部児童学科教授 学部長
◆	委員長 園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科講師
◆	副委員長 倉田 新	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆	副委員長 伊藤 陽一	東京都市大学人間科学部児童学科講師
◆		小川 清美 東京都市大学人間科学部児童学科教授
◆		小林 由利子 東京都市大学人間科学部児童学科教授
◆		岩田 遵子 東京都市大学人間科学部児童学科教授
◆		内藤 知美 東京都市大学人間科学部児童学科教授
◆		早坂 信哉 東京都市大学人間科学部児童学科教授
◆		根津 明子 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆		石井 智子 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆		紺野 道子 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆		高橋 うらら 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆		山藤 仁 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◆		木内 英実 東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◎		永山 誠 昭和女子大学大学院特任教授
◎		上之園 佳子 日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎		今泉 礼右 日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎		佐藤 光正 駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◎		森本 修三 東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
◎		横山 順一 日本体育大学体育学部健康学科准教授
◎		長谷川 幹 三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
◎		加藤 美枝 世田谷区老人問題研究会理事
◎		村田 幸子 福祉ジャーナリスト
◎		山崎 順子 東京都発達障害者支援センター長
◎		植田 祐二 世田谷高次脳機能障害連絡協議会
◎		中原 ひとみ 世田谷区特別養護老人ホーム施設長
◎		阿竹 恵 世田谷区福祉人材育成・研修センター長
		喜多村 道男 世田谷区民 世田谷区生涯大学第40期生
		橋本 睦子 社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局
		望月 明子 砧地域ご近所フォーラム2017実行委員会
		山口 公司 社会福祉法人友愛十字会砧ホーム
		大野 和啓 世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係
		八木 早知子 世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課障害者就労支援担当
		石塚 典子 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団総務課

◆印は、開催校の委員 ◎印は、学会運営委員

事務局

	千葉 律	世田谷区福祉人材育成・研修センター次長
	富樫 恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター
	木村 優	世田谷区福祉人材育成・研修センター

# 第8回大会実績

参加者数488人

内訳) 来場者315

当日スタッフ、ボランティア、理事等役員 173人(うち学生ボランティア98人)

分科会参加者 (各発表終了時の人数: 単位 人)

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
パネル型第1会場	4	2	8	2	3		
パネル型第2会場	14	9	20	11			
第1分科会	36	24	16	30	30	40	35
第2分科会	16	29	18	18	18	23	20
第3分科会	28	35	34	38	31	41	47
第4分科会	30	33	36	17	20	23	
第5分科会	8	13	18	14	17	22	20
第6分科会	11	22	27	16	17	16	19
第7分科会	30	32	65	51	47	41	

その他

- \*パソコン文字通訳(総会、全体会)及び手話通訳(総会、分科会、全体会)をお願いしました。
- \*当日は、東京都市大学はじめ会員大学の学生を含む計105人のボランティアの方々に、設営・会場案内・記録・写真撮影・休憩コーナー運営等の大会運営にご協力いただきました。
- \*区内8ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

## 団体会員名簿

(平成28年11月末現在)

	団体名
1	ハブネットせたがや
2	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
3	日本大学文理学部社会福祉学科
4	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区駒沢生活実習所
5	社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部
6	社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房
7	介護老人保健施設 ろうけんくがやま
8	社会福祉法人老後を幸せにする会 特別養護老人ホームさつき荘
9	世田谷区立千歳台福祉園
10	特定非営利活動法人 NPOはあと世田谷
11	社会福祉法人 大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所
12	有限会社 ヘルパーサービス和知
13	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム
14	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所
15	医療法人社団慈泉会 介護老人保健施設 うなね杏霞苑
16	社会福祉法人嬉泉 世田谷区発達障害相談・療育センター
17	砧地域ご近所フォーラム2017実行委員会
18	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
19	世田谷区
20	トラストガーデン桜新町
21	世田谷区生涯大学
22	社会福祉法人 福音寮
23	グループホームももちゃん
24	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園
25	社会福祉法人嬉泉 子ども生活研究所 すこやか園
26	社会福祉法人嬉泉 子ども生活研究所 おおらか学園
27	老人給食協力会ふきのとう
28	東京都市大学 人間科学部児童学科
29	世田谷福祉専門学校
30	株式会社桜丘在宅サービスセンター赤とんぼ
31	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷
32	社会福祉法人康和会 久我山園
33	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム(特養)
34	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム(短期入所)
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム(特養)
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム(短期入所)

	団体名
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム太子堂
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷一丁目介護保険サービス
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢介護保険サービス
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花介護保険サービス
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂介護保険サービス
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上町地域包括支援センター
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢地域包括支援センター
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションけやき
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション北沢
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション芦花
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 パルメゾン上北沢
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 総務課
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷区福祉人材育成・研修センター
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋
62	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区九品仏生活実習所
63	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
64	社会福祉法人せたがや檜の木会 下馬福祉工房
65	世田谷区立きたざわ苑
66	世田谷区老人問題研究会
67	駒澤大学 文学部社会学科社会福祉学専攻
68	社会福祉法人奉優会 等々力の家 居宅介護支援事業所
69	社会福祉法人奉優会 深沢あんしんすこやかセンター
70	社会福祉法人奉優会 奥沢あんしんすこやかセンター
71	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢
72	社会福祉法人奉優会 通所介護 等々力の家デイホーム
73	社会福祉法人奉優会 優つくりデイサービス喜多見

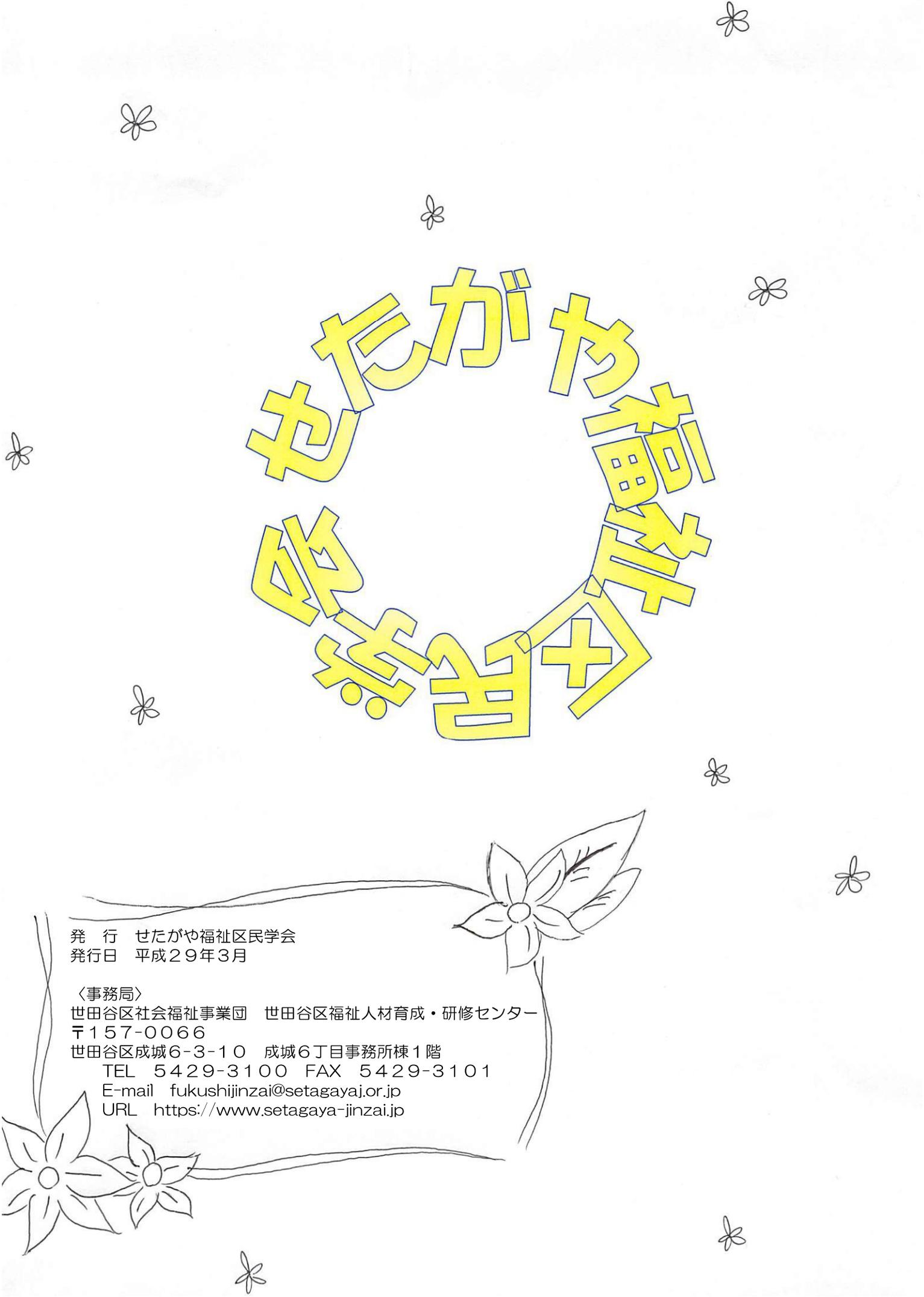
	団体名
74	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家
75	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム喜多見
76	社会福祉法人奉優会 奥沢居宅介護支援事業所
77	社会福祉法人奉優会 代沢あんしんすこやかセンター
78	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム鎌田
79	社会福祉法人奉優会 優つくり小規模多機能介護喜多見
80	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻
81	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム池尻
82	社会福祉法人奉優会 デイホーム野沢
83	社会福祉法人せたがや櫨の木会 わくわく祖師谷
84	社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 フレンズホーム
85	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
86	社会福祉法人古木会 成城アルテンハイム
87	世田谷区介護サービスネットワーク
88	日本体育大学 体育学部健康学科福祉支援専攻
89	砧自主研修グループ
90	セントケアリフォーム等々力
91	学校法人青葉学園 東京医療保健大学
92	在宅介護家族の会「フェロー会」
93	株式会社サンケイビルウェルケア・ウェルケアガーデン馬事公苑
94	株式会社やさしい手 おまかせ事業部 地域交流レストラン事業部
95	社会福祉法人せたがや櫨の木会 大原福祉作業所
96	一般社団法人 子ども・若者応援団
97	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ
98	特定非営利活動法人 若者の自立支援すみれブーケ
99	特定非営利活動法人 まひろ
100	特別養護老人ホーム 千歳敬心苑
101	介護老人福祉施設 特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ
102	NPO法人 せたがや子育てネット
103	NPO法人 ハートウォーミングハウス
104	宇奈根なごやか園
105	成城さくらそう
106	有限会社 ケアステーションたね
107	NPO法人 Ubdobe
108	日本フレンズ奉仕団 下馬あんしんすこやかセンター
109	株式会社 すずらん

## せたがや福社区民学会設立趣旨

福祉活動は、何よりも実践を基本とします。と同時に、その実践の質を高め、内容が広く地域の人々に共有されることが望まれます。世田谷の福祉活動は、地域の中で行われている実際の日常的実践について互いに発表し合い、認識し合うことによって、さらに高まっていくことでしょう。また、自分たちの実践が、地域全体から眺めれば、どのように位置づけられるのか、実践している人々が再発見することも大切です。

せたがや福社区民学会は、世田谷区の福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に対等平等な立場で、福祉実践活動の工夫や抱える課題についての研究の成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成21年12月に設立されました。





# せたがや福祉 市民会

発行 せたがや福祉市民学会  
発行日 平成29年3月

〈事務局〉

世田谷区社会福祉事業団 世田谷区福祉人材育成・研修センター  
〒157-0066

世田谷区成城6-3-10 成城6丁目事務所棟1階

TEL 5429-3100 FAX 5429-3101

E-mail [fukushijinzei@setagayaj.or.jp](mailto:fukushijinzei@setagayaj.or.jp)

URL <https://www.setagaya-jinzai.jp>